

第 1 号議案

2025 年度事業報告書

自 2025 年 4 月 1 日

至 2026 年 3 月 31 日

一般社団法人 電子情報通信学会

目 次

事業報告

1. 概況	1
2. 共通事業	4
3. ソサイエティ及びグループ事業	7
4. 支部事業	11
5. 選挙	13

事業報告（附属明細書）

I. 共通事業

1. 会議に関する事項	1
2. 出版に関する事項	2
3. 総合大会に関する事項	3
4. 選奨に関する事項	4
5. 会員に関する事項	10
6. 教育活動に関する事項	12
7. 国際活動に関する事項	13
8. 学会からの情報発信に関する事項	14
9. 規格調査会に関する事項	14
10. その他の事項	15

II. ソサイエティ及びグループ事業

1. ソサイエティ及びグループ事業概要	16
2. ソサイエティ大会に関する事項	31
3. 国際会議に関する事項	33
4. 出版に関する事項	34
5. 選奨に関する事項	35
6. 研究会等に関する事項	43
7. ソサイエティ及びグループ会員に関する事項	45

III. 支部事業

IV. 2025年度役員及び代議員の構成

V. 2026年度役員候補者及び代議員の選挙

2025 年度事業報告

1. 概況

昨今の社会情勢を振り返ると、国内においては、少子高齢化による人口減少が一層進行し労働力不足による経済成長の頭打ちが懸念される状況となっている一方、生成 AI の進化と活用の拡大による労働力余剰の懸念が発生する複雑な状況を呈している。また、異常気象や南海トラフ地震に代表される大規模震災、地政学リスクの顕在化等、多様な脅威への備えが益々必要な状況ともなっている。

国外に目を転ずれば、経済においては米国の関税措置に代表されるグローバリズムや自由貿易体制の後退等、これまで続けてきた価値観が大きく揺らぐ状況ともなっている。経済のみならず国際秩序においても、様々な地域での戦争や紛争が続発し、格差の拡大やグローバルサウスの台頭により多極化が進展する等、これまでの秩序が大きく変わりつつある状況となっている。

このような大きな社会変化に直面する状況において、本会は学会という立ち位置で学術を磨き、そして社会に大きな影響を及ぼすイノベーションへの貢献が期待されている。本会はその期待に応えるべく、コミュニケーションの夢とそれによって実現される豊かな未来社会に向けて果敢に挑戦し、革新的技術及びイノベーションを継続的に創出する学会として大きく飛躍することを目指し、本会創立 100 周年にあたって宣言した以下の基本姿勢に則り本年度の活動を進めた。

1. 広汎な知が交流する場を作り、新たな学術領域をひらく
2. 社会課題の解決に貢献し、新たな社会のビジョンを作成する
3. 技術倫理の向上に努め、社会に向けて発信する

本会の事業は、学会全体事業（以下、共通事業という）、ソサイエティ及びグループ事業、支部事業の三つに大別されるが、それぞれ以下のような取り組みを行った。

(1) 幅広い知の融合と人材の育成、及び、会員サービス・運営の質の向上

広汎な知が交流する場を作り、新たな学術領域をひらき、会員サービスのさらなる拡充を目指して、次のような施策を推進した。主な成果を以下に示す。

① 広汎な知の交流

広汎な知が交流し、新たな学術領域をひらき、社会課題の解決や新たな社会のビジョンについて、議論や意見交換ができる機会作りを促進した。そのために、ウェビナーによる発信、研究会・大会等の魅力あるイベントを開催し、HPやメール、SNSを活用し幅広く案内、周知し、会員サービスの向上、人材育成、及び、新規会員の獲得を目指した。

② ジュニア会員制度の充実

電子、情報通信分野に若い多感な時期より興味を持ってもらい将来のリーダー育成に貢献するため、ジュニア向けHPの充実、Lineによりコラムや時事に関する情報の配信（48回）、総合大会でポスターセッションの実施、ジュニア向けWebinarを3回開催した。また、配信用に新規収録した講演コンテンツ3件をアーカイブとして公開し、コンテンツの拡充を図った。

③ プラチナクラブの充実

主に40歳以上の会員を対象に、学会を自己実現の場に使い、人生を通じた研究者・技術者としての充実感を高めるための講演会、見学会、意見交換会等の場や、経験と知識を活かした後継者支援の機会を提供する。今年度は4回の見学会・講演会（NTT西日本、京都ワークショップ、電気通信大学、トヨタ産業技術記念館）を実施した。

④ ウェビナーシリーズの充実とビデオアーカイブ拡充

下記のシリーズを定期的に配信した。さらに、それらに加え、会長就任挨拶、会長対談、研究会、大会の招待講演等を収集、アーカイブ化し、ビデオコンテンツの充実に努めた。

(ア) **IEICE ICT Pioneer Webinar** シリーズ：本会がカバーする ICT 分野において、10～20年以上にわたり活躍してきた各分野の第一人者を講師に迎え、当該技術の過去・現在・未来を俯瞰的に語っていただく本シリーズを継続した。今年度は13回実施し、毎回100名以上の視聴があった。なお、**Webinar** コンテンツはアーカイブ化しており、2026年2月以降は非会員向けに有料で提供している。

(イ) **Distinguished Lecturer (DL)** による英語講演：海外会員へのサービス向上、グローバル化の一環として、DLによる英語講演の配信を6回実施し、ビデオアーカイブ並びにYouTubeより配信している。

⑤ 維持員サービスの充実

本会を支えて頂く維持員の皆様に対して、感謝の意を表するため「維持員交流会」を3月に開催した。学会紹介、学会事業紹介、名刺交換会を実施し、本会の事業状況をご理解頂くことに努めた。

⑥ アソシエイトメンバー制度の推進

学会の利用者を増やすことで、様々な分野との連携活動、会員をハブとする活動の場を拡げ、学会の利用者を増やすため、2023年度からアソシエイトメンバー制度をスタートさせ、3年目である2025年度のメンバー登録は国内1,549名、海外386名となった。6～8通/月に学会の最新情報（研究会開催、論文特集号、大会案内）をメールでメンバーに送付した。

⑦ IEICEアンバサダーの制度化の推進

会員に対して学会活動の情報を積極的に提供することを目的として、**IEICEアンバサダー**制度を開始し、国内5人、海外1人のアンバサダーを任命した。アンバサダーに学会公式SNSを通じて直接情報発信を行ってもらうことで、会員視点からの情報提供を強化し、学会活動への理解と関心を深め、学会の認知度を向上させた。

⑧ 会員サービスサポート・運営体制の充実

学会業務デジタル化の推進や最新ICTツールの活用による学会業務の効率化に向け、シニア人材や学生アルバイトで構成した**IEICEサポートチーム**が情報システムのクラウド化を完了し、各種オンラインイベントの支援も実施した。

(2) 新たな時代に向けた学会の在り方

① 会長声明

技術革新の急進展に加え、少子高齢化やそれに伴う労働力不足、人口の都市集中、経済格差の拡大、気候変動をはじめとする環境問題など、複雑な社会問題が同時多発的に進行していることに加え、サイバー攻撃やフェイクニュースといった、技術進展に伴う新たなリスクも健在化している状況から、①研究力の強化・人材育成、②イノベーション力の向上、③サイエンスとビジネスの近接化、④新たなグローバリズムの推進を主軸とした、第7期科学技術・イノベーション基本計画に向けての提言を会長声明として公表した。その結果、2026年3月に閣議決定された第7期科学技術・イノベーション基本計画は、会長声明の方向性に一致した点を複数有するものとなった。

② 情報通信エンジニアリング部門の設立

情報通信インフラは、現代の人々の生活を支え、将来の社会にも多大な恩恵をもたらす基盤である。情報通信エンジニアリング分野の健全な発展を図り、社会の発展に寄与していくためには、情報通信インフラを総合的に運営していくことが学会に課せられた重要な使命である。

このような背景のもと、本年度、情報通信エンジニアリング部門を設立し、特別会員制度を開始した。また、具体的な活動として、2025年ソサイエティ大会において「情報通信エンジニアリング分野における効率化／DX化」、2026年総合大会において「情報通信を支える先端技術の社会実装と通信インフラの未来」をテーマとする企画セッションを実施した。また、2025年9月には土木学会との意見交換会を実施した。

③ 財務戦略

会員数の減少傾向には歯止めがかかりつつあるが、会員のボリュームゾーンである50代が定年に達する今後については、会員数減少による会費収入や論文投稿数の減少が懸念され、学会財務の持続的な安定性が危惧される状況にある。学会の持続可能な運営に向けた財務改革への取り組みとして、2024年度の理事会への提言に基づき二種研・三種研・国際会議収入の一部をソサイエティに繰り入れることを制度化し、ソサイエティにおける会議収入拡大に向けた活性化資金と2028年度以降の共通会計との収支調整に要する共益的費用の確保を進めている。

④ 多言語での論文や学会情報の提供

海外学会が英語一択による情報提供を進める現状に対して、各国の母国語での情報提供は、多様性の観点で本会の差異化要素になる。近年のAI翻訳精度向上の果実を積極的に取り込むことで多言語での情報流通が現実的なものとなっていることを踏まえ、海外の研究者に新しい学会との関わり方を提供する、英文論文誌の多言語での出版サービスのトライアルを2024年度より実施している。

⑤ 企業イニシアティブ分科会

ICT分野で活躍する企業は、業種を超えたDX、社会の仕組みのDX等、社会課題の解決がビジネスの主戦場になっている。そのような企業の期待に応えるために、特定の専門領域の枠を超えた議論の場、機会の提供が必要と考え、4分科会体制（ビジネスインキュベーション分科会、AIが相互運用される社会システム検討分科会、カーボンニュートラルICT分科会、ライフスタイルデザイン分科会）で活動を実施した。平行して、ソサイエティ大会、総合大会の大会企画、東京支部シンポジウムにおいて、これらの活動状況について報告を行った。

⑥ Advanced Research Track (ART)

電子情報通信分野の大学や大学院の学生就職活動は年々、早期化、過熱化しており、大学や

大学院での教育や学術研究に支障をきたす状況になっている。こうした状況を打破し大学や大学院生の教育機会を尊重した求人スタイルへの移行を目指して、顕著な研究業績をあげた学生員とハイレベルな研究人材を求める企業をマッチングさせるイベント、第2回 Advanced Research Track (ART) を2026年2月に開催している。第2回 ARTには企業7社が参加し多数の学生によるポスター発表が行われた。

⑦ 未来60年賞（外部資金による新規選奨）の創設

選奨は学会活動を活性化する重要な要素であり、その拡充は本会の発展に不可欠なものであるが、新たな選奨の設置に要する資金を内部で確保することは容易ではない。そのため、外部資金導入による新規選奨設置を促進するガイドラインを制定し、寄付金を原資とした新たな選奨の設置に取り組んできた。この取り組みの結果として35歳以下の若手研究者、技術者を対象とした未来60年賞を設置し、2025年度の初回審査に25名の応募者を集め、総合大会と併催した発表審査会において8名の最終審査候補者から受賞候補者を選定した。

(3) 論文誌の価値向上

英文論文誌のインパクトファクター向上に向け、非会員による論文投稿、学会HPのトップページより主要論文の紹介、論文アクセス数上位の論文の周知等のこれまで実施してきた取り組みを継続している。オープンアクセスについても積極的な対応を継続、J-STAGEにおいてED(2020年1月より)、EA(2022年10月より)、EC(2023年8月より)の3誌が、IEEE Xploreを通じてComEX(2023年10月より)、EB誌(2024年2月より)の2誌が、オープンアクセス対応を継続している。また、2024年4月に開始した英文論文誌への大幅なアクセス数の増加を狙った、多言語翻訳プラットフォームを活用した英文論文誌の母国語での購読サービスのトライアルを継続している。これらの既存の取り組みに加え、新たな論文誌強化施策を検討する検討チームを立ち上げ、高インパクトファクターを狙う新誌の創設を含めたこれまでとは異なる方向での議論も進めている。

2. 共通事業

(1) 各種会議

2025年6月5日の定時社員総会において、植松会長、辻次期会長を代表理事とする2025年度役員体制を発足させた。理事会9回の開催をはじめ、理事会傘下の各種委員会等を開催し、学会の円滑な運営を行った。また、支部との連携強化を目的として支部長が、情報通信エンジニアリング部門立上げへの対応のため当該部門長が、理事会にオブザーバーとして参加した。

(2) 出版

本会の「実施事業」の柱である会誌発行事業については、2025年度は、12冊、合計190,800部（月平均15,900部）を発行配布した。読みやすく、親しみやすい会誌を目指して、企画を行い、特集・小特集を原則毎号企画した。

また、2027年度の公益目的支出計画終了を見込み、それ以降の会誌の在り方を提供メディア、事業収支、ユーザインタフェース等を対象に検討するアドホックを設置して議論を進めた。

知識ベースアクセス件数は累計で 790 万件となり広く利用されている。

出版事業として、大学シリーズの重版 2 点、レクチャシリーズとして重版 4 点を発行した。

(3) 総合大会

総合大会は、2026 年 3 月 9 日（月）から 14 日（金）にかけて、九州産業大学で開催された。本年度もプログラム委員会を組織し、企画・準備を進め、大会の活性化と魅力向上を図った。具体的には、40 の企画セッション、ランチョンセミナー、スポンサードセッション、学内ツアー、IEICE Expo 福岡 2026（企業展示）などを実施し、参加者に多様な選択肢を提供した。また、大会プレイベントとして、9 日（月）GlobalNet Workshop; GNW と International Reception Party ; IRP も開催した。11 日（水）にはプレナリーセッションが開催され、植松友彦会長による会長講演、安浦寛人先生と甘利俊一先生による基調講演が行われた（甘利先生の基調講演はビデオ講演）。さらに、プレナリーセッション内では学術奨励賞授賞式、教育功労賞授賞式、フェロー称号贈呈式、未来 60 年賞チャレンジコンテスト結果発表が実施された。その後開催された懇親会には 270 名以上の参加者が集まり、盛況となった。また、12 日（木）には全ソサイエティ合同で若手会員に学会の魅力伝える Welcome Party が実施された。なお、参加者数は 4,321 名、公募講演数は 2,245 件であった。

(4) 選奨

第 87 回功績賞を 3 名に、第 63 回業績賞イ号を 3 件 4 名に、第 63 回業績賞ロ号を 3 件 8 名に贈呈することを決定した。

第 82 回論文賞を和英論文誌 8 誌から選んだ 12 編に、第 7 回最優秀論文賞をその中の最も優秀と認めた 1 編に贈呈することを決定した。

第 12 回末松安晴賞を 2 名に贈呈することを決定した。

第 88 回学術奨励賞を 40 名（基礎・境界/NOLTA ソサイエティ 6 名、通信ソサイエティ 22 名、エレクトロニクスソサイエティ 8 名、情報・システムソサイエティ 4 名）に対し贈呈した。

第 10 回教育優秀賞を 3 名に贈呈することを決定し、第 10 回教育功労賞を 7 名に贈呈した。

(5) 会員に関する事項

定款に基づき、名誉員に 2 名を推薦することとした。

規則に基づき、フェロー称号を 23 名に、シニア会員称号を 61 名に贈呈した。

会員数（名誉員・正員・学生員、ジュニア会員、維持員、購読会員）合計については、2025 年度末で 23,241 名となった。

(6) 教育関連活動

我が国の産業界における電気・電子系技術力の維持、向上を目的とし、日本工学会のECEプログラムの認定を受けた「電気・電子系高度技術者育成プログラム」を実施した。2025年度の受講者数は47名であった。

JABEE の学部認定審査については、2025 年度も定常的な活動を行った。JABEE 本体へ委員を派遣して JABEE の運営に協力するとともに、学部プログラムの審査を電気学会、情報処理学会と連携して実施した。

本会、電気学会、情報処理学会からなる電気電子・情報系 CPD 協議会については、情報交換を中心に実施した。また、日本工学会の CPD 協議会・CPD プログラム委員会には委員を派遣して継続的に議論に参画した。

電子情報通信分野の第一人者が入門者向けに、グローバルに話題となっている最新技術について分かりやすく講義する IEICE 先端セミナーについては、2025 年度新たに①生成 AI の応用、②暗号技術の進化と未来、③ニューロモルフィック・リザバーコンピューティングの基礎と応用技術の 3 コースを制作した。なお、本セミナー参加者は設問に答えることでデジタルバッジを取得できる。

小中高校生を対象とした科学教室については、支部活動の一環として 2025 年度も継続して実施した。

(7) 国際活動

国際委員会では、Distinguished Lecturer (DL) による英語 Webinar を継続的に開催し、リアルタイムのストリーミング配信とともに、コンテンツのアーカイブ化により、見逃し配信を可能とし、国内外のより多くの視聴者に届ける取り組みを進めている。

国際セクション代表者との意見交換の場である All Sections Meeting を 2025 年度は、3 月 30 日（月）にオンライン形式で開催、国際委員会委員やセクション代表に加え植松会長を招聘し、国際化推進等について活発に議論した。

さらに、日本国内で学ぶ留学生と若手研究者との間での学術コミュニティ形成を支援することを目的として、英語ポスターセッション（GlobalNet Workshop）の第 6 回（2025 年 9 月 8 日に岡山にて）と第 7 回（2026 年 3 月 9 日に福岡にて）を開催した。

(8) 規格調査会

規格調査会活動として、委員会議を 4 回、専門委員会及び小委員会を 40 回開催した。国際標準化に関して取り扱った IEC 文書は 63 件であった。

(9) 外部機関との連携等

ICT 分野では従来の範囲を超えた他分野との連携が重要となってきたおり、府省や他学会との連携活動を推進した。府省関連では、ソサイエティ大会企画セッションにおいて、「科学技術・イノベーションの推進に向けた日本の取組と電子情報通信技術への期待」というテーマで、内閣府、総務省、文科省、経産省から講演を頂いた。2026 年 2 月には、総務省国際戦略局幹部と会長を初めとする本会役員、支部長ら 29 名との第 17 回意見交換会を開催し、国の技術政策と学会の役割等について情報交換を行った。日本機械学会とは、日本機械学会の 2025 年度年次大会において連携企画セッションを開催、電気学会とは、2026 年 2 月に役員懇談会を実施し、両会の抱える課題への取組状況の共有、今後の連携への意見交換を行なうと共に、令和 8 年電気学会全国大会において共催シンポジウムを開催した。さらに、電気・情報関連学会連絡協議会活動を継続した。MCPC との相互協力関係として、相互の会員に活動を周知するため、HP 上のバナー交換を行った。

また、他団体等との連携については、関連学術団体等に対して 176 件の協賛・後援等を行った。

3. ソサイエティ、グループ及び部門事業

(1) ソサイエティ、グループ及び部門事業

2025年度も、各ソサイエティ及びグループごとに、会員の研究成果の発表と議論の場を提供する事業を中心に、特色のある活動を推進した。

① 基礎・境界ソサイエティ (ESS) は、本会の全研究分野に対する基礎領域及び境界領域における研究活動を担うとともに、新領域の創造を推進するという重要な役割を果たしている。しかしながら、昨今の学会全体での会員の減少や、それに伴う若手会員への学会運営に関する負担増加の問題を考えると、研究面のみならず、ソサイエティ運営の在り方についても継続的な検証と改善が不可欠となっている。2025年度は、新規会員獲得に向けた若手・ジュニア世代へのアウトリーチ活動、ならびにソサイエティ誌多言語化の取り組みなどを含めた国際活動への貢献を強化するとともに、研究会活動の活性化に向けた研究専門委員会のグループ化に関する取り組み、さらに持続可能な運営体制に向けた改革に取り組んだ。

② 通信ソサイエティ (CS) は、通信システム・通信ネットワークに関する基盤から応用技術、およびその近傍領域を研究活動領域としている。これらの領域における学術の発展、産業の興隆並びに人材の育成を促進し、豊かなコミュニケーション社会の形成と地球環境の維持向上に貢献するべく活動を行っている。2025年度はポストコロナ時代の活動の在り方が問われる年度となった。通信ソサイエティの活動もハイブリッド型の活動と対面型の活動の両方が行われ、特別研専や分野横断型研専の新設、産学活性化に向けた取り組みなど、コロナ禍以降の変化に対応した活動を進めている状況である。

研究会活動においては、新たな展開を目指した研究会運営を行った。量子通信・ネットワーク特別研専 (QCN) の発足、通ソ有線無線連携 WG の設立など、新規研究領域の開拓、産学活性化に向けた取り組みを進めた。また通ソ若手研究奨励賞の選考が実施され、ソサイエティ大会の通ソ表彰式で表彰された。一方で研究会活動の活性化のために、その運営サポートのための施策の検討も行っている。

国際交流では、通信ソサイエティのフラグシップ国際会議である ICETC2025 を、2025年11月に大阪 I-site なんばで、APCC2025 と併催 (基調講演は共同開催) の形式で開催した。ICETC2025 では採択された Oral 論文を、IEEE Xplore に掲載した。また APCC 創設 30 周年記念セッションが開催され、30 年間にわたる APCC 開催への貢献に対する感謝の意を表して IEICE-CS に記念楯が贈られた。さらに国際交流として、IEEE AP-S との連携協定の締結、ならびに CIC、KIEES、KICS とのシスターソサイエティ連携協定が更新された。その他各研専における海外での研究会開催の取り組みが再開されるなど、コロナ前に行われていたような国際化に向けた動きも活性化している。

出版活動においては、英文論文誌 (EB) および ComEX の IEEE Xplore への掲載が継続された。これらにより、EB 及び ComEX 両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクターまた、通信ソサイエティ論文誌の投稿数増加に向けた推薦論文制度の活用について、編集会議と研専運営会議が連携し、より多くの論文を推薦する

施策を積極的に推進している。

会員事業企画においては、ICETC2025 の運営やシスターソサイエティ協定の締結、メーリングリストや Web ページでの情報発信を行った。通信ソサイエティの海外情報発信および海外会員の維持・増強を強化する施策として、紙媒体による情報提供に加えて、海外会員がアクセスしやすい通信ソサイエティポータルサイトを構築・公開し、海外会員が本会情報（論文誌や国際会議等）へアクセスすることを容易とした。今後も、オンラインツールを活用した情報発信を国内外の会員に対して継続的に行うとともに、海外会員がアクセスしやすいポータルサイトの整備等、投稿機会の増加や通信ソサイエティの国際化に向けた活動も積極的に進めていく予定である。

- ③ エレクトロニクスソサイエティ（ES）は、電子情報通信システムを構成するエレクトロニクスやフォトニクスの材料、部品、デバイス、サブシステムに関する基礎から応用までを研究活動領域としている。この領域における我が国の産官学連携促進や科学技術の進歩への貢献、会員（研究者）の研究成果発表や研究者間の議論の場の提供を目的としている。「企画会議」、「編集出版会議」、「研究技術会議」の 3 会議体制で上記活動を効率よく実施し、会員の満足度向上を目指している。平成 28 年度から研究技術会議内に立ち上げた 3 つの領域委員会（電磁波基盤技術領域委員会、フォトニクス技術領域委員会、回路・デバイス・境界技術領域委員会）に国際会議の主催・共催・協賛や研究専門委員会活動にかかわる承認権限を委譲し、手続きを迅速化するとともに、各領域内で近接分野の研究専門委員会の合同・連携企画を推し進めている。さらに、領域間の共同企画や、研究専門委員会活動の活性化に関する共通の課題は、領域連携会議にて議論を進めている。

2025 年度、エレクトロニクスソサイエティでは研究分野の拡大や技術分野の活発化に繋がる研究者の「気づき」を導くことを意識した特別講演会を開催した。ソサイエティ大会のプレナリーセッションでは「宇宙開発×エレクトロニクス」と題し、かつてないスピードと技術革新の中で進展を続けている宇宙開発にフォーカスをあて、これを支える鍵となるエレクトロニクス技術、特にセンシング分野における全体構想や、求められるデバイスなどについて、第一線で活躍される講師をお招きして幅広く議論することを目的として開催した。今回特別講演 3 件と表彰の時間を分離せずに、交互に実施することで聴講者を飽きさせない工夫を行ったが、一定の効果があったと考えられる。講演においては、天文学における最新の知見から始まり、宇宙機に利用される LiDAR の原理や要求技術、そして最後に衛星にかかわるビジネスについての講演と、宇宙技術とエレクトロニクスのかかわりを幅広く扱い、聴講者からも好評であった。また、総合大会のプレナリーセッションでは、「エレクトロニクスで躍動するスタートアップ」と題し、動画配信や AI 普及の進展による通信トラフィックの爆発的な増大によりさまざまな課題が顕在化している中、これを解決するスタートアップ企業に注目し企画した。エンタープライズ仕様の無線メッシュネットワークの研究開発から事業化に至る道のりの概観とともに、大学発シーズの事業化にかかる様々な課題に対する取り組みを講演いただき、研究成果の社会普及に関してたくさんの気づきを得ることができ、好評であった。また、学生員や若手会員が先輩研究者と自由に意見交換ができる場の構築を目的に全ソサイエティ共催の Welcome Party を開催し、エレクトロニクスがオープニングの企画・司会を務めた。さらに、ベトナムセッションとの国際セッション

ではエレスが中心となって企画、オーガナイザを担当した。

また、組織自体のサステナビリティを担保、つまり将来にわたり魅力あるエレス活動を目的として、委員会等活動の効率化や将来を見越した活動に向け、各種研究会や国際会議の運営の方針について議論を深めた。

今年度は5回の執行委員会も、ハイブリット会議と、完全オンライン会議でメリハリをつけるソサイエティの運営を行い、より次世代に繋げられるよう効率化を進めた。

- ④ 情報・システムソサイエティ (ISS) は、情報処理技術とコンピュータ・通信・人間を融合したシステム化技術に関する基礎から応用までの分野を研究領域としている。本ソサイエティの役割は、会員に研究発表と交流の場を提供することであり、ひいては重要な社会基盤である情報技術分野の持続的な発展と情報社会での様々な問題解決に貢献することにある。ISS が、同研究分野の活動の基盤としてメンバーの活動を支援・促進し、もって社会的役割を果たしていくために、2025 年度も引き続き、論文誌、研究会、総合大会・FIT、ソサイエティ誌、及びこれらソサイエティ活動に関する広報の強化に重点を置いて活動を展開した。

- ⑤ NOLTA ソサイエティ (NLS) は、2025 年度において、前年度の対面開催を軸とした活動を継続しつつ、ソサイエティの組織基盤を維持し、さらなる国際展開を推進した。

国外への積極的な展開としては、Korea Multimedia Society (KMMS) との MOU の更新を行い、2025 年 7 月 21 日に調印式を執り行った。本覚書の期間は 5 年間であり、2030 年 6 月に満了する。あわせて、国際的な学術交流の一環として、Professor Jun Heo (Korea University) による英語ウェビナーを公開した。このほか、前年度と同様に研究会や大会等の対面開催を原則とする方針を維持し、各委員会での定期的な状況確認や、他学会への協賛・技術共催を通じた協力関係の推進、さらには IEICE 先端セミナー「ニューロモルフィック・リザーバーコンピューティングの基礎と応用技術」の公開、刷新したウェブサイトや NOLTA Journal のフライヤー等を活用した広報活動にも注力し、NLS の活動を広く発信することに努めた。

- ⑥ ヒューマンコミュニケーショングループ (HCG) は、人間中心の新しいヒューマン・コミュニケーションエンジニアリングに関する学際的研究の推進を目的として 1995 年度に発足し、様々な研究領域を取り込みながら学際的研究を推進している。工学研究者だけでなく、人文科学、社会科学系の研究者も多く参加しており、様々な観点から自由で開かれた議論を行う場を提供している。長年の活動により、関連分野の発表の場として認識されており、当該関連分野の研究者にとっての電子情報通信学会の入り口的役割を果たしている。

2025 年度は、前年度から継続して、各研究会や HCG シンポジウムの企画・実施がなされた。論文誌での特集号の企画は従来通り継続され、学際研究の発表・議論の場を提供した。総合大会においては、HCG と他ソサイエティとの連携の場として、3 年連続で企画セッションを実施した。

- ⑦ 情報通信エンジニアリング部門 (ICE) は、デジタル社会の根幹を支える情報通信インフラの持続的かつ健全な発展を促し、社会の発展に寄与することを使命としている。情報通信インフラは現代の生活を支えるのみならず、将来世代にも恩恵をもたらす重要な社会基

盤である。このような背景を踏まえ、情報通信エンジニアリング分野を横断的・総合的に扱うソサイエティ相当組織として、2025年6月にICEを発足させた。発足間もない部門を早期に軌道に乗せるためには、活動の枠組みを体系化し、これを推進する組織体制を迅速に整備することが不可欠である。発足初年度である2025年度には、ソサイエティ大会及び総合大会における企画セッションの開催、土木学会との意見交換会の実施、企画会議、財務会議、協議会の設置検討を実施した。

(2) ソサイエティ大会

- ・ソサイエティ大会を2025年9月8日(月)～12日(金)に岡山大学津島キャンパスで開催した。参加者2,367名、公募講演数は1,144件であった。
- ・FIT2025(第24回情報科学技術フォーラム)を情報・システムソサイエティ、ヒューマンコミュニケーショングループ及び情報処理学会が合同して、2025年9月3日(水)～5日(金)に北海道科学大学(ハイブリッド開催)で開催した。参加者2,277名(現地来場者1,349名)、講演件数は698件であった。

(3) 国際会議

17件の国際会議を開催した。

(4) 論文誌等出版

- ・和・英論文誌8誌のオンラインジャーナルを以下のとおり公開した。
 - ◇ 和文誌：掲載総ページ数：1,635ページ(参考：前年1,584ページ)
 - ◇ 英文誌：掲載総ページ数：5,791ページ(参考：前年4,722ページ)
- ・ソサイエティごとの電子ジャーナルとして、NOLTA(NOLTAソサイエティ：年4回)、ComEX(通信ソサイエティ：月1回)、ELEX(エレクトロニクスソサイエティ：月2回)をそれぞれ発行した。
- ・各ソサイエティ及びグループから、それぞれニューズレターやソサイエティ誌が出された。

(5) 選奨

- ・基礎・境界ソサイエティ：功労賞2名、貢献賞39名
- ・NOLTAソサイエティ：貢献賞6名
- ・基礎・境界ソサイエティ/NOLTAソサイエティ：Fundamentals Review ベストオーサー賞1編
- ・通信ソサイエティ：ソサイエティ論文賞11編、マガジン賞1編
- ・エレクトロニクスソサイエティ：ソサイエティ賞3件、レター論文賞該当なし、ELEX Best Paper Award 2件、招待論文賞1件、エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞 総合大会6名、エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞 ソサイエティ大会6名
- ・情報・システムソサイエティ：ソサイエティ論文賞該当なし、活動功労賞9名、査読功労賞10名、船井業績賞1件、船井ベストペーパー賞3編、FIT論文賞8編、FITヤングリサーチャー賞10名
- ・ヒューマンコミュニケーショングループ：ヒューマンコミュニケーション賞6件、HCGシンポジウム賞21件

(6) 研究会

各ソサイエティ、グループで開催された第一種研究会の開催数と発表件数は次のとおり。(ただし共催、連催等の場合は、それぞれで重複集計。)

・基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ	98回	2,318件
・通信ソサイエティ	133回	2,380件
・エレクトロニクスソサイエティ	81回	1,202件
・情報・システムソサイエティ	101回	1,886件
・ヒューマンコミュニケーショングループ	19回	342件

(7) 会員数 (2025年度末)

・基礎・境界ソサイエティ	4,176名
・通信ソサイエティ	8,345名
・エレクトロニクスソサイエティ	4,180名
・情報・システムソサイエティ	8,145名
・NOLTA ソサイエティ	431名
・ヒューマンコミュニケーショングループ	790名

4. 支部事業

国内 10 支部 (北海道、東北、東京、信越、東海、北陸、関西、中国、四国、九州) は、各地域に密接した活動として、支部 (連合) 大会、各種講演会、シンポジウム、見学会、学生向け・小中高生向けのイベント、学生会活動、選奨等の事業を展開した。各支部の活動概要は以下のとおり。

(1) 北海道支部

- 一般事業：講演会 1 件。支部連合大会 1 回 (室蘭工業大学)。専門講習会 1 回、総務省と意見交換会。
- 教育事業：応用物理学会企画の小中高生向けイベント (「リフレッシュ理科教室」サイエンス・オリエンテーリング in 札幌 2025) の共同主催。ロボットトライアスロン 2025 を後援
- 学生会事業：学生会主催講演会 1 件、学生会研究発表会 (インターネットシンポジウム) 1 回、学生ランチ活動として講演会開催。支部連合大会で学生交流会を企画。
- 選奨：学生奨励賞 15 名、学生会インターネットシンポジウム優秀発表賞 2 名、支部学生ランチ顧問表彰 (発表賞) 1 名、学生ランチ活動貢献賞 1 名、支部連合大会若手優秀論文発表賞 12 名

(2) 東北支部

- 一般事業：講演会 14 件 (ハイブリッド 2 件、対面 12 件)、学生と地域企業によるパネルディスカッション 2 件 (ハイブリッド 2 件)、支部連合大会 1 件、協賛・講演事業 6 件。

- 教育事業：小中高生向け事業 3 件開催。
- 学生会事業：中国支部学生会と「学生交流イベント」を、九州支部共催で「2026 年 IEICE 学生会交流イベント in 総合大会」を開催。
- 選奨：学生優秀論文賞 2 名、学生優秀発表表彰 2 名、優秀学生表彰 10 名、感謝状贈呈（座長を務めた学生）9 名、学生会活動貢献賞 1 名

(3) 東京支部

- 一般事業：シンポジウム 2 回を開催。また、見学会 4 回を実施。
- 教育事業：学校、企業、NPO と連携した共同主催の教育イベントを公募し 5 件を採択し、実施。
- 学生会事業：講演会 1 回、見学会 1 回を開催。学会誌 12 月号「学生会だより」の記事執筆。学生員の卒業研究論文及び修士論文の紹介、研究発表会（東京都市大学 世田谷キャンパス）を開催（発表件数 146 件、うちジュニア会員 18 件）。学生ブラランチの 4 校が子供科学実験教室、講演会、交流会を実施。
- 選奨：学生奨励賞対象者 6 名、ジュニア奨励賞 2 名、学生功労賞 6 名。

(4) 信越支部

- 一般事業：支部大会 1 回、講演会 4 回（新潟地区 0 回、長岡地区 3 回、長野地区 1 回）。
- 学生会事業：研究交流会 3 回開催（新潟大・信州大学・公立諏訪東京理科大学）。
- 選奨：学生奨励賞 8 名、高専学生奨励賞 3 名、優秀論文発表省 10 名、ベストプラクティス賞 3 研究室。

(5) 東海支部

- 一般事業：講演会 2 回、見学会 1 回、専門講習会 1 回、プラチナクラブ 1 回、支部連合大会 1 回。
- 学生会事業：講演会 1 回、学生研究発表会 3 回、卒業研究発表会 1 回。
- 選奨：学生研究奨励賞 13 名、卒業研究発表会表彰 7 名、学業成績優秀賞 34 名。

(6) 北陸支部

- 一般事業：講演会 2 回。シンポジウム、講演会等の共催、協賛、後援を 2 件。支部連合大会 1 回。
- 学生会事業：学生向け講演会・学生交流会 1 回。
- 選奨：優秀論文発表賞 19 名、優秀学生賞 11 名。

(7) 関西支部

- 一般事業：講演会 1 回、見学会 1 回、講習会 4 回開催。
- 教育事業：公開講座 1 回。
- 学生会事業：講演会 1 回、研究発表会 1 回開催。
- 選奨：学生会支部長賞 奨励賞 4 名、優秀論文発表賞 5 名、学生会功労賞 10 名。

(8) 中国支部

- 一般事業：講演会 14 回（主催・共同主催 4 回、共催等 10 回）、見学会 2 回（電気学会および中国・四国工学教育協会との共催）、専門講習会 1 回、シンポジウム等の後援 4 回、電気記念日行事共催 1 回、支部連合大会 1 回。
- 教育事業：学生を対象にしたアイデア・作品のコンテスト（フレッシュ IT あわ〜ど 2025）を主催
- 学生会事業：学生向け講演会。学生自主活動としてフレッシュ I T あわ〜ど実行委員、支部ホームページの維持、管理、改訂。
- 選奨：連合大会奨励賞 13 名、優秀卒業生表彰（高校・高専・短大）57 校 89 名、学生功労賞 9 名

（9）四国支部

- 一般事業：講演会 2 回、専門講習会 2 回、支部協賛・後援事業 1 回、支部連合大会 1 回。
- 学生会事業：学生向け講演会 2 回開催。2 校の学生ブランチが講演会、見学会、交流会等の活動を実施。
- 選奨：電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞 51 名

（10）九州支部

- 一般事業：特別講演会 1 回（ハイブリッド）、一般講演会 2 回開催。協賛・後援の講演会/シンポジウム 10 件。専門講習会 1 回開催、アンテナ伝搬基礎講座 1 回開催（オンライン）、支部連合大会 1 回、総合通信局連携企画 1 回。
- 教育事業：子供の科学教室 1 回、ものづくり教室 1 回（有明高専と共催）。
- 学生会事業：学生会講演会 1 回、学生ブランチ交流会の実施。11 ブランチが講演会や交流会実施。IEICE 学生会交流イベント in 総合大会を東北支部と共同開催。
- 選奨：連合大会講演奨励賞 8 名、学生会講演奨励賞 14 名、成績優秀賞 57 名、学術奨励賞 24 名

5. 選挙

2026 年 2 月 3 日～3 月 3 日に、Web 投票により 2026 年度役員候補者及び代議員の選挙を実施した。2026 年度代議員として 105 名が選ばれた。

以上

2025 年度事業報告（付属明細書）

I. 共通事業

1. 会議に関する事項（定款 第 4、6、9 章）

1. 1 2025 年定時社員総会

2025 年 6 月 5 日（木）午後 2 時から機械振興会館において 2025 年定時社員総会を開催した。代議員総数 106 名に対し、出席代議員数 86 名（委任状を含む）で、定款第 19 条に定める代議員総数の過半数に達した。山中会長を議長として以下議案を付議して、審議事項はいずれも原案どおり可決承認された。

- 第 1 号議案 2024 年度事業報告
- 第 2 号議案 2024 年度決算（審議事項）及び監査報告
- 第 3 号議案 公益目的支出計画実施報告及び監査報告
- 第 4 号議案 2025 年度事業計画
- 第 5 号議案 2025 年度収支予算
- 第 6 号議案 定款変更（審議事項）
- 第 7 号議案 新理事・監事の選任（審議事項）

1. 2 理事会

年度内に 9 回の理事会を開催した。

1. 3 理事会傘下の委員会等の開催状況

- ・企画戦略室：7 回
- ・倫理委員会：0 回
- ・選奨委員会：メール審議 2 回
- ・功績賞・業績賞委員会：2 回
- ・論文賞・学術奨励賞委員会：メール審議 4 回
- ・末松安晴賞委員会：1 回
- ・教育賞委員会：2 回
- ・未来 60 年賞委員会：3 回メール審議 5 回
- ・フェローノミネーション委員会：1 回
- ・シニア会員審査委員会：メール審議 1 回
- ・アクレディテーション委員会：メール審議 2 回
- ・男女共同参画委員会：2 回
- ・サービス委員会：6 回 メール審議 9 回
- ・アドホック会合：13 回
- ・国際委員会：5 回、メール審議 9 回
- ・大会委員会：4 回、メール審議 1 回
- ・著作権管理委員会：2 回、メール審議 6 回
- ・編集連絡会：4 回
- ・会誌編集委員会：6 回
- ・出版委員会：0 回、メール審議 1 回
- ・教科書シリーズ特別委員会：0 回
- ・ハンドブック／知識ベース委員会：5 回
- ・支部会議：2 回
- ・財務委員会：4 回
- ・研究会連絡会：4 回
- ・規格調査会委員会：4 回
- ・教科「情報」の入試に関する検討 WG：0 回
- ・若手 WG からの提言に対する検討アドホック：0 回

1. 4 その他の会議等

- ・名誉員・歴代会長を囲む懇談会：2025 年 10 月 15 日機械振興会館にて開催。

2. 出版に関する事項

2. 1 会誌の発行状況（定款 第4条 イ号）

全会員に共通の場として重要なメディアである会誌は、2025年4月から2026年3月まで12冊、合計190,800部（月平均15,900部）を発行配布し、読みやすく、親しみやすい会誌を目指して企画・編集を行い、特集・小特集を原則毎号企画した。

電子化の対応としては、毎月順調に会誌記事を配信した。

また、公益目的支出計画が終了する2027年度以降に向けて、会誌の将来の在り方をメディア・財政面・インタフェースを中心に審議する会誌将来検討アドホックを立ち上げ、議論を開始、2025年度は4回開催した。

2025年度の会誌記事の内容・件数及びページ数は次のとおりである。

種 類	件数	ページ	種 類	件数	ページ数
4月小特集			編集長退任にあたって	0	0
(ロボット介護機器の展開に向けた環境整備)	6	28	会長対談	3	25
5月特集			解説	33	193
(未来を創る情報通信エンジニアリング)	6	29	講座	4	21
5月特集			総合報告	0	0
(通信インフラの災害時対応及び防災・減災に向けた通信技術——令和6年能登半島地震を風化させないために——)	9	59	ジュニア会員のページ	1	4
6月小特集			寄書	0	0
(宇宙で使っても壊れないハードウェア開発の最前線)	6	39	回想	1	4
8月小特集			学生／教養のページ	3	15
(生成AIの光と影——安全な活用と未来への展望——)	7	34	オピニオン	1	9
9月小特集			コラム	1	4
(STEAM教育の力——教育における創造性、コラボレーション、イノベーション——)	7	27	ニュース解説	25	41
10月小特集			ニュースフラッシュ	0	0
(ミリ波・テラヘルツ技術は未来のセンシングを変えるか?——電波センシング・イメージングの最新動向——)	5	25	知識の森	19	49
11月特集			ソサイエティのページ	3	7
(分子ロボティクス技術の進展)	11	84	EiC記事	16	40
12月小特集			情報初・今学会では	0	0
(シリコンフォトニクス産業展開と新応用)	7	45	学生会だより	10	34
1月特別小特集			予定目次	11	1
((電子・情報・通信で)子供と遊ぼう)	7	25	学会ニュース	0	0
2月小特集			慶賀	0	0
(人間社会拡張)	6	39	追悼抄	3	3
3月小特集			国際会議	14	6
(マイクロ波技術・EMC設計の機械学習活用)	8	39	図書紹介	4	2
			国内文献目次		0
			図書寄贈一覧		20
			本会だより		10
			編集室	12	8
			役員等口絵		119
			総会・選奨		2
			フェロー口絵		11
			会誌総目次		2
			FR誌目次	2	0
			会報		82
			会告	12	0
			その他	0	0
			計		1,238

3月小特集 (ソサイエティ制を振り返る)	7	28	巻頭言	12
			目次	36
講演	5	25	合計	1,286

*その他：広告（カラー、前付等）57 ページ

2. 2 ハンドブック（定款 第4条 ト号）

知識ベースアクセス件数（累計）は、790 万件で広く利用され続けている。2023 年度以降は維持員向けサービスとして希望に応じてサイトにバナー広告を掲載している。

また、知識ベースの新たな試みとして、2023 年 4 月号から会誌に「知識の森」欄を新設、記事の掲載を開始している。2025 年度も引き続き、おおむね毎号 2 件、年間 19 件の記事を掲載した。併せて各ソサイエティ・グループを通じて各研究専門委員会からの提案を基に 1 年間分の内容を検討した。

2. 3 単行本（定款 第4条 ト号）

監査法人からの指導に従い適切な在庫整理を行った。

2. 4 教科書「電子情報通信学会大学シリーズ」（全 59 巻）（定款 第4条 ト号）

重版 2 点を発行した。（コロナ社委託出版）（昭和 55 年 8 月第 1 回配本以降既刊書目 52 点）

2. 5 教科書「電子情報通信レクチャーシリーズ」（全 64 巻）（定款 第4条 ト号）

大学院及び学部の学生を対象とし、併せて一般勉学者の参考に供するための教科書シリーズとして重版 4 点を発行した。（コロナ社委託出版）（2002 年 3 月第 1 回配本以降通算 40 点）

3. 総合大会に関する事項（定款 第4条 ロ号）

下記の期日・会場において、全ソサイエティ及びグループによる総合大会を開催した。なお、企画セッションのみ、Zoom 配信を行った。

期 日 2026 年 3 月 9 日(月)～12 日(金)

会 場 九州産業大学（福岡）

参加者 発表 2,402 名（企画含む）、聴講 1,894 名（無料 255 名含む）

懇親会 参加者 270 名（九州産業大学 中央会館 1 階 アルテリア Arteria）

(a) 企画セッション数

()内は 2025 年東京都市大学の数値

企画種別	大会委員会	ソサイエティ					合計	共催を除く 実数
		基礎・境界/ ヒューマン	NOLTA	通信	エレクトロニク ス	情報・シ ステム		
大会委員会企画	4(8)	—	—	—	—	—	4(8)	4(8)
ソサイエティ特 別企画	—	0(1)	0(0)	1(2)	1(2)	0(0)	2(5)	2(5)
パネルセッション	—	1(0)	1(0)	2(1)	0(0)	0(0)	4(1)	3(1)
チュートリアル セッション	—	0(1)	0(0)	1(1)	1(0)	0(0)	2(2)	2(2)
依頼シンポジウ ムセッション	—	7(6)	0(1)	14(15)	7(7)	2(1)	30(30)	29(27)
合計	4(8)	8(8)	1(1)	18 (18)	9 (9)	2 (1)	42(46)	40(43)

※備考

(2026 年) 共催企画 2 件を含む。 (2025 年) 共催企画 3 件を含む。

(b) 公募セッション講演数

()内は 2025 年東京都市大学の件数

	ソサイエティ					合計	共催を除く 実数
	基礎・境界 /ヒューマ ングループ	NOLTA	通信	エレクトロニ クス	情報システ ム		
一般セッション	241(164)	46(33)	942(784)	285(273)	370(252)	1884(1506)	1884(1506)
シンポジウムセッ ション	(0)	0(0)	27 (10)	25(12)	6(7)	58 ¹⁾ (29)	39(29)
公募ポスターセッ ション	0(0)	0(0)	16 (15)	8(0)	0(0)	24(15)	24(15)
ジュニア&学生ポ スターセッショ ン	53(45)	5(5)	41(24)	16(14)	183(146)	298(234)	298(234)
合 計[共催含む]	294(209)	51(38)	985(809)	334(299)	559(405)	2264(1784)	2245(1784)

英語による講演件数 111 件 (70 件)

キャリアエクスペローラ 305 件 (174 件)

(2026 年)

*1 通信ソサイエティ、エレクトロニクスソサイエティの共催シンポジウムセッション含む。

両セッションに重複して含まれているものがあるため、実発表数は 39 件。

4. 選奨に関する事項 (定款 第 4 条 ホ号、へ号)

今年度の各選奨は所定の手続きによって選考が進められ、次のとおり受賞者を決定した。

4. 1 功績賞 (第 87 回)

柏野 邦夫 (NTT)

藤掛 英夫 (東北大)

水落 隆司 (三菱電機)

以上 3 名

4. 2 業績賞 (第 63 回)

【選奨規程第 9 条イ号】

(業績の 50 音順・敬称略)

業 績	貢 献 者 (所 属)
学習型画像符号化に関する先駆的な研究	甲藤 二郎 (早 大) 孫 鶴鳴 (横国大)
情報幾何学および量子情報理論の建設と先駆的研究	長岡 浩司 (電通大)
マイクロ波・ミリ波ダイオード回路の IC 化とその無線システム適用への先駆的研究	伊東 健治 (金沢工大)

【選奨規程第 9 条ロ号】

(業績の 50 音順・敬称略)

業 績	貢 献 者 (所 属)
自律分散協調によるレジリエント情報通信基盤の研究開発・実用化・社会展開	井上 真杉 (NICT) 大和田泰伯 (NICT)
スピーカ背面から発生させる逆相の音波による新たな音の閉じ込め技術の研究開発と実用化	千葉 大将 (NTT) 加古 達也 (NTT) 小林 和則 (NTT ソノリティ)
超高速 Transmission Control Protocol 通信技術の研究・開発と実用化	長谷川洋平 (NEC) 地引 昌弘 (NICT) 水越 康博 (NEC)

4. 3 論文賞 (第 82 回)

(分冊別掲載年月順・敬称略)

A	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	A Common Lyapunov Function Approach to Event-Triggered Control with Self-Triggered Sampling for Switched Linear Systems 中山 翔太, 小林 孝一, 山下 裕 (北大) 2025 年 4 月号 (EA)
A	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Shield-Based Safe Control with Compensation of Computation Delays of Nonlinear Discrete-Time Systems 潮 俊光 (南山大) 2025 年 5 月号 (EA)
A	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Standard Cell Structure and Diffusion Reordering for Block Area Reduction in Double Diffusion Break FinFET Process 西澤 真一, 木村 晋二 (早大) 2025 年 6 月号 (EA)
B	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	八木・宇田アンテナを用いた 28 GHz 帯室内基地局用マルチセクタアンテナの設計と伝搬試験評価 木村 泰子, 井上 祐樹 (NTT ドコモ), 新井 宏之 (横国大) 2025 年 7 月号 (B)
B	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	Coupling Quality Factor and Friis Formula Shake Hands on Wireless Power Transfer between Dipole Antennas 阿部 晋士 (豊橋技科大), 袁 巧微 (東北工大), 大平 孝 (豊橋技科大) 2025 年 8 月号 (EB)
B	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	High-Performances Color Images Method for Estimating Radio Propagation Characteristics of Outdoor Environments 富永 貴大, 須山 聡, 北尾光司郎, 久野 伸晃 (NTT ドコモ), 猪又 稔, 山田 涉, 佐々木元晴 (NTT) 2025 年 12 月号 (EB)
C	論 文 名 著 者 名 掲 載 年 月	波長可変レーザを用いたテラヘルツ波生成法による 300GHz 帯無線信号伝送 榊富 直人, 葉 聖鴻, 貝出 凌汰, 三上 裕也 (九大), 上田 悠太 (NTT), 加藤 和利 (九大) 2025 年 1 月号 (C)
C	論 文 名	メタサーフェスによる空間・偏波多重コヒーレント受信器

	著者名 掲載年月	小松 憲人, 相馬 豪 (東大), 石村 昇太, 高橋 英憲, 釣谷 剛宏 (KDDI 総合研究所), 鈴木 正敏 (千歳科技大), 中野 義昭, 種村 拓夫 (東大) 2025 年 4 月号 (C)
C	論文名 著者名 掲載年月	"Non-Contact Characterization of Two-Dimensional Electron Gas by Using Circularly Polarized TE _{11n} Modes" 荒川 智紀, 昆 盛太郎 (産総研) 2025 年 10 月号 (EC)
D	論文名 著者名 掲載年月	大規模 DNA データベースに対する効率的な相関問合せ 八木 隆一, 直井 悠馬, 塩川 浩昭 (筑波大) 2025 年 5 月号 (D)
D	論文名 著者名 掲載年月	子宮収縮圧データに対する分娩ステージ推定 田村 優香, 松原 靖子, 木村 輔, 関谷 毅, 町村 栄聡, 遠藤 誠之, 木村 正, 櫻井 保志 (阪大) 2025 年 5 月号 (D)
D	論文名 著者名 掲載年月	Efficient Two-Party Exponentiation from Quotient Transfer 盧 儀 (東京科学大), 原 啓祐, 大原 一真, Jacob SCHULDT (産総研), 田中 圭介 (東京科学大) 2025 年 12 月号 (D)

((A)、(B)、(C)、(D) : 和文論文誌、(EA)、(EB)、(EC)、(ED) : 英文論文誌、所属は:掲載時)
以上 12 編

4. 4 最優秀論文賞 (第 8 回)

(敬称略)

論文名	八木・宇田アンテナを用いた 28 GHz 帯室内基地局用マルチセクタアンテナの設計と伝搬試験評価
著者名	木村 泰子, 井上 祐樹 (NTT ドコモ), 新井 宏之 (横国大)
掲載年月	2025 年 7 月号 (B)

以上 1 編

4. 5 末松安晴賞 (第 12 回)

(敬称略)

カテゴリ	受賞者 (所属)	研究・開発の題目
学術界貢献	孫 鶴鳴 (横国大)	深層学習を用いた次世代動画画像圧縮技術の研究と実用化
産業界貢献	宮坂 拓也 (KDDI 総合研究所)	自律型ネットワークの研究開発と国際標準化/運用者コミュニティへの貢献

以上 2 名

4. 6 学術奨励賞 (第 88 回)

基礎・境界/NOLTA ソサイエティ : 6 名			(50 音順)	
受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会 別	講演 番号
猪狩 紫雲	千葉工業大学	カードベース暗号における整数コミットメントの効率的な変換法	総大	A-7-02
伊藤 遼	新潟大学	大域文脈情報を導入した洋ナシ外観汚損検査手法の改良	ソ大	A-14-12
郭 豊愷	東京理科大学	CSPS0 のパラメータの依存性について	ソ大	N-1-26
Chenyu Zhao	北海道大学	Design of a Streaming-Based Resource-Efficient Mel Filter Bank Architecture for Real-Time Mel Spectrum Extraction on FPGA	ソ大	A-14-15
中務 太智	山口大学	感度解析に基づいたサプライチェーンのレジリエンス評価	ソ大	A-10-18

中村 謙	山口大学	単一削除訂正不能である量子単一挿入訂正符号	ソ大	A-2-03
通信ソサイエティ：22名				(50音順)
受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会 別	講演 番号
青木 宏樹	KDDI 総合 研究所	ミリ波中継器環境への適用に向けた第一フレネル ゾーンを考慮した電波伝搬モデルの一検討	総大	B-1A-03
新井 駿斗	岩手大学	マイクロ波無線電力伝送における複数レクテナの 受動チャネル推定法の実験的評価	ソ大	B-1C-16
岩崎 翔大	三菱電機	ミリ波レーダを用いた物標類識別および識別精度 の改善検討	総大	B-1C-01
遠藤 優季	九州工業大 学	金属配管を活用した無線 LAN 通信における配管内 金属遮蔽物の影響調査	ソ大	B-16-03
青木 宏樹	KDDI 総合 研究所	ミリ波中継器環境への適用に向けた第一フレネル ゾーンを考慮した電波伝搬モデルの一検討	総大	B-1A-03
大内 駿輝	広島大学	Wi-Wi を用いた同期 SS-CDMA 通信機能の USRP への 実装：サンプリングレート向上による測定系の高 精度化	総大	B-17-03
		Wi-Wi を用いた同期 SS-CDMA 通信機能の USRP へ の実装：送信タイミング制御における時刻同期誤 差の許容量の調査	ソ大	BCS-2-23
尾形 大地	古河電気工 業	インコヒーレント前方励起光源を適用した双方向 分布ラマン増幅による伝送距離の長延化と Q- factor 改善	総大	B-10B-22
		インコヒーレント励起光源を適用した双方向励起 分布ラマン増幅における前方後方励起の最適利得 比	ソ大	B-10B-05
岡本 優花	NTT	トラヒック予測に基づく輻輳制御による MMH の 低遅延化の実機評価	総大	B-8-16
梯 明日翔	日本電気	上りリンクマルチユーザ MIMO 性能を改善する低 演算量 O-RAN 基地局構成	総大	B-5A-38
片山 育星	三菱電機	ネットワーク環境モデル化による映像伝送品質評 価手法の検討	総大	B-6-47
		通信品質が遠隔ロボット操作の操作性に及ぼす影 響の検証	ソ大	B-15-14
上吉川 直輝	三菱電機	無線通信環境の変化に応じた映像伝送品質への影 響	総大	総 B-6-48
		フレーム種別ごとのパケット欠落が映像品質に与 える影響の評価	ソ大	B-6-59

亀井 大向	日立製作所	Full-Reference 法による E2E 映像品質評価に向けた 関連最大化映像フレーム同期法の検討	総大	B-11-15
北 寛登	広島大学	Evaluation of Time-Synchronization Offset for Wireless Two-Way Interferometry (Wi-Wi): Non- Line-of-Sight (NLOS) and Static Condition	ソ大	BCS-2-24
小西 陽平	KDDI 総合研 究所	Cell-Free massive MIMO における P-MMSE の GPU 利用効率改善手法	総大	B-5A-12
		Cell-Free massive MIMO のフロントホール構成に 関する一検討	ソ大	B-5A-25
高橋 馨子	NTT	スループット予測モデル学習における別タスクデ ータ転用手法	総大	B-15-18
高村 直幹	三菱電機	パッチアンテナとモノポールアンテナを組み合わ せた指向性切替アンテナの試作評価	総大	B-1B-67
永野 航太郎	NTT	無線経路の品質に応じた帯域集約手法の検討	ソ大	B-5B-11
福島 慶大	KDDI 総合研 究所	上空エリアにおけるユーザセントリック RAN の 評価実験	ソ大	B-5A-36
福島 健	NTT	ブロックチェーンを用いた無線アクセス共用にお ける接続先制御手法の比較実験評価	総大	B-11-29
		WiGig 中継局と反射板の最適配置手法に関する検 討	ソ大	B-5A-10
松下 明哲	日立製作所	大規模検査データ解析に向けた多段階データ集約 技術	ソ大	B-15-18
村上敬介	NTT	架空光ケーブル脱落による振動特性の変化に関す る検討	総大	B- 13_B10A- 05
		架空光ケーブルの支持線破断に対する異常検知技 術の評価	ソ大	B-10A_B- 13-30
山本 泰義	NTT	400 MHz 帯域 5G NR 信号の制御信号多重による A- RoF リンク 20 km 伝送 OTA 評価	総大	B-5B-19
楊智赫	名古屋大学	モバイルアドホックネットワークにおける多様な ユーザ移動性を考慮した移動制御手法	ソ大	BS-2-06
エレクトロニクスソサイエティ : 8 名				(50 音順)
受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会 別	講演 番号
紙浦 欣輝	九州大学	SiC 基板上 4 アレー InGaAs UTC-PD を用いた 300GHz ビームステアリング無線通信	総大	C-3_C-4- 36
小菅 祥平		高速光受信器を用いた IM-DD 226.875 Gbit/s/λ 20 km 伝送実証と波長分散ペナルティ評価	総大	C-3_C-4- 58

齋藤 龍ノ介	NTT イノベ ーティブデ バイス 東北大学	高速光受信モジュールを用いた LAN-WDM 4 波長 226.875-Gbit/s/λ PAM4 10 km 伝送	ソ大	C-3_C-4- 15
佐藤 弘隆	三菱電機	40 GHz 帯アクティブ 3 逓倍器を用いたマンチェス タ符号化 1-bit BPDSM 送信機の基礎検討	総大	C-2C-23
澤田 祐甫	住友電気工 業	45W 級 L/S 帯広帯域 GaN MMIC 2 段高出力増幅器 微細円形空孔からなる超小型モザイク 4 波長合波 器	総大	C-3_C-4- 60
三林 敦郎	三菱電機	三角格子上の微細円孔による 0 帯向けモザイク型 4 波長合波器	ソ大	C-3_C-4- 25
正田 宗二郎	三菱電機	フラクショナルスプリアスを異なる離調周波数に することで合成後の信号を低スプリアス化する DBF 向け分散型 LO 源	総大	C-2C-12
吉田 航	古河電気工 業	URLLC に向けたデジタルコヒーレント・RoF 混在 光伝送の検討 AI/ML 光リンク向け超小型 8 チャンネルリニアド ライブ VCSEL トランシーバ	ソ大	C-3_C-4- 17
情報・システムソサイエティ：4 名				(50 音順)
受賞者	所属 (発表時)	講演題目	大会 別	講演 番号
朝原 涼	名古屋大学	拡散モデルを用いた Depth Image Based Rendering	総大	D-11-30
奥村 亮太	東京大学	消失点制御による幾何学的整合性のある画像生成	総大	D-12-55
前田 優樹	東京大学	Human-Object Interaction Transformer の拡張 による手-操作物体-作用物体の検出	総大	D-12-51
山崎 遼也	一橋大学	順序回帰のための近似的単峰尤度モデル	総大	D-20-05

4. 7 教育優秀賞 (第 10 回)

(50 音順・敬称略)

氏名(所属)	教育関連成果のタイトル
藤代 一成 (慶大)	コンピュータグラフィックス・可視化技術教育の振興および標準化
皆本 晃弥 (佐賀大)	数理・情報分野の教科書執筆とデータサイエンス教育の全学・高大社展開
八重樫 理人 (香川大)	システム内製化技術を中心としたデジタルトランスフォーメーション推進人材育成プログラムの開発

計 3 名

4. 8 教育功労賞 (第 10 回)

(50 音順・敬称略)

氏名(所属)	教育関連成果のタイトル
奥津 良之 (アズビル)	「電気・電子系高度技術者育成プログラム」の企画・立上げ・運

	営
道下 尚文 (防衛大)	論文の書き方講座による若手の論文作成能力向上に対する貢献
松本 正 (北陸先端大)	無線通信システムの数理的設計手法の講師としての貢献
北神 正人 (千葉大)	技術者教育認定活動における審査への貢献
西園 敏弘 (日大)	技術者教育認定活動における審査への貢献
東盛 裕一 (ツルギフォ トニクス財団)	研究会・国際会議学生発表への支援を通じた光分野教育への貢献
久保木 猛 (広島大)	学生・若手研究会主導による研究者教育と啓発活動への貢献

計 7 名

5. 会員に関する事項 (定款 第 3 章)

5. 1 名誉員の推薦

定款の定めにより以下の 2 名を名誉員に推薦した。

榎本 忠儀 (中 大)

橋本 修 (青学大)

5. 2 フェロー称号の贈呈

[基礎・境界ソサイエティ：4名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
小林 春夫	数理的手法によるアナログ・デジタル変換器の設計・解析・試験
夏目季代久	動物脳モデルの知見を元にした脳波を用いた BMI システム研究
福島 和英	難読化技術実用化と耐量子計算機暗号安全性評価の先導研究
宮地 充子	楕円曲線暗号と双線形暗号の基盤技術確立と社会実装の先駆的展開

[通信ソサイエティ：7名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
荒川 豊	行動認識と行動変容支援に関する学際的研究
重松 昌行	光ファイバ増幅器を用いた波長多重伝送に関する研究開発と実用化
中尾 彰宏	情報科学と情報通信の融合による次世代サイバーインフラの研究
平栗 健史	通信技術を基盤とした農業 ICT の学際的研究開発
福島 荘之介	航空機進入着陸のための衛星航法補強システムの研究開発と実用化
星田 剛司	高ひずみ耐性デジタルコヒーレント光受信機の研究開発
道下 尚文	電磁メタマテリアルのアンテナ応用に関する研究

[エレクトロニクスソサイエティ：4名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
石樽 崇明	有機ポリマー光導波路の設計・作製と通信応用に関する革新的研究
田中 慎一	ヘテロ接合バイポーラトランジスタの開発と超高周波回路への展開
西川 健二郎	マイクロ波・ミリ波分野における小型高集積化技術の開発
宮本 智之	新材料活用の VCSEL 高性能化と光無線給電展開の先駆的研究

[情報・システムソサイエティ：8名]

贈呈者氏名	貢 献 内 容
岩村 雅一	画像パターンの検索・認識とその視覚障害者支援技術への応用
加藤 ジェーン	画像・映像認識および深層学習に関する先駆的研究

加藤 恒夫	音声認識技術の研究開発と日本人英語音声分析への応用
川田 亮一	国際テレビジョン中継伝送の高画質化・高信頼化のための研究開発
木村 昭悟	人間の視聴覚機能を模擬したマルチメディア情報処理の研究
佐藤 茂雄	脳型計算のハードウェア実装に関する研究
玉木 徹	画像・動画像および3次元情報の解析技術の研究開発
宮崎 純	データ指向高性能計算システムに関する先駆的研究

5. 3 シニア会員称号の贈呈

〔基礎・境界／NOLTA ソサイエティ：14名〕

劉 健全	橋本 尚久	井上 真二	吉川 隆英	二神 拓也
眞壁 義明	豊嶋伊知郎	美井 野優	眞田亜紀子	鈴木 淳
宮田 統馬	四方 順司	加藤 尚徳	大森 敏明	

〔通信ソサイエティ：29名〕

Robert Heath	横井 行雄	細谷 達也	小林健太郎	前田 讓治
津川 翔	森 洋二郎	米澤 遊	小泉 雄貴	西方 敦博
久永 光司	佐竹 孝	阿部 順一	松野 宏己	西 正博
酒巻 洋	黒田 貴之	田中 憲光	谷口健太郎	倉掛 卓也
佐藤 丈博	戸村 崇	流田理一郎	首藤 一幸	中村守里也
佐々木愛一郎	山本 嶺	秋田 学	魏 秀欽	

〔エレクトロニクスソサイエティ：9名〕

南 豪	君島 正幸	山本 直克	柳生 栄治	石田 健一
後藤 啓次	中 良弘	尾崎 亮介	阪本 卓也	

〔情報・システムソサイエティ：9名〕

徳田 恵一	八重樫理人	柴田 智行	徐 建鋒	木谷 佳隆
河田 佳樹	三浦 康之	宮崎 智	福士 将	

5. 4 会員の現況

(1) 会員数は次のとおりである。

[]内はフェロー会員数

会員種別	名誉員	正員	学生員	ジュニア会員	購読会員	維持員	特別会員	合計
2024年度末 会員数	106[87]	18,459[865]	3,532	641	278	163	—	23,179[952]
2025年度末 会員数	107[89]	18,160[866]	3,801	739	269	164	1	23,241[955]
前年度末 との差	+1[+2]	-299[+1]	269	98	-9	1	1	64 [+3]

(注1) 名誉員の岩崎俊一氏は2025年7月25日、石川 宏氏は2025年8月12日に逝去した。

(注2) 年度末退会日を3月31日から4月1日に変更により、年度末退会は翌年度の退会数にカウントする。

(2) 各支部における年度末会員数は次のとおりである。

[]内はフェロー会員数

会員種別	名誉員	正員				維持員	合計

支部			学生 員	ジュニア 会員	購読 会員		
北海道	3【3】	359【13】	166	34	5	3	570【16】
東北	9【6】	596【46】	134	69	11	1	823【52】
東京	68【56】	10,627【566】	1,612	391	135	120	12,953【622】
信越	1【1】	336【9】	149	8	8	4	506【10】
北陸	0【0】	336【6】	117	14	7	0	474【6】
東海	8【7】	1,162【46】	320	26	30	16	1,562【53】
関西	14【13】	2,227【117】	527	74	28	15	2,885【130】
中国	【0】	653【21】	212	53	9	1	928【21】
四国	【0】	292【8】	89	18	3	1	403【8】
九州	2【2】	901【31】	338	52	9	3	1,305【33】
海外在中	2【1】	671【3】	137	0	24	0	834【4】
合計	107【89】	18,190【866】	3,801	739	269	164	23,240【955】

5. 5 学生事業に関する事項（定款 第4条 へ号）

(1) 会誌「学生会だより」欄の掲載記事

各支部学生会・学生ブランチの活動状況等を会誌「学生会だより」欄に掲載した。

(2) 学生ブランチについて

ホームページに学生ブランチ設置校の活動紹介記事及び設置申込みから報告書作成までの資料、流れを掲載し、学生ブランチ設置校の拡大を図った。
支部活動として実施するため、設置校の申請、報告を各所属支部を通じて受け付けた。

6. 教育活動に関する事項（定款 第4条 ロ号、ハ号、へ号）

教育関連サービス（生涯教育の意味の検討、活性化、内容のアップデート、CPDの啓発・利活用、電子情報通信分野へ子供への興味を持たせる教育の検討などを含む）に関しては、サービス委員会の所掌として以下のような活動を行った。

6. 1 学会主催の技術講座に関する事項

我が国の産業界における電気・電子系技術力の維持・向上を目的として、2020年度に「電気・電子系高度技術者育成プログラム」を開設した。このプログラムは、今後中核となる若手技術者に電気電子通信領域で必要となる高度な技術・知識を身につけて頂くことを目的としており、産業界・学界から最先端の研究・開発を進めておられる方々を講師としたスクーリング形式の教育プログラムである。なお、2025年度は47名が受講した。

6. 2 技術者教育認定活動（日本技術者教育認定機構：JABEEの一員としての活動）

JABEE の学部認定審査については、2025 年度も定常的な活動を行った。JABEE 本体へ委員を派遣して JABEE の運営に協力するとともに、学部プログラムの審査を電気学会、情報処理学会と連携して実施した。

6. 3 技術者の継続的な教育・能力開発

CPD 情報の管理については、電気学会・情報処理学会と連携した試行システムから、よりコスト効率のよい ASP 型システムへの切り替えを 2015 年 10 月に行って以来、2025 年度も運用した。また、本会、電気学会、情報処理学会からなる電気電子・情報系 CPD 協議会については、情報交換や CPD 制度の有用性訴求に関する連携を中心とした活動を行うこととし

E
我が国において CPD プログラムを中心的に行っている日本工学会の CPD 協議会・CPD プログラム委員会に、委員を派遣して継続的に参画した。

6. 4 IEICE 先端セミナー

教育講座「IEICE 先端セミナー」を 2023 年度に新規に開講し、初年度は、「AI 社会実装の最先端と技術動向」及び「量子コンピュータと量子情報通信入門」を実施した。2024 年度は、「6G に向けた 3GPP の無線アクセスの標準化動向」及び「次世代半導体の技術動向」の 2 つのコースを新設した。2025 年度は、新たに「生成 AI の応用」「暗号技術の進化と未来」「ニューロモルフィック・リザバーコンピューティングの基礎と応用技術」の 3 コースを開設し、延べ 100 名近い受講があった。

6. 5 小中高校生を対象とした科学教室

小中高校生を対象とした科学教室は、2025 年度は支部において実施した。

7. 国際活動に関する事項（定款 第 4 条 へ号）

7. 1 国際セクションの活動

(1) 各セクションにおける講演会等の実施件数

セクション	件数	セクション	件数
バンコク	0	上海	0
北京	0	シンガポール	1
韓国 (Communication)	0	台北	0
韓国 (Electronics)	0	ヨーロッパ	0
韓国 (Information)	0	インドネシア	0
ベトナム	0	マレーシア	0
インド	0		

合計 1 件

(2) 国際セクションが主催・共同主催した国際会議 なし

7. 2 国際委員会活動

国際委員会では、Distinguished Lecturer (DL) による英語 Webinar を継続的に開催し、リアルタイムのストリーミング配信とともに、コンテンツのアーカイブ化により、見逃し配信を可能とし、国内外のより多くの視聴者に届ける取り組みを進めている。

7. 3 All Sections Meeting

国際セッション代表者との意見交換の場である All Sections Meeting には、国際委員会委員やセッション代表に加え、植松会長を招聘、今年度は3月30日（月）にオンライン形式で開催した。

7. 4 Global Net WorkShop

日本国内で学ぶ留学生や若手研究者の学術コミュニティ形成を支援することを目的として、英語ポスターセッション「GlobalNet Workshop」を開催する。本ワークショップは、9月のソサイエティ大会に続く形で、第7回目となる今回は、3月9日（月）に総合大会のプレイベントとして九州産業大で実施、今回は13か国から108件の講演申込を受領した。

8. 学会からの情報発信に関する事項（定款 第4条 ロ号、へ号）

8. 1 総合大会の場の活用

2026年3月の総合大会では、プレナリーセッション、Welcome Party、懇親会、「情報通信を支える先端技術の社会実装と通信インフラの未来」をはじめとした40の企画セッション、ランチョンセミナー、スポンサーセッション、学内ツアー、IEICE Expo 福岡 2026（企業展示）を実施した。

8. 2 IEICT ICT Pioneers シリーズ（Webinar）

ライブ Webinar への最初の取り組みとして、IEICE ICT Pioneers Series を2020年6月より開始した。毎回多数の聴講申込みがあり、諸事情によりライブ配信を聴講できなかった方からオンデマンド配信の希望も多いため、Webinar コンテンツをアーカイブしている。2026年2月以降は、非会員向けに有料での提供を開始した。

9. 規格調査会に関する事項（定款 第4条 ニ号）

規格調査会会議を4回、専門委員会及び小委員会を40回開催した。国際標準化に関して取り扱った IEC 文書は63件であった。

委員会名		委員長名	委員数		開催数
規格調査会委員会		浅谷 耕一	19		4
専門委員会名		専門委員長名	専門(委)	小(委)	開催数
1	通信用伝送線及びマイクロ波受動部品	岸川 諒子	11	38	8
2	周波数制御・選択・検出デバイス	作田 幸憲	21	82	4
3	光ファイバ	大橋 正治	42	63	12
4	電子実装技術	高橋 満	18	0	4
5	無線通信用送信装置および受信装置	川西 哲	21	22	5
6	電子通信用語	—	0	0	0
7	電子通信記号	—	0	0	0

8	複雑システムの安全検討委員会	—	0	0	0
9	標準化教育検討委員会	中西 浩	15	10	3
合 計			147	165	40

10. その他の事項

10.1 外部機関との連携に関する事項（定款 第4条 ロ号、へ号）

(1) 関連他学会との連携

電気・情報系関連5学会とは2004年に「電気・情報関連学会連絡協議会」を発足させ、協力してきている。2025年度も、2回の定例会議を開催し、各学会の会員数動向、財務問題、情報システムの課題を含め諸活動状況の報告に加え、会員増強の取り組み、公益目的支出計画の課題、大会活性化への取り組み等に関して情報交換・情報共有を行った。

電気学会については、企画戦略室を中心に意見交換を継続した。2026年2月に両会長をはじめとする電気学会8名、本会10名による役員懇談会を実施すると共に、令和8年電気学会全国大会にて、共催シンポジウムを開催した。

(2) 関連学術団体との連携

2025年度は、関連学術団体等に対する協力・連携活動として、176件の協賛・後援等を行った。

(3) 府省との連携

ソサイエティ大会企画セッションにおいて、「科学技術・イノベーションの推進に向けた日本の取組と電子情報通信技術への期待」というテーマで、内閣府、総務省、文科省、経産省から講演を頂いた。2026年2月には、総務省国際戦略局幹部と会長を初めとする本会役員ら29名で第17回意見交換会を開催し、国の技術政策と学会の役割等について情報交換を行った。

(4) モバイルコンピューティング推進コンソーシアム(MCPC)との相互協力

MCPCとの相互協力関係として、相互の会員に活動を周知するため、HP上のバナー交換を行った。

Ⅱ. ソサイエティ及びグループ事業

1. ソサイエティ及びグループ事業概要

2025 年度も、各ソサイエティ及びグループごとに特色のある企画等を実施し、会員の研究成果の発表と議論の場を提供する事業を中心に活動した。

1. 1 基礎・境界ソサイエティ

基礎・境界ソサイエティは、本会の全研究分野に対する基礎領域及び境界領域における研究活動を担うとともに、新領域の創造を推進するという重要な役割を果たしている。しかしながら、昨今の学会全体での会員の減少や、それに伴う若手会員への学会運営に関する負担増加の問題を考えると、研究面のみならず、ソサイエティ運営の在り方に関しても継続的な検証と改善が不可欠となっている。2025 年度は、新規会員獲得に向けた若手・ジュニア世代へのアウトリーチ活動、ならびにソサイエティ誌多言語化の取り組みなどを含めた国際活動への貢献を強化するとともに、研究会活動の活性化に向けた研究専門委員会のグループ化に関する取り組み、さらに持続可能な運営体制に向けた改革に取り組んだ。

(1) 研究会活動の活性化

(1-1) サブソサイエティの新設

基礎・境界ソサイエティにはこれまで 3 つのサブソサイエティがあり 7 研究専門委員会がその 3 つのサブソサイエティに属していた。一方、サブソサイエティに属していない研究専門委員会が 12 あり、必ずしも基礎・境界ソサイエティ内においてサブソサイエティ制が浸透しているとは言えない状況にあった。サブソサイエティ制度は新しいソサイエティの設立をサポートするために設けられた制度であったが、2015 年度に NOLTA がサブソサイエティからソサイエティとなり独立して以降、サブソサイエティのソサイエティ化に向けた具体的な動きはなかった。他方、研究会活動の活性化のためには、研究専門委員会の枠を超えた分野横断型の活動を促進していくことが必要不可欠である。そのためにも、複数の研究専門委員会がグループとして連携して活動することを促進するための仕組みが必要である。

以上のような背景を踏まえ、2024 年度には「サブソサイエティ新設・統廃合の手続きに関する覚書」を取りまとめ、2025 年度、本ソサイエティは、4 つのサブソサイエティおよびサブソサイエティに属していない研究会によって構成・運営されることになった。

(1-2) NOLTA ソサイエティが理事を持つソサイエティを目指す取り組み

NOLTA ソサイエティが理事を持つソサイエティを目指す検討を開始し、それに伴う ESS-NLS 共同体運営に関する検討を行った。規定や課題を明確にし、次年度以後、継続的に検討を進めて行くこととした。

(1-3) 大会企画充実化に向けた取り組み

総合大会・ソサイエティ大会における発表・参加を増加させ、そしてそれを研究会活動の活性化につなげていくことを目指し、大会における企画セッションの充実化を図るための取り組みを実施した。そのために、まず過去の大会企画を整理してこれまでの企画提案実績を検証し、企画提案実績の「見える化」を進めた。この取り組みにより、ソサイエティ内の研究専門委員会に対して、実績の手薄な分野について積極的に企画提案を検討するよう促すとともに、実績のある分野については最近の動向を織り込みながら継続的な企画実施を強化するよう促した。さらに、上述の研究会のグループ化と関連して、複数の研究専門委員会による合同企画の実施を検討するよう、サブソ・研専会議等で呼びかけを行った。

(2) 若手世代・ジュニア世代からの魅力を高める活動

基礎・境界ソサイエティがカバーする研究領域に新規参入する若手研究者を増やすことは必要不可欠である。2025 年度もこれまでに引き続き、研究会や総合大会・ソサイエティ大会において学生・若手研究者向けの企画を実施するようサブソ・研専会議で呼びかけるなど、若手世代を惹きつける企画実施に向け検討を行った。

また、学生員・ジュニア会員を増やすこと、そして、学生員・ジュニア会員から正員への昇格者を増やすことは学会全体としても重要な課題である。この点に関しては、ジュニア会員運営委員会・若手会員活性化ワーキンググループと連携し、学会全体でのジュニア会員・若手会員向けの取り組みについて基礎・境界ソサイエティからの貢献の方向性を模索した。

(3) 国際活動への貢献

(3-1) フラグシップ国際会議の開催準備

本ソサイエティのフラグシップカンファレンスとなる国際会議 2026 ESS Symposium (ESSS 2026) は 10/30 日～11/1 日にかけて、沖縄にて開催することを決定し、論文投稿開始の案内も配信され、着々と開催準備を進めている。

(3-2) 国際活動へのその他の貢献

海外向けの情報発信を充実化させる取り組みとして、Distinguished Lecturer 拡充の取り組みを進めた。2023 年度の Distinguished Lecturer リストには基礎・境界ソサイエティ分野の講師として 6 名が掲載されているものの、講師の専門分野に偏りがあり、基礎・境界ソサイエティの領域を広くカバーしているとは言い難い状況であった。2025 年度は、基礎・境界ソサイエティの研究専門委員会の協力を得ながら積極的に講師募集を行い、Distinguished Lecturer リスト拡充に向けた取り組みを行った。

また、基礎・境界ソサイエティでは、国外会員へのサービスの一つとしてソサイエティのアクティビティを毎月メールによって情報発信を行っている。2025 年度も昨年度まで同様にこの活動を継続したほか、これまでに実施してきた国際的なプレゼンス向上に向けた取り組みの継続についても検討を行った。

(4) 持続可能な運営体制に向けた活動

(4-1) 事務手続きの DX 化検討とウェブページ刷新

現在、会員減少による若手会員への負担増加の問題が顕在化しており、この問題への対応が喫緊の課題となっている。この問題への対応として、運営の DX 化、グループによる事務対応の検討、各種会議の在り方や編集体制を検討した。ソサイエティや研究専門委員会運営の DX 化については、各種申請手続きのシステム化や、広報活動における SNS ツールの活用が考えられる。手続きのシステム化については、指定の様式にて書類を作成しメールで担当幹事へ提出するやり方から Web フォームへの入力に切り替えることで、メール送受信時のトラブルの回避や、申請データ管理の容易化が期待できる。このような取り組みの実現に向け、2025 年度は、活性化事業で事務手続きのシステム化に取り組んだ

(4-2) 運営体制の検証と拡大運営委員会の実施

組織運営体制については、基礎・境界ソサイエティでは 2019 年度に改革を行い、ソサイエティ全体の議論を行う運営委員会と、サブソサイエティ・研究専門委員会に関する議論を行うサブソ・研専会議とを設置した。これは、議題の対象に応じたそれぞれの会議でより深い議論を行うための改革であった。しかしながら、両会議で一部議論の重複が生じるといった問題が顕在化している。他方、COVID-19 の影響でオンライン会議が一般化するなど、社会的にも会議の在り方が変わってきている。例えば、以前は大人数が一堂に会して会議を実施することは会場手配等で困難が生じたが、オンライン会議であれば会場の問題は回避できる。これらの点を踏まえ、運営委員会とサブソ・研専会議とに分割したことによる問題点について検証し、拡大運営委員会あるいは運営委員会とサブソ・研専会議との合同会議を実施するなどといったソサイエティ内の意思決定フローについて再度確認するとともに、効果的な対面・オンライン会議のあり方についての検討が必要とされていた。

このような背景を踏まえ、2025 年度は、昨年度に引き続き拡大運営委員会を開催した。具体的には、2025 年 12 月に 2025 年度第 4 回 ESS 運営委員会および第 2 回 ESS サブソ・研専会議との合同会議として、ESS 拡大運営委員会を開催した。通常別々に行われる会議を合同で実施したことにより、同一の議題を一度に審議するなどといった運営の省力化が可能であった。次年度以降も、今年度の合同会議の効果を検証するとともに、より効果的な会議運営の実現に向けた検討を継続する予定である。

(5) 編集関係の活動

本ソサイエティではこれまでに、和英論文誌の編集体制においては、論文誌編集委員長および編集幹事が和英論文誌の両方をハンドリングする体制に変更することにより、完全な一体編集体制へと移行した。編集体制の変更のほかにも、2022 年 10 月号からの英文論文誌オープンアクセス化され、2024 年 1 月号からは和文論文誌の隔月化、そして 2026 年 1 月号からは和文論文誌の季刊化させるといった、論文誌発行に関する改革を継続的に実施してきた。とくに英文論文誌については、編集作業の効率化や上質の招待論文の掲載など、種々の施策を推し進めることで、コンテンツの質の向上とともに論文誌の知名度を上げ、インパクトファクターなどの指標の向上を図ってきた。

2025年度は、これらの取り組みに関してその影響を検証するとともに、新たな取り組みの検討を行った。具体的には、NOLTA ソサイエティとの共同機関誌として発行している **Fundamental Review** について、既に発行されている記事の **HTML** 化を開始した。更新された記事の内容を確認しながら、今後の拡大を検討する。

1. 2 通信ソサイエティ

通信ソサイエティは、通信システム・通信ネットワークに関する基盤から応用技術、およびその近傍領域を研究活動領域としている。これらの領域における学術の発展、産業の興隆並びに人材の育成を促進し、豊かなコミュニケーション社会の形成と地球環境の維持向上に貢献するべく活動を行っている。2025年度はポストコロナ時代の活動の在り方が問われる年度となった。通信ソサイエティの活動もハイブリッド型の活動と対面型の活動の両方が行われ、特別研専や分野横断型研専の新設、産学活性化に向けた取り組みなど、コロナ禍以降の変化に対応した活動を進めている状況である。

研究会活動においては、新たな展開を目指した研究会運営を行った。量子通信・ネットワーク特別研専 (QCN) の発足、通ソ有線無線連携 WG の設立など、新規研究領域の開拓、産学活性化に向けた取り組みを進めた。また通ソ若手研究奨励賞の選考が実施され、ソサイエティ大会の通ソ表彰式で表彰された。一方で研究会活動の活性化のために、その運営サポートのための施策の検討も行っている。

国際交流では、通信ソサイエティのフラグシップ国際会議である **ICETC2025** を、2025年11月に大阪 I-site なんばで、**APCC2025** と併催 (基調講演は共同開催) の形式で開催した。**ICETC2025** では採択された **Oral** 論文を、**IEEE Xplore** に掲載した。また **APCC** 創設 30 周年記念セッションが開催され、30 年間にわたる **APCC** 開催への貢献に対する感謝の意を表して **IEICE-CS** に記念楯が贈られた。さらに国際交流として、**IEEE AP-S** との連携協定の締結、ならびに **CIC**、**KIEES**、**KICS** とのシスターソサイエティ連携協定が更新された。その他各研専における海外での研究会開催の取り組みが再開されるなど、コロナ前に行われていたような国際化に向けた動きも活性化している。

出版活動においては、英文論文誌 (EB) および **ComEX** の **IEEE Xplore** への掲載が継続された。これらにより、**EB** 及び **ComEX** 両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクタの向上が期待される。また、通信ソサイエティ論文誌の投稿数増加に向けた推薦論文制度の活用について、編集会議と研専運営会議が連携し、より多くの論文を推薦する施策を積極的に推進している。

会員事業企画においては、**ICETC2025** の運営やシスターソサイエティ協定の締結、メーリングリストや **Web** ページでの情報発信を行った。通信ソサイエティの海外情報発信および海外会員の維持・増強を強化する施策として、紙媒体による情報提供に加えて、海外会員がアクセスしやすい通信ソサイエティポータルサイトを構築・公開し、海外会員が本会情報 (論文誌や国際会議等) へアクセスすることを容易とした。今後も、オンラインツールを活用した情報発信を国内外の会員に対して継続的に行うとともに、海外会員がアクセスしやすいポータルサイトの整備等、投稿機会の増加や通信ソサイエティの国際化に向けた活動も積極的に進めていく予定である。

以下、今年度の活動の詳細を記す。

(1) 財務管理

通信ソサイエティの 2025 年度の収入は 3 億 2,235 万円、支出は 3 億 0,225 万円であり、2,010 万円の黒字の見込みである。2024 年度との比較では、収入、支出いずれも増加しており、収支は、2024 年度の 183 万円の黒字に対して 1,862 万円の増収の見込みである。

以下、各事業の 2025 年度の収支見込みの概要を述べる。通ソの主な収入源としては、受取会費、出版活動、研究会や国際会議、等の事業が挙げられる。その内訳は受取会費が 3,176 万円、出版活動が 5,175 万円、研究会事業が 1 億 0,587 万円、国際会議事業が 1 億 3,260 万円である。

受取会費に関しては、正会員数は減少、学生会員数とジュニア会員数は増加しており全体としては微増のため昨年度予算より増加している。

出版活動に関しては、和英論文誌の収入が最も多く 3,691 万円の収入に対して支出が 2,313 万円であり 1,378 万円の黒字であった。

研究会等の事業に関しては、全国大会 (総合大会/ソサイエティ大会) の収入 4,270 万円に対して支出が 1,971 万円であり 2,299 万の黒字、研究会 (技術研究報告/研専活動) の収入は 6,317 万円に対して支出が 3,233 万円であり 3,084 万円の黒字であった。

2026年度予算案は、収入が2億1,271万円、支出は2億1,066万円で2,051万円の黒字を見込んでいる。2025年度との差異として国際会議の収入の減収が大きく、2025年度の実績見込み1億3,200万円に対して2026年度は1,770万円の収入見込みである。これは国際会議の開催数が影響している。

その他の項目については2025年度実績見込みと比較して、受取会費は13.7%減、和英論文誌は38.2%増、ComEXは1.8%減、総合大会は2.9%増、ソサイエティ大会は5.8%増を見込んでいる。

今後の課題として、昨年度同様に予算の進捗率の計上方法の見直しを挙げる。今期は3Q末時点でも全体の予算進捗率が収入、支出共に40%に満たない状況であった。その理由は国際会議予算とXplore掲載費の全体に占める割合が極めて大きく、かつその執行時期が遅いためである。適切な予算管理のためには、一部の事業に影響されることなく、全体の進捗度の妥当性を表現する手段が望まれる。

(2) 研究専門委員会

2025年度の研究専門委員会による研究会活動は、コロナ終息後の新たな展開や持続的な継続を目指した研究会運営を行った年度となった。昨年度に引き続き産学活性化に向けた取り組みが進められ、企業と大学で構成されるパネルセッションが大盛況のうちに開催された。また、研究会を持続的に運用するために収益拡大と運営負担を減らすためのサポートについて議論された。さらに、QCN特別研専が新たに活動を開始したように、新たな研究分野の開拓も進められている。研究会活動の活性化と会員増強を図るため、研専運営活性化資金として世代/国境/学会の垣根を越えたネットワーク拡大、学生に重きをおいたブランディング戦略の確立とその実践など、これまでにない施策の提案・実施が行われた。通信ソサイエティのフラグシップ国際会議ICETCにおいて、研究専門委員会でも当該分野の専門性を活かした招待講演への貢献など、その成功に寄与している。以上のように、2025年度は研究会活動の新しい展開や持続的な継続に向けた様々な取り組みを行った年度であったと考える。

(2-1) 新型コロナウイルス終息後の新たな発展を目指した研究会運営

1. 産学活性化に向けた取り組み

前年度に発足した産学活性化課題検討WGにおいて、次の2つの活動を実施した。第3種研究会RISING2025において「研究と就活をバランスよく効率的に進めていくためにはどうすればよいのか」というパネルセッションを開催し、企業側および大学側の視点から、就職活動に関する課題を議論した。また、就職活動に関して学会に何を期待しているかを調査するために、企業担当者に対するアンケートを作成した。同アンケートは2026年度早期に実施し、それに基づき今後の戦略を策定する予定としている。

2. 財務戦略に伴う二種研・三種研の収益拡大と運営サポート

本会財務戦略の一環として収益拡大を目的とし、2026年度以降の第二種研究会および第三種研究会を対象に会議管理費を新たに設定する予定である。あわせて、本制度を活用し、二種研究会・三種研究会に対する事務的支援の充実についても検討を進めている。

3. 分野横断的な研究会の活性化

第三種研究会である革新的無線通信技術に関する横断型研究会（Multiple Innovative Kenkyu-kai Association for wireless communications; MIKA）、超知性ネットワーキングに関する分野横断型研究会（Cross-Field Research Association of Super-Intelligent Networking; RISING）、サイバーライフラインに関する分野横断型研究会（Cross-Field Research Association of Human-centered Cyber Lifeline）が、合計9回の研究会・講演会（発表・講演数合計251件、参加者延べ513名）を実施し、分野横断的なテーマについて、活発な討議を行った。

また、有線無線連携WGが新たに発足し、XGモバイル推進フォーラム（XGMF）と通信ソサイエティが連携した企画セッションを第三種研究会RISINGにて開催した。通信ソサイエティ及びXGMFにおける有線無線に関するこれまでの研究活動を紹介し、各団体の有識者におけるパネル討論「通信ソサイエティ・XGMFの連携に向けて」を開催し、盛大な会合となった。

(2-2) 研究専門委員会の変更

2025年度は、通信ソサイエティの基幹分野を担う20の研究専門委員会と新規分野を担う6つの特別研究専門委員会で研究活動を開始、さらに、2025年3月より、研専運営会議の審議を経て、量子通信・ネットワーク特別研究専門委員会（QCN）の活動を開始し、いずれも活発な研究会活動を行った。

2025年度で設置期間が満了となる ICT 分野における国際標準化と技術イノベーション (SIIT)、光通信インフラの飛躍的な高度化に関する (EXAT)、水中無線技術特別研究専門委員会 (UWT)、それぞれの特別研究専門委員会から延長申請があり、研専運営会議での審議の結果、これらは全て承認された。期間は 2026 年 4 月 1 日～2028 年 3 月 31 日である。

(2-3) 活性化資金関係

研究会活動の活性化と会員増強を図るための研専運営活性化資金に対して、下記の 5 件の企画の応募につき研専運営会議での審査を経て採択された。

1. 世代/国境/学会の垣根を越えた EMC ネットワーク拡大 (EMCJ 研専)
2. 学生に重きをおいたブランディング戦略の確立とその実践 (CQ 研専)
3. 研究コミュニティを発展させる研究会連携での国際会議スペシャルセッション開催 (MICT 研専)
4. WPT レクテナクエスト (WPT 研専)
5. 国際的研究コミュニティを持続・発展させるためのワークショップ IA 2025 の開催 (IA 研専)

これら活動については計画通りに実施し、実施後に研専運営会議内での紹介と報告を行い、その効果の確認や施策の水平展開を図っている。

(2-4) 研究会開催実績

2025 年度は、第一種研究会を 109 回、第二種研究会 (研専、特別研専併せて) を 57 回実施し、技術の普及や新たな技術に対する展開を図った。なお、第一種研究会の 109 回のうち、ハイブリッド開催は 63 回であった。

(2-5) 大会活動実績

2025 年ソサイエティ大会 (岡山大学) では、一般セッション 20 分野/公募シンポジウム 4 課題合わせて講演数 691 件と企画セッション 20 課題を実施した。2026 年総合大会(九州産業大学)では、一般セッション 20 分野/公募シンポジウム 2 課題合わせて講演数 985 件と企画セッション 18 課題を実施した。総合大会の Welcome Party は全ソサイエティ合同で対面にて実施した。研専紹介は、若手会員・学生員が IEICE の重要な構成組織である研究専門委員会を身近に感じていただけるよう、パネル展示の形態で実施した。通ソとしては、7 研専が研専紹介に参加し、若手会員や他研専の方々との交流が行われた。研専紹介の他に、ジュニア&学生ポスターセッション表彰式が行われ盛況だった。

(2-6) 研究会連絡会

研究会連絡会は、研究会に関する課題についてソサイエティ・グループ横断で情報共有し意見交換する場であり、通信ソサイエティからも継続的に参画している。本年度、通信ソサイエティからは、一種研収益構造改善に関する議論内容などを紹介した。

(3) 出版活動

EB は 2024 年 2 月以降、ComEX は 2023 年 10 月以降、IEEE Xplore への掲載が開始された。また、2023 年 6 月より ComEX にインパクトファクタが付与された。これらにより、EB 及び ComEX 両誌の国際的な知名度や発信力が高まり、投稿数の増加やインパクトファクタの向上が期待された。しかし IEEE Xplore 掲載後も、これまでのところ、投稿数の目立った増加は見られないが、閲覧数は着実に増加している。一方で、IEEE Xplore への掲載に伴う IEEE に支出する掲載料への円安の影響を賄うため論文誌の掲載料を 2025 年 7 月に値上げを行なった。インパクトファクタ向上に向けた他の施策として、ComEX では参考文献の掲載に限り、1 ページの超過を認めることとした。2009 年 3 月から総合大会/ソサイエティ大会で継続的に開催している「論文の書き方講座」は、毎回聴講者から好評を博しており、2025 年度においても、多数の参加があった。通信ソサイエティが主催の国際会議 ICETC 2025 では、編集会議から推薦した 10 件の招待講演が実施された。推薦論文制度に関しては、より多くの論文の推薦を目指し、研専運営会議と連携して、2023 年度からスタートした掲載料補助のトライアルを継続した。

(4) 本部論文賞候補, および, 通信ソサイエティ論文賞

2024 年 10 月から 2025 年 9 月までの間に通信ソサイエティの論文誌に早期公開された論文の中か

ら、本部論文賞候補3編を選定した。これら3編の中で最も支持を集めた論文を最優秀論文賞候補とした。また、通信ソサイエティ論文賞として、同期間に和英論文誌、和文マガジンおよびComEXに掲載された論文の中から、優秀論文賞2編、チュートリアル論文賞2編、Best Paper Award4編、Best Tutorial Paper Award1編、ComEX Best Letter Award1編、和文マガジン論文賞1編の計11編を選定した。また、通信ソサイエティマガジン賞を1編選定した。選定された12編の著者に対しては、2026年5月の通信ソサイエティ活動キックオフにて表彰が行われる予定である。

(5) 国際会議

(5-1) 通信ソサイエティフラッグシップ国際会議 ICETC2025

2025年11月26日～11月28日の3日間、電子情報通信学会ソサイエティ主催によるフラッグシップ国際会議 The 6th IEICE-CS International Conference on Emerging Technologies for Communications (IEICE ICETC 2024) を大阪公立大学 I-site なんば (大阪府大阪市) にてオンサイト開催した。通信ソサイエティがカバーする全研究分野を対象とした国際会議であり、通信ソサイエティ執行委員会、研専運営会議、研究専門委員会、編集会議等の通信ソサイエティを運営する会議体が連携・協同し準備・実施した。The 30th Asia-Pacific Conference on Communications (APCC 2025) と同時開催し、基調講演セッションの共通開催、双方の国際会議の相互聴講化を実施した。

参加者214名、基調講演6件、Special Session 招待講演16件、Invited Special Session 招待講演10件、Oral Session 講演13件、Poster Session 講演106件の発表があった。優れたOral Paper・優れたPoster Paper・優れたPaperの学生著者・活発な投稿をした著者に対して、Best Paper Award1件、Best Poster Award6件、Best Student Award for Oral Paper2件、Best Student Award for Poster Paper15件、Outstanding Contribution Award5件を授与した。

Oral Paper13件はIEEE Xploreに掲載された。また、Oral Paper13件、Poster Paper106件はIEICE Proceeding Series 上でオープンアクセスとして公開した。

(5-2) ICETC2025 以外の国際会議

2025年度においては、通信ソサイエティ(研究専門委員会を含む)が主催・共同主催の国際会議6件が開催された。その他、8件の国際会議に対し技術協催、2件の国際会議に対し協賛を行った。この結果、通信ソサイエティが関与した国際会議は2024年度12件に対し16件であった。主催・共同主催の国際会議数は2023年度2件、2024年度は1件に対して、2025年度は6件であり例年より多い開催件数となった。なお、2026年度は2025年度末の時点で主催・共同主催2件を含む計10件の国際会議への関与が予定されている。

主催・共同主催・技術協催向けの国際活動資金の活用実績は27万円、余剰金は53万円である。国際会議の開催準備費用補助を目的とした主催・共同主催団体向けの資金貸与制度については、活用実績無しであった。

(6) 国際活動 (シスターソサイエティ協定について)

通信ソサイエティの海外情報発信および海外会員の維持・増強に向けて、既存のシスターソサイエティであるKIEES、KICS、及びCICとの連携協定更新、及び新規のシスターソサイエティとなるIEEE AP-Sとの連携協定締結を行った。2025年度に締結したこれらの連携協定においては、協定に含まれる条文の見直しや最新化を行い、通ソ側に割引対象の紙媒体の雑誌の発行がない状況や通ソ側でのオンライン購読に対する割引の設定ができないことに対応した条文を、各シスターソサイエティの合意を得た上で適用した。また、各連携協定の調印式を関連する国際会議等において双方の会長・幹部が出席して執り行った。

引き続きIEEE ComSoc, IEEE EMCS, VDE/ITGの3つのシスターソサイエティについても連携協定更新に向けた調整を進めている。

(7) ホームページ・会員サービス

ホームページについては、昨年度と比較して各情報のページへの安定的なアクセス数を獲得している。CSアーカイブスサービスは、毎年度開催されるソサイエティ大会(9月)、総合大会(3月)における通信ソサイエティ企画セッションの講演資料の一部を閲覧できるサービスであり、迎える2026年3月実施の総合大会においても実施予定である。Eメールニュースでは、研専企画や国際会議、出版物目次などを含め、2025年度は合計36件の配信を行っている。対面のイベントが増えつつあるが、今後もその利便性の高さからオンラインツールを活用した情報配信が活発化していくことが予想され、サービス向上

や利用者拡大の検討を行っていく所存である。

(8) 通信ソサイエティ Welcome Party

Welcome Party は、学生会員や若手会員の方々が、諸先輩方と自由にコミュニケーションできる場の提供を目的として 2008 年から始まり、2025 年度が 17 回目となる。2017 年度からは全ソサイエティ合同での開催と規模を拡大してきたが、2019 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため中止を余儀なくされた。2020 年度は緊急事態の状況下であっても会員同士の交流の場が失われてしまわないよう、通ソ単独にてオンラインによる開催、2021 年度は通ソが主導し、全ソサイエティ合同でのオンライン開催を行った。2022 年度は対面開催を基本方針に 2017 年度のものを踏襲しながら実施した。2023 年度は 2022 年度に引き続き対面開催だが懇親会との合同開催という形となった。2024 年度からは Welcome Party 単独開催に戻り、全ソサイエティ合同で対面開催している。2025 年度の主たる企画として、ジュニア&学生ポスターセッションの表彰式、各研専からのポスター展示（12 研専参加）、ショートプレゼン（13 研専参加）を実施した。学生はじめ多くの学会参加者が参加し、参加者及び各研専に対してアンケートを実施した。アンケート結果を踏まえ、Welcome Party の意義を改めて見直し、今後の学生会員や若手会員の学会活動参加推進のための施策を検討していく予定である。

(9) 通信ソサイエティ表彰

ソサイエティ大会期間中の 9 月 9 日に、特別講演および表彰式を開催した。若手研究奨励賞（29 名）、功労顕彰状（11 名）、活動功労賞（122 名）、の贈呈式を行うとともに、会長企画特別講演として、KDDI 株式会社 執行役員兼株式会社 KDDI 総合研究所 代表取締役会長の中村 元様による招待講演「通信技術の「進化」と「浸透」、そしてエンジニアリング」を実施した。また、通信ソサイエティ論文賞・マガジン賞授賞式を、5 月 17 日に開催し、論文賞（10 件）、マガジン賞（2 件）の贈呈を実施した。

(10) 規程類の改定について

通信ソサイエティ活動功労賞の選考委員について、将来的な選考委員組織を柔軟に編成できるようにするため、役職での指定人数の記載を削除する手続きが提案された。今年度中に承認する予定である。

1. 3 エレクトロニクスソサイエティ

エレクトロニクスソサイエティ（以下、エレソと略す）は、電子情報通信システムを構成するエレクトロニクスやフォトニクスの材料、部品、デバイス、サブシステムに関する基礎から応用までを研究活動領域としている。この領域における我が国の産官学連携促進や科学技術の進歩への貢献、会員（研究者）の研究発表や研究者間の議論の場の提供を目的としている。「企画会議」、「編集出版会議」、「研究技術会議」の 3 会議体制で上記活動を効率よく実施し、会員の満足度向上を目指している。平成 28 年度から研究技術会議内に立ち上げた 3 つの領域委員会（電磁波基盤技術領域委員会、フォトニクス技術領域委員会、回路・デバイス・境界技術領域委員会）に国際会議の主催・共催・協賛や研究専門委員会活動にかかわる承認権限を委譲し、手続きを迅速化するとともに、各領域内で近接分野の研究専門委員会の合同・連携企画を推し進めている。さらに、領域間の共同企画や、研究専門委員会活動の活性化に関する共通の課題は、領域連携会議にて議論を進めている。

2025 年度、エレソプレナリーセッションでは研究分野の拡大や技術分野の活発化に繋がる研究者の「気づき」を導くことを意識した特別講演会を開催した。ソサイエティ大会のプレナリーセッションでは「宇宙開発×エレクトロニクス」と題し、かつてないスピードと技術革新の中で進展を続けている宇宙開発にフォーカスをあて、これを支える鍵となるエレクトロニクス技術、特にセンシング分野における全体構想や、求められるデバイスなどについて、第一線で活躍される講師をお招きして幅広く議論することを目的として開催した。今回特別講演 3 件と表彰の時間を分離せずに、交互に実施することで聴講者を飽きさせない工夫を行ったが、一定の効果があつたと考えられる。講演においては、天文学における最新の知見から始まり、宇宙機に利用される LiDAR の原理や要求技術、そして最後に衛星にかかわるビジネスについての講演と、宇宙技術とエレクトロニクスのかかわりを幅広く扱い、聴講者からも好評であった。また、総合大会のプレナリーセッションでは、「エレクトロニクスで躍動するスタートアップ」と題し、動画配信や AI 普及の進展による通信トラフィックの爆発的な増大によりさまざまな課題が顕在化している中、これを解決するスタートアップ企業に注目し企画した。エンタープライズ仕様の無線メッシュネットワークの研究開発から事業化に至る道のりの概観とともに、大学発シーズの事業化にかかる様々な課題に対する取り組みを講演いただき、研究成果の社会普及に関してたくさん

の気づきを得ることができ、好評であった。また、学生員や若手会員が先輩研究者と自由に意見交換ができる場の構築を目的に全ソサイエティ共催の Welcome Party を開催し、エレソがオープニングの企画・司会を務めた。さらに、ベトナムセクションとの国際セッションではエレソが中心となって企画、オーガナイザを担当した。

また、組織自体のサステナビリティを担保、つまり将来にわたり魅力あるエレソ活動を目的として、委員会等活動の効率化や将来を見越した活動に向け、各種研究会や国際会議の運営の方針について議論を深めた。

今年度は5回の執行委員会も、ハイブリット会議と、完全オンライン会議でメリハリをつけるソサイエティの運営を行い、より次世代に繋げられるよう効率化を進めた。

以下、本年度のソサイエティの主な活動を3つの会議ごとに記す。

(1) 企画会議：例年通りエレソ全体の財務立案と把握、企画の取りまとめと発信、会員サービスの充実、対外広報などを担当した。

(1-1) 予算：今年度に引き続き次年度も「エレクトロニクスソサイエティ独自の事業費」に関する予算を確保し、会員活性化・増加施策の強化を図った。2025年度については、実施事業調整等を反映して、予算案段階では約501万円の赤字であった。10月末時点での2025年度決算見込みでは、基盤システム等保守費の圧縮等により、赤字額は約297万円に減少する見込みである。2026年度については、基盤システム等保守費の増加等を反映して約591万円の赤字を見込んだ予算案を策定した。会員減少による収益減少傾向が続いており、引き続き「エレクトロニクスソサイエティ独自の事業費」の有効活用を図るとともに、財務の安定を図る必要がある。

(1-2) 顕彰：エレクトロニクスソサイエティ活動功労表彰として30名の表彰を行った。例年通り、2025年総合大会での発表に基づいて選考された6名の学生奨励賞受賞者、および令和6年度(第28回)エレクトロニクスソサイエティ賞に選考された2件について、2025年ソサイエティ大会にて表彰を行った。また2025年度エレソフェロー推薦候補者を4名、2025年度シニア会員候補者を9名選定した。令和7年度(第29回)エレクトロニクスソサイエティ賞の選考を実施した。2025年ソサイエティ大会での発表に基づき6名の優秀な学生を選考し、2026年総合大会において学生奨励賞を授与した。

(1-3) 広報：エレソ Newsletter は年4回発行した。各号において、各領域委員会の活動紹介、各賞受賞者、技術解説の寄稿などを編集し、記事内容の充実を図った。

(2) 編集出版会議：例年通り出版戦略、編集出版関係財務の立案と把握、著作権管理方法、3論文誌発行を担当した。エレソ各論文誌の存在感が一層高まるよう、以下の施策を進めた。

(2) 編集出版会議：例年通り出版戦略、編集出版関係財務の立案と把握、著作権管理方法、3論文誌発行を担当した。エレソ各論文誌の存在感が一層高まるよう、以下の施策を進めた。

(2-1) 和文誌：総合大会、ソサイエティ大会で発表のあった注目研究をピックアップし、招待論文の依頼・掲載を継続して進め、論文誌の魅力増大を図った。これは多くを占める本会の日本人会員(特に学生や若手研究者)に対し、母国語による効率的な教育・知識普及、最新技術動向の把握の効果が望めるためである。また、論文誌活性化の一環として、学生を対象とした「学生論文特集」、それぞれの分野の第一人者の研究者に執筆を依頼した「エレクトロニクス分野におけるシミュレーション技術の進展論文特集」「マイクロ波ミリ波論文特集」を企画し、それぞれ、J108-C No.4、J108-C No.5、J109-C No.1に掲載した。また、論文投稿増加施策として、2023年4月から実施中の技術研究報告様式での和文誌投稿を受け入れ、研究会技報と和文誌の同時投稿による論文掲載料の割引を継続した。さらなる増加施策として、2025年5月以降に和文誌Cに投稿するペーパー・ショートノートについて、2025年9月開催のソサイエティ大会以降の学術講演会と同内容での投稿に対して論文掲載料の割引を行う試作を開始した。

(2-2) 英文誌：引き続き投稿件数の増加を図るため、投稿ウェブサイトでの投稿促進を行うと共に、各国際会議と連携して、論文誌としての注目度の向上が期待される特集号を中核とする方針の下、編集活

動を進めた。投稿数、閲覧数の増加、および論文誌のステータス、インパクトファクタ向上を目的に、引用論文数の下限設定や、JSTAGE におけるオープンアクセス化などを実施した。各施策の効果は、インパクトファクタなどの数値に反映されるのに一定の時間がかかるものと考えられるため、効果検証を行うために敢えて新規の施策は行わず、特集号を中核とした施策を着実に推進・実施した。

(2-3) ELEX : 全面オープンアクセスという特長を堅持し、発刊以来、速報性の維持・向上につとめてきた。近年はインパクトファクタの向上を目指して編集体制の強化や最低引用論文数の厳格化など様々な施策を実施してきている。今年度も引き続き、インパクトファクタのさらなる向上を目指して、国際的な認知向上に向けた海外査読員への積極査読依頼、著名な研究者によるレビュー論文の増加施策などを検討、実施した。CC マークの付与に際してテンプレート改訂を実施した。加えて、Gold OA 化 (Open Access)、DOAJ (Directory of Open Access Journals) への ELEX 誌の採録に向けた取り組みを進めている。

(3) 研究技術会議 : 今年度も 3 つの技術領域委員会と領域連携会議が協力して、研究専門委員会 (研専) の活性化策立案、新規/特別研専の設立/継続審議、研専財務掌握、全国大会統括、国際会議支援、対外活動支援を実施した。昨年度に引き続き、回路・デバイス・境界技術領域にて、韓国における半導体分野の学会とのシスターソサイエティ締結および Korea Electronics Section における活動計画の策定を実施した。

(3-1) 研究専門委員会等の活動 : 15 の研究専門委員会、5 の特別研究専門委員会、6 の国際会議国内委員会が、各種の研究学会や全国大会セッションの企画運営、国際会議などの研究学術活動を行った。MWPThz 研専、PICS 研専がそれぞれ台湾で国際研究会を実施し、研究会の国際化推進に貢献した。

(3-2) 国際会議 : 2025 年 4 月から 2026 年 3 月にかけて、エレソ共催・共同主催として 7 個の国際会議 (30th OptoElectronics and Communications Conference/International Conference on Photonics in Switching and Computing 2025 (OECC/PSC 2025), 2025 Asia-Pacific Workshop on Advanced Semiconductor Devices (AWAD 2025), Asia-Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar (APSAR 2025), 30th Microoptics Conference (MOC 2025), 2025 International Topical Meeting on Microwave Photonics (MWP 2025), Progress In Electromagnetics Research Symposium (PIERS 2025), Asia-Pacific Microwave Conference (APMC 2025))、エレソ共催・協賛・後援として 2 個の国際会議 (IEEE Symposium on Low-Power and High-Speed Chips and Systems (COOL Chips 28), 2025 International Workshop on Dielectric Thin Films for Future Electron Devices: Science and Technology (IWDTF 2025)) を開催した。

(3-3) 2024 年 (令和 6 年) ソサイエティ大会では一般講演 213 件に加えて、シンポジウム講演 0 件、ソサイエティ特別企画 1 セッション、依頼シンポジウム 6 セッション (共催 1 セッション含む) を実施した。2025 年 (令和 7 年) 総合大会は一般講演 273 件に加えて、シンポジウム講演 12 件、ソサイエティ特別企画 2 セッション、チュートリアル 0 セッション、依頼シンポジウム 7 セッション (共催 3 セッション含む) を実施した。

(3-4) リーダーズ・ミーティング (研専幹事意見交換会) を 2024 年 8 月に開催し、研究専門委員会運営に関わる幹事、幹事補佐及び運営委員を対象に、各会議から研専への施策や依頼事項の説明及び質疑を行い、研専運営に関する手続き、情報等に関する理解を深めた。昨年度に引き続き、説明を簡素化しながらも重要な手続きを把握できるように資料構成を工夫した。今後、本議論を参考にして施策を検討していく。

1. 4 情報・システムソサイエティ

情報・システムソサイエティ (以下、ISS と略す) は、情報処理技術とコンピュータ・通信・人間を融合したシステム化技術に関する基礎から応用までの分野を研究領域としている。本ソサイエティの役割は、会員に研究発表と交流の場を提供することであり、ひいては重要な社会基盤である情報技術分野の持続的な発展と情報社会での様々な問題解決に貢献することにある。ISS が、同研究分野の活動の基盤としてメンバーの活動を支援・促進し、もって社会的役割を果たしていくために、2025 年度も引き続き、論文誌、研究会、総合大会・FIT、ソサイエティ誌、及びこれらソサイエティ活動に関する広報の強化に重点を置いて活動を展開した。

(1) 運営委員会の体制

会員数増強、会員サービス向上、ダイバーシティ向上等の課題は、全会全体にまつわる重要な課題であると同時に、ISS 内でも集中的な検討が必要な喫緊の課題である。ISS では、こうした中長期的な課題を検討するため、2022 年度から ISS 未来企画委員会を設けた。2025 年度も、前年度までの体制で運営した。

(2) 論文誌（和文論文誌・英文論文誌）

(2-1) 和文誌

投稿数の確保の対策として継続的な特集号の企画を行っており、2025 年度は 4 件の特集号を発行した。例年、和文誌編集委員会が特集編集委員会となって企画している「学生論文特集」については、2025 年度も編集作業を進め、2026 年 4 月に 12 件の論文を掲載予定である（投稿数 24 件）。現在、和文論文誌 D への投稿件数は減少傾向にあり、さらに特集号の企画提案数も昨年と比較して減少している。編集委員が関連する研究専門委員会に特集号の企画提案を依頼するとともに、和文と英文の特集号同時企画の推進・蓄積を行っている。2025 年度では「画像符号化・映像メディア処理特集」が和英同時企画として実施された。臨時査読委員の査読の質の記録と、査読の質が高い委員を常任査読委員として推薦するプロセスも継続して実施しており、開始時から常任査読委員が 115 名に増加（2023 年度中に 1 名増加）した。判定報告書の質すなわち査読の質を維持するための幹事団による全数チェックや、編集委員の編集能力向上のための委員会への出席率改善策などは継続実施できている。また、編集作業への SNS の利用についても継続的に行っている。メールベースで判定報告書案に関する審議や幹事団によるチェックを行う方法では、メールの見落としやスパムフィルタの誤検出による不達のため著者通知に時間を要することがあった。これらの作業に Slack を導入することで、見落としや不達を防ぐとともに、作業の効率化を進めた。2023 年度のルール制定および試行を経て、2024 年度からは Slack によるチェック作業を本格的に導入し、2025 年度でも引き続きこの運用を継続した。

(2-2) 英文誌

英文誌では他分冊と同様に J-STAGE に早期公開版を掲載することにした。これにより引用件数の増加が期待される。また Web of Science の IF は、0.5 (2017)、0.576 (2018)、0.449 (2019)、0.559 (2020)、0.695 (2021)、0.72 (2022)、0.72 (2022)、0.59 (2023) 0.8 (2024) と増加しており、投稿数の増加にも繋がると考えられる。また特集号については、11 件が発行され、ほぼ例年どおりの発行件数となった。投稿数の多い特集号は、“Intelligent Information Processing Technology to be Integrated into Society”（投稿数 18 件、内 Letter 3 件、採録数 8 件、内 Letter 2 件）、“Data Engineering and Information Management”（投稿数 13 件、内 Letter 0 件、採録数 8 件、内 Letter 0 件）、“Forefront Computing”（投稿数 11 件、内 Letter 2 件、採録数 5 件、内 Letter 2 件）などであった。さらに、投稿者へのサービス改善の 1 つとして、査読日数の削減を目指しており、査読委員の割り当てが遅れ気味の編集委員に対し、週一回の自動メールとは別に担当幹事から直接催促メールを出している。これに返信して作業を急ぐ編集委員も多く、平均査読期間の短縮が期待される。

(2-3) ISS シンポジウム・論文誌同時査読制度

ISS あるいは ISS に属する研究専門委員会が主催あるいは共催するシンポジウム、ワークショップ、国際会議（以下、シンポジウムと総称する）において募集された査読付き論文を、論文誌論文として同時査読し、採択された場合には論文誌に掲載する制度を整備した。シンポジウムの査読付き論文を同時査読により論文誌に掲載できる選択肢を著者に示すことによって、論文誌への投稿数の向上を期待した制度である。

2025 年 7 月に PRMU 研専が母体となり開催された国際会議 MVA2025、2025 年 12 月に「合意と共創」研専が母体となり開催された国際会議 KICSS2025、2026 年 8 月に PRMU 研専が母体となり開催される国際会議 MIRU2026 においてこの制度を適用した。

(3) 研究会

2025 年度は、24 の研究専門委員会と、2 つの特別研究専門委員会、活発な活動を行った。第一種研究会開催総数、発表総件数は現在集計中で更新予定である（2025 年度は 101 回、1,886 件）。外部資金受け入れは計 1 件（10 万円）（前年度は 2 件 20 万円）を承認・実施した。

前年度に引き続き、ハイブリッド研究会開催の負担軽減策の 1 つとして、一昨年度整備したハイブリ

ッド開催に係る配信機材について貸出しを実施した。今後、ハイブリッド開催の継続について研究専門委員会の意向を最大限尊重しつつ、ソサイエティとして可能なサポートを行っていく。

(4) 大会・FIT

(4-1) FIT2025 (情報科学技術フォーラム)

ソサイエティ大会 (ISS/HCG) と情報処理学会 (IPSJ) の秋の全国大会を統合した FIT2025 を、北海道科学大学で 2025 年 9 月 3 日～5 日の 3 日間でハイブリッド開催した。参加者数は 2,277 名 (前年 2,331 名) であった。現地来場者は 1,349 名となっており、前年 1,053 名を大きく上回った。オンラインと現地参加の需要が両方あることが窺えた。.. 選奨論文 83 件、一般論文 600 件、の計 683 件 (前年 602 件) の研究発表が行われたほか、トップコンファレンスセッションの 15 セッションを含め、計 34 件の企画セッションが実施された。FIT の参加者の他、研究会のみとして 328 名の参加者があった。学術賞表彰式も開催し、FIT2024 船井業績賞 (1 件)、および船井ベストペーパー (3 編)、FIT 論文賞 (8 編)、ヤングリサーチャー賞 (10 名) を表彰した。

FIT2026 は、北九州学術研究都市 (北九州市) で 2026 年 9 月 2 日～4 日にハイブリッド形式にて開催予定である。引き続き、各種企画の一層の充実など参加者に対するメリットの訴求を図る予定である。その一環として、スポンサー展示と同会場においてポスター発表を初開催する。口頭発表者は希望によりポスター発表も行い、研究者やスポンサー企業と交流できる。

(4-2) 2025 年総合大会

2026 年 3 月 9 日～13 日に九州産業大学 (福岡) において対面で開催された総合大会に合わせ、ISS は 2 件の依頼シンポジウムセッション、1 件の公募シンポジウムセッションを実施した。

FIT2026 は 2027 年 3 月 8 日～12 日に東京理科大学 (東京都葛飾区) で開催する予定である。(4-1) FIT2024 (情報科学技術フォーラム)

ソサイエティ大会 (ISS/HCG) と情報処理学会 (IPSJ) の秋の全国大会を統合した FIT2024 を、2024 年 9 月 4 日～6 日の 3 日間でハイブリッド開催した。参加者数は 2,331 名 (前年 2,256 名) であった。現地来場者は 1,053 名となっており、ハイブリッド開催に対する一定の需要が窺えた。.. 選奨論文 100 件、一般論文 502 件、の計 602 件 (前年 567 件) の研究発表が行われたほか、トップコンファレンスセッションの 15 セッションを含め、計 27 件の企画セッションが実施された。FIT の参加者の他、研究会のみとして 149 名の参加者があった。学術賞表彰式も開催し、FIT2024 船井業績賞 (1 件)、および船井ベストペーパー (3 編)、FIT 論文賞 (7 編)、ヤングリサーチャー賞 (9 名) を表彰した。

FIT2025 は、北海道科学大学 (札幌市) で 2025 年 9 月 3 日～5 日にハイブリッド形式にて開催予定である。引き続き、各種企画の一層の充実など参加者に対するメリットの訴求を図る予定である。

(5) 国際化施策

本ソサイエティの活動の国際化に向けた取り組みとして、2025 年度は、IEICE-ISS 主催、PRMU 研専が母体となり、19th International Conference on Machine Vision Applications (MVA2025) を 2025 年 7 月 26 日～28 日に京都国際会館 (京都) にて開催した。MVA2025 は IAPR endorsed で行われ、MIRU2025 (7 月 29 日～8 月 1 日) と連続開催 (co-located) とした。前回の MVA2023 (2023 年 7 月、浜松) では sponsored by the MVA Organization とおいたのに対し、MVA2025 では sponsored by IEICE-ISS と ISS が直接主催する体制を明らかにして運営を進めた。また PRMU 研専が運営を担い、IEEE-RAS がパートナーに加わった。加えて、IEICE Transactions on Information and Systems (DV ISS Symposium) への同時投稿が可能な「ISS シンポジウム・論文誌連携査読制度」が新たに導入された。さらに、採択論文は IEICE Proceeding Series として出版されるとともに、IEEE Xplore への収録も予定されている。トピックスとしても従来の Sensing・Algorithms・Applications に加え、Generative AI、VLM/MLLM、Foundation Models などの新たな分野が追加され、最新の研究動向を反映した会議となった。

一方、国際学会との連携として、2024 年度に Asia-Pacific Signal and Information Processing Association (APSIPA) と ISS の Sister Society Agreement を更新した。APSIPA は 2009 年に設立され、会員数 400～500 名で、主要な活動の一つとして年次会議 (APSIPA ASC) を毎年開催しており (参考: <https://www.apsipa.org>)、2025 年度は APSIPA ASC 2025 が 10 月 22 日～24 日にシンガポール (Shangri-La) にて開催された。

また、若手研究者育成と国際競争力強化のための施策として ISS 国際会議派遣制度の運用を進めてい

る。2025年3月のPRMU研究会では、同制度によって派遣したECCV2024における成果報告を実施した。さらに2025年度には、台湾のChinese Image Processing and Pattern Recognition Society (IPPR)とIEICE-ISSとの間でMemorandum of Understanding (MOU)を新たに締結した。本MOUは、学術イベント(会議・ワークショップ・シンポジウム)の共同開催、学術資料・出版物の交換、共同研究およびSIG活動、研究者・学生の相互訪問、チュートリアル・コンペティション・トレーニングプログラムの共催など、幅広い学術交流と協力を推進するものであり、5年間の有効期間で締結された。IPPR側はWen-Huang CHENG会長、ISS側は篠田浩一会長が署名した。

その他

(6-1) ソサイエティ誌

本年度もソサイエティ誌は、5回/年(通常号4回と特別号)の発行を継続し、研究会活動を紹介するためのインタビュー記事、研究会の会議報告等を掲載した。さらに、ソサイエティ活動の活性化を目的として、研究会、国際会議、コンテスト等の幅広い活動内容の情報発信を積極的に研究会に呼びかけることで、多彩な記事が掲載され、after コロナ時代におけるソサイエティ会員の情報共有、円滑な連携を支援した。

(6-2) 選奨

ISSでは、ソサイエティの独自性向上と活性化のための施策として、サーベイ論文、先見論文、連作論文、システム開発論文を選定対象とするソサイエティ論文賞を設定している。ソサイエティ活動について顕著な貢献があった会員を選奨する活動功労賞も設定し、2009年度からは、従来の活動功労賞を「活動功労賞」と「査読功労賞」に発展的に分割し、貢献のあった会員を選奨している。2025年度は活動功労賞(4名)ならびに査読功労賞(10名)の授与を行った。

(6-3) 広報

今年度は、ソサイエティ誌、総合大会、受賞者情報等について随時ウェブサイトへの掲載を行うとともに、未来60年賞の募集告知や、総合大会にて開催されたGlobalNet Workshop 2026の告知をウェブサイト上で発信するなど、活動の周知および活性化に取り組んだ。さらに、電子情報通信学会全体で行われたウェブサーバ更改に伴い、ウェブサイトを新サーバへ移行する作業を実施した。またメンバー間の円滑な情報共有およびコミュニケーションの活性化を図るため、メンバーの入れ替わりに伴うメーリングリストのメンテナンスを定期的実施するとともに、メーリングリスト配信に関する審議を1件実施した。

1. 5 NOLTA ソサイエティ

(1) ソサイエティ運営

2025年度は、前年度までの対面開催を軸とした活動を継続しつつ、ソサイエティの組織基盤を維持し、さらなる国際展開を推進する重要な一年となった。国外への積極的な展開としては、Korea Multimedia Society (KMMS)とのMOUの更新を行い、2025年7月21日に調印式を執り行った。本覚書の期間は5年間であり、2030年6月に満了する。あわせて、国際的な学術交流の一環として、Professor Jun Heo (Korea University)による英語ウェビナーを公開した。このほか、2024年度と同様に研究会や大会等の対面開催を原則とする方針を維持し、各委員会での定期的な状況確認や、他学会への協賛・技術共催を通じた協力関係の推進、さらにはIEICE先端セミナー「ニューロモルフィック・リザバーコンピューティングの基礎と応用技術」の公開、刷新したウェブサイトやNOLTA Journalのフライヤー等を活用した広報活動にも注力し、NLSの活動を広く発信することに努めた。

(2) 研究活動とその活性化

(2-1) 研究専門委員会の活動

本ソサイエティには非線形問題研究専門委員会(NLP)と複雑コミュニケーションサイエンス研究専門委員会(CCS)の2つの研究専門委員会がある。2025年度の研究会は、すべて対面で開催された。NLPは年間6回開催され講演数は162件(共催の講演を含む)であった。CCSは年間4回開催され講演数は95件(共催の講演を含む)であった。NLPとCCSそれぞれにおいて2024年度の研究会発表論文の中から優秀な発表に対する奨励賞受賞者を選定し、NOLTAソサイエティ大会において表彰した。

(2-2) 非線形理論とその応用に関する国際シンポジウム

(International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications: NOLTA)

・ NOLTA2025

NOLTA ソサイエティのフラグシップ国際会議である NOLTA は 2025 年 10 月 27 日～31 日に沖縄県那覇市にある沖縄県市町村自治会館で開催された。参加者数は 386 名、発表件数は 297 件、セッション数は合計 64 セッションであった。

・ NOLTA2026

2026 年 11 月 17 日～20 日にフランスのグルノーブルでの開催が決まり、実行委員を中心に準備を進めている。

・ NOLTA2027

2027 年 11 月 30 日（月）～12 月 4 日（金）（調整中）にオーストラリアのパースで開催することが決まり、準備を開始した。

(2-3) CCMS 2025 (旧 JKCCS 2025)

これまで NOLTA ソサイエティ CCS 研究会と韓国マルチメディア学会 (KMMS) が合同で開催してきた JKCCS および KJCCS に代わる新たな国際ワークショップとして、CCMS (International Workshop on Complex Communication and Multimedia Sciences) を創設した。その第 1 回となる CCMS 2025 は、KMMS が主催する MITA 2025 (韓国・済州島) の併設ワークショップとして、2025 年 7 月 22 日から 23 日の 2 日間にわたって開催された。本ワークショップには 42 名が参加し、27 件の発表が行われるなど、新たな体制下での良好なスタートを切った。

・ CCMS 2026

NOLTA ソサイエティ CCS 研究会がホストとして、同様のワークショップを NOLTA2026 のサテライトワークショップとして開催予定であり、現在準備を進めている。

(2-4) 総合大会・ソサイエティ大会における活動

2025 年ソサイエティ大会 (岡山大学) の一般セッション講演数は NLP 37 件、CCS 19 件の合計 56 件であった。また、ソサイエティ大会では ESS と合同でソサイエティ表彰贈呈式を開催した。2026 年総合大会 (九州産業大学) では 1 件の企画セッション (4 件の依頼講演とパネルセッション) を開催した。一般セッション講演数は NLP 31 件、CCS 15 件の合計 46 件であった。

(2-5) NOLTA ソサイエティ大会

ソサイエティ全体の活動を総括して、NOLTA ソサイエティがカバーする学問分野のさらなる発展・充実を図るため、NOLTA ソサイエティ独自のソサイエティ大会を開催している。2025 年度は、2025 年 6 月 13 日、14 日に岡山県岡山市の岡山城天守閣および能楽堂ホール tenjin9 で開催された。参加者数は 127 名で過去最高の参加者数となった。一般講演数は 58 件であり、この他、1 件の論文賞受賞記念講演、8 件の研究会奨励賞受賞者講演などが行われた。

(3) 編集活動

(3-1) 論文誌の編集活動

英文電子ジャーナル「Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE (略称 NOLTA)」(オープンアクセス(OA)ジャーナル)を計 4 回発行し、Vol.16, No.2 から Vol.17, No.1 にかけて論文 76 編、巻頭言 4 編、正誤表 (Errata) 1 編の総計 1,225 ページを掲載した。この間、4 回の小特集企画を実施することで掲載内容のさらなる充実を図った。特筆すべき成果として、2025 年 4 月には Scopus への採録が決定したほか、現在は出版倫理委員会 (COPE) への加入手続きを推進しており、国際的な信頼性の向上に努めている。また、今後の展望として掲げている論文の HTML 化および早期公開の実現に向け、運営コストの増大に伴う論文掲載料 (APC) の改定を決定した。新料金は会員 120,000 円 (税込 132,000 円)、非会員 140,000 円 (税込 154,000 円) とし、2026 年 10 月掲載分より適用を開始する。あわせて、同 10 月掲載分より論文誌のテンプレートを 2 段組へと刷新し、新たな装いで発行を開始する予定である。

1. 6 ヒューマンコミュニケーショングループ

ヒューマンコミュニケーショングループ (HCG) は、人間中心の新しいヒューマン・コミュニケーションエンジニアリングに関する学際的研究の推進を目的として 1995 年度に発足し、様々な研究領域を取り込みながら学際的研究を推進している。工学研究者だけでなく、人文科学、社会科学系の研究者も多く参加しており、様々な観点から自由で開かれた議論を行う場を提供している。長年の活動により、関連分野の発表の場として認識されており、当該関連分野の研究者にとっての電子情報通信学会の入口的役割を果たしている。

2025 年度は、前年度から継続して、各研究会や HCG シンポジウムの企画・実施がなされた。論文誌での特集号の企画は従来通り継続され、学際研究の発表・議論の場を提供した。総合大会においては、HCG と他ソサイエティとの連携の場として、3 年連続で企画セッションを実施した。2025 年度の主な活動概要を示す。

(1) 研究会活動

2025 年度は、ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS)、ヒューマン情報処理 (HIP)、メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎 (MVE) の 4 つの第 1 種研究会、情報の認知と行動 (ICB)、コミック工学 (CC)、ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション (VNV)、リアルタイムコミュニケーション言語研究会 (LARC) の計 8 研究会での活動が行われた。

(2) HCG シンポジウム

2025 年 12 月 10 日から 12 日まで福岡県北九州市北九州国際会議場にて、HCG シンポジウム 2025 を開催した。このシンポジウムは HCG の全ての研究専門委員会、特別研究専門委員会、運営委員会が合同で運営しており、プログラムも研専ごとではなく研究内容によって構成し、研専の枠を越えた議論を行う場が提供されている。プログラムのボリュームとしては、発表件数 133 件 (口頭発表とインタラクティブ発表: 79 件, インタラクティブ発表のみ: 54 件)、招待講演 2 件、特集テーマセッション 2 件 (4 セッション)、参加者数は 243 名に達し、過去 2 年間と同程度の規模で開催することができた。また、前回に続き、インタラクティブ発表用の全てのポスターを全会期中掲示できるようにした。これに対して、参加者からは、いつでも閲覧できたので良かったとの好評価となった。また、後述の総合大会企画セッションに先立ち、本会企業イニシアティブ分科会の 1 つであるライフスタイルデザイン分科会との共同で特別セッション「ライフスタイルデザインと共創プラットフォーム: HCG における課題と展望」を企画した。

次回、2026 年度の HCG シンポジウムは、例年通り 12 月の 3 日間開催予定である。開催場所としては、ノウハウの蓄積による運営効率化を目指して、北九州国際会議場が予定されている。

(3) 総合大会企画セッション

電子情報通信学会内での HCG の知名度を向上させるべく、過去 2 年間に引き続き試みとして総合大会において企画セッションを開催した。ライフスタイルデザイン分科会の活動内容や共創プラットフォームと HCG で扱う研究分野との親和性は高く、電子情報通信技術そのものだけではなく、人や社会とのつながりを主題とし、そのステークホルダーとの繋がりを重視するポジションであるという面でも両組織は共通している。そこで、2025 年 8 月に開催された MVE 研究会、前述の HCG シンポジウムのそれぞれにおいて、共創プラットフォームに関するセッションをライフスタイルデザイン分科会と共同で企画した。総合大会では、「ライフスタイルデザイン研究の現時点-共創プラットフォームにおけるコミュニケーションの可能性」と題した企画セッションを、ライフスタイルデザイン分科会と共同で開催し、さらなる議論の深化を図った。

(4) 編集活動

HCG は独自の論文誌を有していないが、本年度は、昨年度と同様に和文 A 分冊と英文 D 分冊それぞれへの掲載を対象とした同時募集・発行を試みた。和文 A 分冊と英文 D 分冊に合計 18 編 (レター 1 編含む) の投稿があり最終的に 9 編の原著論文が採録となった。いずれもヒューマンコミュニケーション研究に新たな視座を提供するものであり、これらを一つの特集として発刊できることを喜ばしく感じている。今後もクオリティとオリジナリティの高い論文特集となるよう、また著者の方々がより大きな恩恵を受けられる論文誌となるよう改善に努め、私達 HCG がヒューマンコミュニケーション研究の中心

的な役割を果たすコミュニティへ発展することを目指す。来年度以降もヒューマンコミュニケーション特集は続ける計画である。

(5) 表彰活動

2025年度ヒューマンコミュニケーション賞（HC賞）の選定を行い、6件を選考し、HCGシンポジウム2025の会場において表彰式を行った。本賞は第一種研究会の発表から25件につき1件、以降50件ごとに1件を基準とし、各研究会で組織したHC賞審査委員会において選考している。

また、HCGシンポジウム2025の発表の中から最優秀インタラクティブ発表賞4件、優秀インタラクティブ発表賞6件、学生優秀インタラクティブ発表賞7件、特集テーマセッション賞4件を選考し、表彰した。

1. 7 情報通信エンジニアリング部門

情報通信エンジニアリング部門（以下、ICEと略す）は、デジタル社会の根幹を支える情報通信インフラの持続的かつ健全な発展を促し、社会の発展に寄与することを使命としている。情報通信インフラは現代の生活を支えるのみならず、将来世代にも恩恵をもたらす重要な社会基盤である。このような背景を踏まえ、情報通信エンジニアリング分野を横断的・総合的に扱うソサイエティ相当組織として、2025年6月にICEを発足させた。発足間もない部門を早期に軌道に乗せるためには、活動の枠組みを体系化し、これを推進する組織体制を迅速に整備することが不可欠である。以下に、発足初年度である2025年度の主な活動を示す。

(1) ソサイエティ大会企画セッション

2025年9月、岡山大学で開催された電子情報通信学会ソサイエティ大会において、「情報通信エンジニアリング分野における効率化/DX化」をテーマとした企画セッションを実施した。本セッションでは、NTT、KDDI、楽天モバイル、ソフトバンクの中堅キーパーソンが登壇し、各社のDX推進やAI活用の取り組みが紹介された。通信利用が多様な分野で拡大する中、情報通信インフラは社会・経済活動を支える不可欠な基盤としての重要性を増している。一方、生産年齢人口の減少に伴い、設計・工事・運用・維持管理に携わる担い手不足が今後深刻化することも懸念される。こうした背景のもと、ネットワーク構築や安定稼働の実現に向け、通信業界の持続的発展とサステナブルな業務運営をいかに実現すべきかについて議論が行われた。

(2) 総合大会企画セッション

2026年3月、九州産業大学で開催された電子情報通信学会総合大会において、「情報通信を支える先端技術の社会実装と通信インフラの未来」をテーマとした企画セッションを実施した。ここでは、NTT、KDDI、楽天モバイル、ソフトバンクの中堅キーパーソンが登壇し、各社が取り組む先端技術の社会実装や効率的で持続可能な業務運営に向けた事例を紹介した。通信の利用が多様化する現在、情報通信インフラは社会のあらゆる活動に不可欠な基盤である。一方、ネットワークの大規模化・高度化により、従来の運用方式では対応が難しい場面が増えている。このような背景を踏まえ、各社は先端技術をいかに社会へ実装し、効率性と持続可能性を両立する運営を実現しているのか、さらにその延長線上にどのような将来の通信インフラ像を描くべきかについて議論が行われた。

(3) 土木学会との意見交換会

ICEの運営ガイドライン検討の初動として、親和性の高い分野である土木学会との意見交換会を実施した。本意見交換会には、ICE委員（東京大学、総務省、NTT、KDDI、楽天モバイル、ソフトバンク）に加え、IEICE理事（構造計画研究所、古河電工）が参加し、社会インフラを取り巻く外部環境を踏まえた今後の運営理念について議論が行われた。土木学会からは、「公共性」や「社会的責任」を軸とした運営理念が共有され、特にインフラメンテナンス総合委員会の取り組みやインフラ健康診断制度など、社会的信頼を担保する枠組みが紹介された。これらは情報通信インフラの再定義や、学会としての公共的使命の明確化において大きな示唆を与えるものであった。議論の中心では、通信分野が顧客志向を基本としてきたのに対し、土木分野は国民全体を対象とした公共性を重視している点が対比として示された。また、電柱や橋梁添架管路の維持管理、災害時の通信確保など、社会課題にまたがる領域では、両分野の連携が重要であることが確認された。本意見交換会は、情報通信を社会インフラとして再認識し、

その公共的使命を明確にするうえで極めて有意義であり、今後の ICE 運営方針を考えるうえで重要な第一歩となった。

(4) 企画会議の設置検討

ICE 全体の企画立案、財務管理、情報発信、選奨、会員サービス拡充を横断的に担う組織として、企画会議の設置を検討した。ICE は設立準備段階から、総務省と国内 4 キャリア（NTT・KDDI・ソフトバンク・楽天モバイル）が連携して活動しており、この枠組みをさらに発展させ、社会ニーズに即したテーマ設定や積極的な情報発信を進めていく。また、選奨活動は会員の意欲向上に直結する重要な施策であり、研究・教育に加えて、開発・普及・復興など社会的価値の高い実践も評価対象とする。情報通信エンジニアリングの社会貢献を広く示すことで、会員の誇りと主体性を高め、次世代人材の育成および部門全体の活性化につなげる方針である。

(5) 財務会議の設置検討

財務基盤を強化し、計画的な予算執行を行うため、財務会議の設置を検討した。ICE は産官学連携が深く、法人・団体が会費を納めて参画する特別会員制度が重要な財源となっている。今後は通信建設会社や関連ベンダーへの情報発信を強化し、産官学が補完的に関わる体制を整え、特別会員の拡大と部門活動の持続的発展を図る。財務会議は、外部連携や企画会議との協調を踏まえつつ、安定した財政運営を実現し、ICE が継続的に社会へ価値を提供できる体制構築の中核としての役割が期待される。

(6) 協議会の設置検討

ICE がカバーする領域は多岐にわたるが、「効率化」「気候変動」「人材確保」「業界活性」の 4 カテゴリにおいて、研究専門委員会に相当する協議会の設置を検討した。これにより、産官学の知見と実践力を結集し、各領域における議論と施策を推進する。

第一のカテゴリである効率化は、DX 推進、リソースシェアリング、低コストソリューションの導入、現場の安全確保などに関する取り組みである。通信事業者が作業安全を強化する目的は、法令順守にとどまらず、現場の安全と健康を守り、事業の持続性と信頼性を確保することにある。安全な作業環境の構築は、通信業界の魅力づくりの核心であり、業界競争力向上にも寄与する。作業安全に関する課題を協力して解決することで、安全水準を底上げし、業界全体の魅力向上につなげることができる。

第二のカテゴリである気候変動は、災害対応における協調体制、環境負荷低減によるカーボンニュートラル推進、強靱なネットワークを維持するためのインフラ強化に関する取り組みである。気候変動に伴う災害の頻度・規模の増大を踏まえ、基地局や給油・機材の共同利用、作業員の共有、船舶協定の締結など、事業者間でリソースを共有する仕組みを構築し、復旧作業の効率化を図る。また、災害時には各社が担当エリアで復旧活動を行い、エリア完了後に段階的にローミング設定を解除するなど、情報共有とローミング連携を組み合わせた復旧プロセスも検討する。

第三のカテゴリである人材確保は、情報通信エンジニアリング分野を支える人材基盤を強化する取り組みである。将来的な従事者減少の懸念を背景に、ICE のホームページを活用した学生向け情報発信などを通じて、本分野の魅力を広く伝える取り組みを進める。産官学が連携して業界全体の魅力を発信し、次世代を担う人材の活性化を図ることで、競争力向上につなげていく。

第四のカテゴリである業界活性は、施工・保守会社との連携強化と現場スキル継承に関する取り組みである。情報通信インフラの維持には熟練技術者の知識と経験が不可欠であるが、業界全体で人材の高齢化や技能継承の困難さが顕在化している。これを克服するためには、企業間の協力や技術継承の仕組みづくりが求められる。また、現場で培われたノウハウを体系化し、教育コンテンツとして共有することで、若手技術者の育成を加速させることが重要である。広報活動を通じて ICE の認知度を高め、通信建設会社や関連ベンダーと共に活動を広げ、会員基盤の拡大を目指す。

2. ソサイエティ大会に関する事項(定款 第 4 条 ロ号)

2. 1 ソサイエティ大会

下記の期日・会場において基礎・境界、NOLTA、通信、エレクトロニクスの 4 ソサイエティが合同して開催した。

期 日 2025年9月8日(月)～12日(金)
 会 場 岡山大学津島キャンパス
 参加者 2,367名、公募講演数は1,144件
 懇親会 The Style (NTT クレド岡山)

(a) 企画セッション数

()内は 2024 年日本工業大学の数値

企画種別	大会委員会	ソサイエティ				合計	共催を除く 実数
		基礎・境界/ ヒューマン	NOLTA	通信	エレクトロニクス		
大会委員会企画	4(4)	—	—	—	—	4(4)	4(4)
ソサイエティ特 別企画	—	1(1)	1(1)	2(2)	1(1)	5(5)	4(4)
パネルセッシ ョン	—	0(0)	0(0)	2(2)	0(0)	2(2)	2(2)
チュートリアル セッション	—	1(1)	0(0)	1(2)	0(0)	2(3)	2(3)
依頼シンポジ ウムセッション	—	4(3)	0(0)	15(10)	5(6)	24(19)	21(18)
合計	4(4)	6(5)	1(1)	20(16)	6(7)	37(33)	33(31)

※備考

(2025年) 共催企画 4 件を含む。 (2024年) 共催企画 2 件を含む。

(b) 公募セッション講演数

()内は 2024 年日本工業大学の件数

	ソサイエティ				合計	共催を除く 実数
	基礎・境界/ ヒューマ ングループ	NOLTA	通信	エレクトロニ クス		
一般セッション	152(145)	56(42)	629(615)	212(213)	1049(1015)	1049(1015)
シンポジウムセッション	3(2)	0(0)	47* ¹ (24)	30* ¹ (0)	80(26)	50* ¹ (26)
公募ポスターセッション	0(0)	0(0)	15(12)	0(0)	15(12)	15(12)
合計[共催含む]	155(147)	56(42)	691(651)	242(213)	1144(1053)	1114(1053)

英語による講演件数 67 件 (36 件)
 キャリアエクスプローラ 178 件 (149 件)
 (2025年)

*1 通信ソサイエティ、エレクトロニクスソサイエティの共催シンポジウムセッション含む。
 両セッションに重複して含まれているものがあるため、実発表数は 47 件。

2. 2 FIT2025(第 24 回情報科学技術フォーラム)

下記の期日・会場において情報・システムソサイエティ、ヒューマンコミュニケーショングループ及び情報処理学会が合同して開催した。

期 日 2025年9月3日(水)～5日(金)
 会 場 北海道科学大学 (ハイブリッド開催)

参加者 2,277名（現地来場者 1,349名）
 懇親会 60名程度（大学内で開催）

イベント企画	研究会提案企画	5件
	委員会提案企画	6件
	現地提案企画	1件
	特別企画	1件
	トップコンファレンスセッション	15件
	スポンサー系セッション	4件
講演件数		698講演

3. 国際会議に関する事項(定款 第4条 口号、へ号)

次のとおり開催した。

会 議 名	開催年月日	参加者数	論文数	場 所	
光通信インフラの飛躍的な高度化に関する国際シンポジウム (EXAT2025)	2025.5.28～5.30	104名	29	姫路	CS/EXAT
30th Optoelectronics and Communications Conference/International Conference on Photonics in Switching and Computing 2025 (OECC/PSC2025)	2025.6.29～7.3	1011名	606	札幌	CS/ES
2025 Asia-Pacific Workshop on Advanced Semiconductor Devices (AWAD2025)	2025.7.3～7.4	145名	73	奈良	ES
The 40th International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers, and Communications (ITC-CSCC 2025)	2025.7.7～7.10	444名	330	韓国, ソウル	ESS
International Workshop on Complex Communication and Multimedia Sciences (CCMS 2025)	2025.7.22～7.23	42	27	済州島, 韓国	NLS
アジア・太平洋 ネットワーク運用と管理シンポジウム (APNOMS2025)	2025.9.22～9.24	147名	100	高雄	CS
Asia-Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar (APSAR2025)	2025.10.5～10.9	264名	145	松江	ES
30th Microoptics Conference (MOC2025)	2025.10.12～10.15	202名	115	宇都宮	ES
2025 International Topical Meeting on Microwave Photonics (MWP2025)	2025.10.14～10.17	107名	70	Quebec, Canada	ES
2025年アンテナ伝搬国際シンポジウム (ISAP2025)	2025.10.27～10.31	800名	526	福岡	CS
The 2025 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA2025)	2025.10.27～10.31	386名	298	沖縄	NLS
Progress In Electromagnetics Research Symposium (PIERS 2025)	2025.11.5～11.9	1,638名	2,060	千葉	ES
The 2025 International Workshop on Smart Info-Media Systems in Asia (SISA2025)	2025.11.12～11.14	40名	26	Phuket, Thailand	ESS
The 20th International Workshop on Security (IWSEC 2025)	2025.11.25～11.27	113	27	福岡	ESS
第30回アジア太平洋通信会議 (APCC 2025)	2025.11.26～11.28	191名	108	大阪	CS
The 6th International Conference on Emerging Technologies for Communications (ICETC2025)	2025.11.26～11.28	214名	119	大阪	CS

Asia-Pacific Microwave Conference (APMC 2025)	2025.12.2～12.5	896名	457	Jeju, Korea	ES
---	----------------	------	-----	-------------	----

4. 出版に関する事項(定款 第4条 イ号)

4. 1 和文論文誌の発行状況

電子版を本会サイトにて公開した。掲載総ページ数は1,635ページである。

分冊	論文	レター	その他	計	特集回数 回
	件数 ページ数	件数 ページ数	ページ数	件数 ページ数	
JA	4	3		7	0
	49	12	0	61	
JB	53	31		84	6
	581	115	10	706	
JC	20	10		30	3
	177	26	2	205	
JD	52	10		62	4
	606	50	7	663	
計	129	54		183	13
	1,413	203	19	1,635	

※その他：巻頭言、正誤

4. 2 英文論文誌の発行状況

電子版を本会サイト及びJ-STAGEにおいて、EBについては、IEEE Xploreでも公開した。掲載総ページ数は5,898ページである。

分冊	論文	レター	その他	計	特集回数 回
	件数 ページ数	件数 ページ数	ページ数	件数 ページ数	
EA	153	72		225	7
	1,564	327	7	1,898	
EB	151	0		151	6
	1,608	0	6	1,614	
EC	56	18		74	10
	481	72	13	566	
ED	144	106		250	11
	1,543	262	15	1,820	
計	504	196		700	35
	5,196	661	41	5,898	

※その他：巻頭言、正誤

4. 3 論文誌（オープンアクセス）の発行状況

(1)NOLTA ソサイエティ

NOLTA ソサイエティでは、ペーパーレス英文論文誌「Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE（略称NOLTA）」(年4回発行)に75件、1,225ページを掲載した。

(2)通信ソサイエティ

通信ソサイエティでは、ペーパーレス英文論文誌「IEICE Communications Express(略称

ComEX) (月1回発行)に107件、433ページを掲載した。

(3)エレクトロニクスソサイエティ

エレクトロニクスソサイエティでは、ペーパーレス研究速報英文論文誌「IEICE Electronics Express(略称 ELEX)」(月2回発行)に230件、1,357ページを掲載した。

4. 4 ニュースレター、ソサイエティ誌の発行状況

各ソサイエティ及びグループでニュースレター、ソサイエティ誌を下記のとおり発行した。

- | | | | |
|------------------------------|---------------------|----|--------|
| (1) 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ | Fundamentals Review | 4回 | 307ページ |
| (2) 通信ソサイエティ | マガジン誌(通信ソサイエティマガジン) | 4回 | 388ページ |
| (3) エレクトロニクスソサイエティ | ニュースレター | 4回 | 75ページ |
| (4) 情報・システムソサイエティ | ニュースレター | 5回 | 87ページ |
| (5) ヒューマンコミュニケーショングループ | ニュースレター (Web) | 3回 | |

5. 選奨に関する事項(定款 第4条 ホ号、ヘ号)

所定の手続きによって選考が進められ、次のとおり各受賞者を決定した。

5. 1 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ

(1)基礎・境界ソサイエティ

(1-1)功労賞

業 績	貢 献 者
アジア南太平洋設計自動化会議2025組織委員長(General Chair)としての貢献	中村 祐一
2025年暗号と情報セキュリティシンポジウム実行委員長としての貢献	國廣 昇

以上2名

(1-2)貢献賞

(1-2-1) ソサイエティ運営

業 績	貢 献 者
基礎・境界ソサイエティ「庶務幹事」としての貢献	葛岡 成晃
基礎・境界ソサイエティ「会計幹事」としての貢献	小林健太郎
基礎・境界ソサイエティ「事業担当幹事」としての貢献	三村 和史
基礎・境界ソサイエティ「大会担当幹事」としての貢献	大東 俊博
基礎・境界ソサイエティ「電子広報担当幹事」としての貢献	西川 広記
基礎・境界ソサイエティ「ソサイエティ誌担当幹事」としての貢献	松田 哲直

以上6名

(1-2-2) 編集

業 績	貢 献 者
論文誌編集委員としての貢献	澤田 賢治
論文誌編集委員としての貢献	早川 諒
論文誌編集委員としての貢献	松井健太郎
論文誌編集委員としての貢献	藤沢 匡哉
論文誌編集委員としての貢献	木村 真之
FR誌編集委員としての貢献	山肩 大祐
FR誌編集委員としての貢献	神長 伸幸
FR誌編集委員としての貢献	越田 俊介

以上8名

(1-2-3) サブソサイエティ運営、研究専門委員会運営

業 績	貢 献 者
音響・超音波サブソサイエティ及び超音波研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	大久保 寛

以上 1 名

(1-2-4) サブソサイエティ運営

業 績	貢 献 者
システムと信号処理サブソサイエティの運営及び活動に対する貢献	田中 雄一
情報理論とその応用サブソサイエティの運営及び活動に対する貢献	太田 隆博

以上 2 名

(1-2-5) 研究専門委員会運営

業 績	貢 献 者
ワイドバンドシステム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	小林健太郎
安全・安心な生活と ICT 研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	山内 尚久
高信頼制御通信研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	岡野 訓尚
信号処理研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	今泉 祥子
回路とシステム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	笠松 大佑
バイオメトリクス研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	鈴木 裕之
高度交通システム研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	佐保 賢志
情報セキュリティ研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	花谷 嘉一
情報理論研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	眞田亜紀子
ハードウェアセキュリティ研究専門委員会の運営および活動に対する貢献	坂本 純一
システム数理と応用研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	劉 健全
イメージ・メディア・クオリティ研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	土田 勝
応用音響研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	伊藤 信貴
VLSI 設計技術研究専門委員会の運営及び活動に対する貢献	笹川 幸宏

以上 14 名

(1-2-6) 会議運営

業 績	貢 献 者
国際会議 ISITA2024 の General Co-Chair としての貢献	植松 友彦
アジア南太平洋設計自動化会議 2025 の運営に対する貢献	小林 悠記
第 47 回情報理論とその応用シンポジウムの運営に対する貢献	辻岡 哲夫
国際会議 IWSEC2024 の運営に対する貢献	四方 順司
第 39 回信号処理シンポジウムの運営に対する貢献	田中 章
バイオメトリクスと認識・認証シンポジウム 2024 の運営に対する貢献	今岡 仁

以上 6 名

(1-2-7) その他の事業

業 績	貢 献 者
2025 年暗号と情報セキュリティ小特集号編集幹事としての貢献	白勢 政明
2024 年と 2025 年 VLSI 設計と CAD アルゴリズム小特集号編集幹事としての貢献	佐藤 真平

以上 2 名

(2) NOLTA ソサイエティ

(2-1) Service Award (貢献賞)

業 績	貢 献 者
For devoted contributions to the operations and activities of the NOLTA Society as Director of General Affairs	立野 勝巳
For devoted contributions to the operations and activities of the NOLTA Society as Director of Treasury	木村 貴幸

For devoted contributions to the editorial activities of Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE, as an Editorial Secretary	清水 邦康
For devoted contributions to the successful organization of the 2024 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA 2024), as a General Co-Chair	長谷川幹雄
For devoted contributions to the Technical Committee on Nonlinear Problems as a Secretary	青森 久
For devoted contributions to the Technical Committee on Complex Communication Sciences as a Secretary	佐々木智志

以上 6 名

(3) 基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ

Fundamentals Review ベストオーサー賞

論 説	著 者
情報理論に基づく秘密情報の符号化—不完全秘匿を用いた安全な符号化法—	山本 博資

以上 1 編

5. 2 通信ソサイエティ

(1) ソサイエティ論文賞

論 文 名	著 者 名
【優秀論文賞】 遠隔拠点間で測定可能な Glass-to-Glass 遅延測定装置の検討と実装	水野 史暁 (慶大) 松谷 健史 (慶大) 佐藤 雅明 (東海大) 植原 啓介 (慶大)
海洋レーダにおけるレンジ・ドップラウオーク補償を用いた航空機クラッタ抑圧に関する検討	松田 暁 (新潟大) 山田 寛喜 (新潟大) 藤井 智史 (琉球大) 長名 保範 (熊本大) 有馬 卓司 (東京農工大) 宇野 亨 (東京農工大)
【チュートリアル論文賞】 所望の励振振幅位相を実現する無損失ビーム形成回路の設計法	深沢 徹 (金沢工大) 秋元 晋平 (三菱電機) 稲沢 良夫 (三菱電機)
二つのループアンテナを用いたインパルス性磁気雑音波源定位	西方 敦博 (科学大)
【Best Paper Award】 Modified Four-Component Scattering Power Decomposition of PolSAR Data by Using Rotated Dihedral Component	Chino KOBAYASHI (Niigata Univ.) Hiroyoshi YAMADA (Niigata Univ.) Ryoichi SATO (Niigata Univ.) Motofumi ARII (Mitsubishi Electric Corp.)
Computation-Free Phase Rotation by Shifted Circular Repetition for DFT-Precoding Scheme to Peak Power Reduction of OFDM Signals	Hikaru KAWASAKI (NICT) Fumihide KOJIMA (NICT) Takeshi MATSUMURA (NICT)

Experimental Trials of 5G Transmission in 28 GHz and 3.7GHz Bands and Investigation of Realistic Performances in Manufacturing Factory	Atsuya NAKAMURA (NTT DOCOMO, INC.) Satoshi SUYAMA (NTT DOCOMO, INC.) Huiling JIANG (NTT DOCOMO, INC.) Shinji KOBAYASHI (OMRON Corp.) Hiroaki YAMADA (OMRON Corp.) Goro IKEDA (Nokia Solutions and Networks Japan G.K.)
Dynamic Packet Flow Allocation Method Considering Reconfiguration Overhead with Intermediate Solutions in Software-Defined Networks	Taito KIKUCHI (Kyoto Univ) Takehiro SATO (Kyoto Univ) Eiji OKI (Kyoto Univ)
【Best Tutorial Paper Award】 Segment Routing IPv6 Based Low Latency Mobile Network for Vehicular Communications towards Automated Driving Era	Manabu MIKAMI (SoftBank Corp.)
【ComEX Best Letter Award】 Vertically Polarized Omnidirectional Reflector Antenna Fed by a Circular Waveguide Bent TM01 Mode Converter for the 150 GHz Band	Jiro Hirokawa (Inst.Sci.Tokyo) Riki Yanagisawa (Inst.Sci.Tokyo) Takashi Tomura (Inst.Sci.Tokyo) Issei Watanabe (NICT)
【マガジン論文賞】 複数のドローンや無線機の連携による空の安全運航支援のための無線通信	三浦 龍 (NICT) 松田 隆志 (NICT) 越川 三保 (NICT) 松村 武 (NICT)

以上 11 編

(2)マガジン賞

記 事 名	著 者 名
ともに歩んでくれる君と:ゲーム AI に見る人間と AI の幸せな関係	横山大作 (明大)

以上 1 編

5. 3 エレクトロニクスソサイエティ

(1)ソサイエティ賞

分 野	業 績	貢 献 者
第 1 分野	ワイヤレス人体センシング技術の高度化に関する先進的研究	阪本卓也 (京都大学)
第 2 分野	無し	無し
第 3 分野	光通信向け超広帯域アナログマルチプレクサに関する先駆的研究	長谷宗彦 (NTT)、脇田斉 (NTT)、白鳥悠太 (NTT)

以上 2 件

(2) レター論文賞

論 文 名	著 者 名
-------	-------

エピタキシャル ZnO 薄膜を用いた BAW 型圧電薄膜昇圧素子	木下 紗里那, 岸 大貴, 小林 栞, 柳谷 隆彦 (早稲田大学)
----------------------------------	-----------------------------------

以上 1 件

(3)ELEX Best Paper Award

論文名	著者名
Single-channel 240-Gbit/s sub-THz wireless communications using ultra-low phase noise receiver	Keisuke Maekawa (Osaka University), Tomoya Nakashita (Osaka University), Toki Yoshioka (Osaka University), Takashi Hori (Japanese Branch Office, IMRA America Inc.), Antoine Rolland (Boulder Research Labs, IMRA America Inc.), and Tadao Nagatsuma (Osaka University)
A low loss 87-97-GHz bandpass filter with ARCL-to-SCL GSG transition using 3D-micromachined air core recta-coax line	Yan Ding (North China Institute of Science and Technology / University of Chinese Academy of Sciences), Xing Fan (North China Institute of Science and Technology), Jianghua Wang (North China Institute of Science and Technology)

以上 2 件

(4)招待論文賞

論文名	著者名
大規模 InP 集積光フェーズドアレーの作製と実証	小松 憲人, 中野 義昭, 種村 拓夫 (東京大学)

以上 1 件

(5) エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞

2025 年総合大会 (2025 年 3 月)

分野	講演者
電磁波理論およびマイクロ波分野	牛山 太陽 (電気通信大学) 濱田 佳太 (同志社大学)
光半導体及びフォトニクス分野	小市 崇央 (大阪大学) 応 葦寧 (信州大学)
回路およびエレクトロニクス分野	紙浦 欣輝 (九州大学) 吉田 裕二 (東京科学大学)

以上 6 名

2025 年ソサイエティ大会 (2025 年 9 月)

分野	講演者
電磁波理論およびマイクロ波分野	小林 亜彩香 (立命館大学) 平林 祐一 (法政大学)
光半導体及びフォトニクス分野	木ノ下 秀聡 (神奈川工科大学) 佐藤 歩 (横浜国立大学)
回路およびエレクトロニクス分野	片浦 碧 (東北大学) 高橋 颯太 (東京科学大学)

以上 6 名

5. 4 情報・システムソサイエティ

(1)ソサイエティ論文賞

論 文 名	著 者 名
該当なし	

(2)功労賞

(2-1)活動功労賞

業 績	貢 献 者
英文論文誌編集委員としての貢献	岩崎 裕江(東京農工大)
英文論文誌編集委員としての貢献	大久保 好章(北海道教育大)
英文論文誌編集委員としての貢献	高橋 隆史(龍谷大)
和文論文誌編集委員としての貢献	中村 勝一(福島大)
画像工学研究専門委員会活動への幹事補佐・幹事, 和文論文誌編集委員としての貢献	岩村 俊輔(NHK)
ソサイエティ誌編集幹事・編集委員としての貢献	浦 正広(金沢工大)
情報通信システムセキュリティ研究専門委員会活動への幹事補佐・幹事・副委員長としての貢献	木藤 圭亮(三菱電機)
ISS 技術幹事としての貢献	福森 隆寛(立命館大)
ISS 技術会議およびパターン認識・メディア理解研究専門委員会への貢献	船富 卓哉(奈良先端大)

以上 9 名

(2-2)査読功労賞

業 績	貢 献 者
論文誌査読委員としての貢献	柴田 裕一郎(長崎大)
論文誌査読委員としての貢献	萩原 克幸(三重大)
論文誌査読委員としての貢献	四柳 浩之(徳島大)
論文誌査読委員としての貢献	内海 ゆづ子(大阪公立大)
論文誌査読委員としての貢献	西田 昌史(静岡大)
論文誌査読委員としての貢献	波部 斉(近畿大)
論文誌査読委員としての貢献	清水 雅夫(日本大)
論文誌査読委員としての貢献	渡辺 哲也(新潟大)
論文誌査読委員としての貢献	伊沢 亮一(NICT)
論文誌査読委員としての貢献	古賀 久志(電通大)

以上 10 名

5. 5 FITの各賞

(情報・システムソサイエティ及びヒューマンコミュニケーショングループと情報処理学会との合同)

(1)船井業績賞

業 績	受 賞 者
創造的活動を支援するインタラクション	五十嵐 健夫(東大)

以上 1 件

(2)船井ベストペーパー賞

論 文 名	受 賞 者
HistoClip: CLIP-Driven Multi-Label Classification for Histopathological Images	BAI BINGYUAN・宮田 一乗(北陸先端大)

双方向シーンフロー推定と時間的サンプリングに基づく点群フレーム補間	松崎 康平・野中 敬介 (KDDI 総合研究所)
態度分析タスクのための音声対話データ仮名化	伊藤 葵・伊藤 克亘 (法政大)

以上 3 編

(3) FIT 論文賞

論 文 名	受 賞 者
部分属性指定に対応した近似最近傍探索アルゴリズム	植村 玲央・天方 大地 (阪大)
ChilmAI: A New Daycare Matching System	孫 兆鴻 (九大/サイバーエージェント)・山田 直行・竹浪 良寛・森脇 大輔 (サイバーエージェント)
不完全情報展開型ゲームの求解における利得摂動に関する研究	眞坂 航宙・岩崎 敦 (電気信大)・坂本 充生・阿部 拳之・蟻生 開人 (サイバーエージェント)
ベイズ推定と深層学習によるロバストなフルマラソン完走タイム予測モデルの構築と SHAP 値による解釈	梶浦 雅之・稲葉 龍一郎・宮崎 陽輔・平野 賢 (アシックス)
Expression Recognition Based on Ear Canal Shape Detection Using Earbud and Ultrasound	高 天・董 学甫・田谷 昭仁・西山 勇毅・瀬崎 薫 (東大)
手話 CG アニメーション生成における空間位置制御手法の評価	内田 翼・箱崎 浩平・金子 浩之 (NHK)
カーネルにおけるサービス妨害攻撃緩和手法の提案	葛野 弘樹 (神戸大)
AI の社会性とその課題：経済ゲーム実験による AI の社会性評価指標の提案	後藤 晶 (明治大)

以上 8 編

(4) FIT ヤングリサーチャー賞

論 文 名	受 賞 者
LDPC 符号に対する DC 最適化復号法	白鳥 春菜 (筑波大)
文脈情報を活用した適応的時間間隔による Mamba の拡張	武智 莉央 (阪大)
マルチエージェントシミュレーションによる欲求駆動型 LLM エージェントの個性創発	藤山 仁聖 (電通大)
データ拡張に基づくヒト胚性幹細胞を介した毒性予測	齋藤 彩斗 (群馬大)
類似時期データの活用による季節変動を考慮した交通事故予測精度の向上	井土 雅耀 (神奈川大)
手のひらでわかるリアルタイム認知負荷推定技術	森脇 哲人 (京セラ)
物体追跡と深層学習による歩容認証を用いた動画データに基づく放牧牛の自動個体識別	坂本 直暉 (神戸大)
動的メッシュ符号化技術の国際標準規格 V-DMC 対応リアルタイムエンコーダの開発	岸本 広輝 (KDDI 総合研究所)
脳血流量・心拍変動によるマルチモーダルコミュニケーションネットワークを用いた共同作業における効率性指標推定手法の提案	鈴木 優人 (青山学院大)
高齢者の自身の運転に対する過大評価の是正に影響する意識変化	井内 終仁 (東京科学大)

以上 10 名

5. 6 ヒューマンコミュニケーショングループ

(1)ヒューマンコミュニケーション賞

研究会名	業 績	受 賞 者
HCS	概念差検出による多言語コミュニケーション支援 (HCS2024-69)	西村一球・村上陽平・ピタク スワンモンティージャー (立命 館大)
HCS	毛髪部に装着可能な簡易脳波計を用いたユーザ状態識 別の検証・評価 (HCS2024-115)	為近彩智・山口 仁・大西隆之 (NTT)
HIP	嫌悪画像の認識は遅れる (HIP2025-15)	木村慧一・川合伸幸 (名大)
MVE	バーチャルな翼の実現に向けた触覚の解釈性を有する 身体拡張インタフェースの開発 (MVE2025-5)	谷澤健太・中村優吾・福嶋政期 (九大)
MVE	フリマアプリでの商品説明文の作成における人・AI 協 働の基礎検討 (MVE2024-25)	藤原未雪 (mercari R4D)・中條 麟太郎・ハウタサーリ アリ (東 大)
WIT	色識別を支援する感覚代替インタフェースに向けた色 (WIT2025-8)	長岡 瞬・平尾悠太郎・ペルス キア エルナンデス モニカ・ 内山英昭・清川 清 (奈良先端 大)

以上 6 件

(2)HCG シンポジウム賞

ぶるぶ L-ooming, ぶるぶ L-looking—方向別距離変動に基づく 触覚的空間知覚のデザイン—【最優秀インタラクティブ発表 賞】	下川隼輝・戸塚海太・武川直樹 (東京電機大)・東 孝文 (島根 大)・森田慎一郎・小林春美・中 村明生 (東京電機大)
視覚障がい者向け空間力覚誘導システムを用いた立体触認知の 評価【最優秀インタラクティブ発表賞】	坂井忠裕・大西淳児・坂尻正 次・松尾政輝・御園政光 (筑波 技術大)・三浦貴大 (産総研)
試合データに基づく打者タイミング能力の評価指標の提案【最 優秀インタラクティブ発表賞】	青木真吾 (工学院大)・北澤翔太 (西武ライオンズ)・西條直樹 (NTT)・三上 弾 (工学院 大)
視覚障害者と晴眼者が共に楽しめるインクルーシブボードゲー ムの開発【最優秀インタラクティブ発表賞】	仲松 藍・隅野明日菜 (千葉 大)・中野 慧 (都立産技高 専)・井田怜菜・鮎澤歩香・酒寄 寛也・松尾政輝 (筑波技術大)・ 三浦貴大 (産総研)
モーションキャプチャとデジタル傾斜計による自動 膝伸展角度測定の妥当性の検証【優秀インタラクティブ発表 賞】	時任真幸・江藤 倅・北村綱 大・柴田凌佳・渡邊和貴 (九州 栄養福祉大)
個別化臨床推論を深化させるための仮説駆動型研究・ 自由エネルギー原理に基づく方法論【優秀インタラクティブ発 表賞】	今井絵美子 (神戸大/姫路獨協 大)・片桐祥雅 (応用生化学研究 所/東大)
AI は母音に感情を感じるか?—GPT-5 における母音感情音象徴 の検討—【優秀インタラクティブ発表賞】	大竹裕香・山本健太郎 (九大)
マルチモーダル Voice Activity Prediction モデルに基づく発話タ ーン終了および相槌予測【優秀インタラクティブ発表賞】	石井 亮・永徳真一郎・横山怜 汰・澤瀬順一 (NTT)
医師と AI による集合知—推定精度を高める協働条件の分析— 【優秀インタラクティブ発表賞】	本田秀仁 (追大)・浜野 淳 (筑 波大)・香川璃奈 (産総研)
感動体験の種類と文化的傾向 —日本人におけるホフステード指 数との関連—【優秀インタラクティブ発表賞】	川嶋優衣・末神 翔 (ヤマハ発 動機)・正田 悠 (京都市立芸術 大)
前屈姿勢からのリフティング動作時の矢状面腰椎骨盤リズムと	時任真幸・江藤 倅・北村綱

荷重位・非荷重位におけるハムストリングス伸張性との関係 【学生優秀インタラクティブ発表賞】	大・柴田凌佳・渡邊和貴（九州栄養福祉大）
メデューサ効果—顔認識阻害を用いた人間らしさの知覚メカニズムの検証—【学生優秀インタラクティブ発表賞】	韓 婧, 山田祐樹（九大）
能動的触覚推論のためのデザイン —空間構造の把握への RtD 的アプローチ—【学生優秀インタラクティブ発表賞】	薙野智哉・下川隼輝・戸塚海太・武川直樹・森田慎一郎・小林春美（東京電機大）・東 孝文（島根大）・中村明生（東京電機大）
肌をなでられる感覚を再現するウェアラブル触覚デバイスの検討【学生優秀インタラクティブ発表賞】	谷本彬人・神原誠之（甲南大）
若者の乳児に対する肯定的な感情を育むためのインタラクティブな VR 体験設計【学生優秀インタラクティブ発表賞】	池上颯馬・田岡祐樹・中谷桃子（東京科学大）

以上 21 件

6. 研究会等に関する事項(定款 第4条 ロ号、ハ号)

6. 1 基礎・境界ソサイエティ／NOLTA ソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：98回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
回路とシステム	下田 真二	5	127
情報理論	野上 保之	4	142
信頼性	岡村 寛之	8	61
超音波	青柳 学	8	64
応用音響	西浦 敬信	6	169
非線形問題	長谷川 幹雄	6	161
VLSI 設計技術	富山 宏之	4	120
情報セキュリティ	清本 晋作	4	150
信号処理	西川 清史	4	189
ワイドバンドシステム	落合 秀樹	4	124
システム数理と応用	宮本 俊幸	4	80
思考と言語	坪田 康	4	54
技術と社会・倫理	辰己 丈夫	4	106
ITS	羽多野 裕之	5	90
スマートインフォメディアシステム	笹岡 直人	4	73
イメージ・メディア・クオリティ	土田 勝	4	120
高信頼制御通信	石井 光治	4	123
バイオメトリクス	高橋 健太	4	106
複雑コミュニケーションサイエンス	内田 淳史	4	80
安全・安心な生活と ICT	水野 修	4	63
ハードウェアセキュリティ	秋下 徹	4	116
合計		98	2318

6. 2 通信ソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：133回 また、第二種研究会、第三種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
アンテナ・伝播	今井 哲朗	11	232
宇宙・航行エレクトロニクス	網嶋 武	5	119
衛星通信	岸 洋司	5	83
環境電磁工学	豊田 啓孝	10	116
ネットワークシステム	三好 匠	10	331
情報ネットワーク	村瀬 勉	5	105
コミュニケーションシステム	小崎 成治	7	120
電子通信エネルギー技術	関屋 大雄	6	38
光通信システム	中村 守里也	7	71
無線通信システム	眞田 幸俊	10	299
コミュニケーションオリティ	松田 崇弘	6	130
フォトニックネットワーク	杉崎 隆一	6	75
光ファイバ応用技術	椎野 雅人	7	101
情報通信マネジメント	大石 晴夫	5	53
インターネットアーキテクチャ	池永 全志	7	105
スマート無線	石津 健太郎	5	104
短距離無線通信	齋藤 健太郎	5	83
ヘルスケア・医療情報通信技術	杉本 千佳	5	54
無線電力伝送	伊東 健治	7	84
センサネットワークとモバイルインテリジェンス	大和田 泰伯	4	77
合計		133	2380

6. 3 エレクトロニクスソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：81回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
機構デバイス	福田 直紀	3	29
磁気記録・情報ストレージ	仲村 泰明	4	21
超伝導エレクトロニクス	入江 晃亘	3	16
電子ディスプレイ	辻 博史	4	8
電子デバイス	新井 学	7	84
電子部品・材料	寺迫 智昭	7	74
電磁界理論	鈴木 敬久	4	84
シリコン材料・デバイス	宇佐美 達矢	8	79
マイクロ波	眞田 篤志	9	221
集積回路	若林 準人	5	130
有機エレクトロニクス	馬場 暁	8	66
光エレクトロニクス	中津原 克己	6	121
レーザ・量子エレクトロニクス	石井 啓之	5	72
エレクトロニクスシミュレーション	辻 寧英	4	102
マイクロ波テラヘルツ光電子技術	加藤 和利	4	95
合計		81	1202

6. 4 情報・システムソサイエティ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：101回 また、第二種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
MEとバイオサイバネティクス	百瀬 桂子	6	79
ライフインテリジェンスとオフィス情報システム	茂木 学	6	78
画像工学	山崎 俊彦	5	197
言語理解とコミュニケーション	小早川 健	3	19
コンピュータシステム	井口 寧	4	78
コンピューテーション	牧野 和久	5	28
人工知能と知識処理	大冨 忠親	3	27
ソフトウェアサイエンス	肥後 芳樹	3	60
データ工学	渡辺 知恵美	3	28
パターン認識・メディア理解	斎藤 英雄	4	64
ダイバーシブルコンピューティング	細川 利典	6	150
ニューロコンピューティング	吉本 潤一郎	4	121
知能ソフトウェア工学	田辺 良則	4	71
音声	篠崎 隆宏	4	122
教育工学	鷹岡 亮	9	84
医用画像	羽石 秀昭	4	116
リコンフィギャラブルシステム	小林 悠記	5	126
情報通信システムセキュリティ	山内 利宏	4	141
情報論的学習理論と機械学習	神島 敏弘	3	52
高機能マルチメディア	鶴木 祐史	5	139
クラウドネットワークロボット	大和 淳司	3	25
サービスコンピューティング	中口 孝雄	4	39
合意と共創	伊藤 孝行	4	42
合計		101	1886

6. 5 ヒューマンコミュニケーショングループ

研究専門委員会が下記研究会を開催した。

第一種研究会：19回 また、第二種研究会及び第三種研究会を開催した。

第一種研究会活動状況

研究会名	専門委員長名	研究会開催数	発表件数
ヒューマンコミュニケーション基礎	林 勇吾	5	89
ヒューマン情報処理	清河 幸子	5	88
メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎	新井田 統	5	127
福祉情報工学	齊藤 剛史	4	38
合計		19	342

7. ソサイエティ及びグループ会員に関する事項(定款 第3章)

各ソサイエティ及びグループにおける会員数は次のとおりである。

[]内はフェロー会員数 (ESSにNLSも含む)

	ESS	CS	ES	ISS	NLS	HCG	合計
2024年度末 登録数	4,181	8,295	4,291	8,129	389	809	26,511
	【154】	【334】	【180】	【284】	-	-	【952】
2025年度末 登録数	4,176	8,345	4,180	8,145	431	790	26,076
	【153】	【324】	【190】	【281】	【12】	-	【959】

前年度との差	-5	50	-111	16	42	-19	-435
	【-2】	【-10】	【10】	【-3】	-	-	【7】

注) ESS : 基礎・境界ソサイエティ
CS : 通信ソサイエティ
ES : エレクトロニクスソサイエティ
ISS : 情報・システムソサイエティ
NLS : NOLTA ソサイエティ
HCG : ヒューマンコミュニケーショングループ

Ⅲ. 支部事業

1. 北海道支部

2025 年度は、支部連合大会、各講演会等の毎年実施してきて効果的な事業、学生会発表研究会の開催など当支部独自の事業を継続して行い、最大限の会員サービスに努めた。

1-1 事業概要

2025 年度の諸事業は年度当初の計画に沿って以下のとおり実施した。

1-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

- ・支部連合大会：電気・情報関係学会で組織された連合大会を 1 回開催した（一般講演数 145 件、参加者数 299 名）。室蘭工業大学

1-1-2 教育事業（定款 第 4 条 ホ号）

- ・応用物理学会が企画した主に小中高生を対象としたイベント（「リフレッシュ理科教室」サイエンス・オリエンテーリング in 札幌 2025）を共同主催した（参加者数：116 名）。
- ・ロボットトライアスロン 2025、KDDI 財団×公立千歳科学技術大学 科学実験教室、創テくらぼセミナーを後援した。

1-1-3 学生会事業（定款 第 4 条 ロ号、へ号）

- ア. 学生会研究発表会：インターネット上で論文発表を行うインターネットシンポジウムを 1 回開催した（発表件数 16 件）。
- イ. 室蘭工業大学学生ランチ活動として、講演会を開催。支部連合大会にて IEEE 北海道大学・室蘭工業大学 Student Branch とともに学生交流会を企画した。

1-2 選奨（定款 第 4 条 ホ号）

1-2-1 2025 年度北海道支部学生奨励賞

北海道支部における学生奨励賞の選奨細則に基づき以下の 15 名を選定(推薦 9 名、公募 6 名)し、2026 年 3 月に賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属
太齊 蓮	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
中島 佑	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
昇 航己	北海道大学 大学院情報科学院 情報エレクトロニクスコース
金子 透也	室蘭工業大学 大学院工学研究科 生産システム工学系専攻
Chen Chenfang	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻
早稲田 翔太郎	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻
高橋 快勢	北見工業大学 大学院工学研究科 工学専攻 情報通信工学プログラム
萩原 啓道	公立はこだて未来大学 大学院システム情報科学研究科
細川 皓平	北海道科学大学 大学院工学研究科 情報工学専攻
佐藤 雅也	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
久保田 健太	北海道大学 大学院情報科学院 メディアネットワークコース
柳井 雅貴	北海道大学 大学院情報科学院 システム情報科学専攻
石野 龍之介	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻
松崎 泰輝	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻
及川 怜聖	公立千歳科学技術大学 理工学研究科

1-2-2 2025 年度北海道支部学生会インターネットシンポジウム優秀発表賞

インターネットシンポジウム優秀発表賞細則に基づき以下の 2 名を選定し、2026 年 3 月に賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属	講演題目
井戸 智斗志	公立はこだて未来大学	NFC におけるパケット位置変調を用いた多重化手法のモデル化
鶴入 宏太	室蘭工業大学	不連続カラーキン時間領域法を用いた感度解析に基づく周期構造を有する光デバイスの最適設計に関する研究

*北海道支部学生ランチ顧問表彰（発表賞）

氏名	所属	氏名	所属
井浦 貴之	北海道大学	間淵 弦	室蘭工業大学

1-2-3 2025 年度学生ランチ活動貢献賞

北海道支部における学生ランチ活動貢献賞細則に基づき以下の 1 名を選定し、2026 年 3 月に賞

状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属
鶴入 宏太	室蘭工業大学 大学院工学研究科 情報電子工学系専攻

1-2-4 2025 年度電気・情報関係学会北海道支部連合大会若手優秀論文発表賞

2025 年度電気・情報関係学会北海道支部連合大会における若手発表を対象として、若手優秀論文発表賞選考委員会において選考を行い、以下の 12 名を受賞者として選定、賞状と副賞を贈呈した（順不同、敬称略）。

氏名	所属	氏名	所属
藤田 優音	室蘭工業大学	鈴木 将太	北海道大学
岡崎 凌大	北海道大学	木塚 惣太	北海道大学
神崎 恵土	北海道大学	福井 秀平	北海道科学大学
大西 優輝	室蘭工業大学	清水 新平	北海道大学
三上 瑠聖	北海道大学	佐藤 太陽	北海道大学
鈴木 結理	公立ほこだて未来大学	祐川 雅治	公立ほこだて未来大学

2. 東北支部

2025 年度は、事業計画に基づき以下の各事業を実施した。また、支部運営委員による事業活性化ワーキンググループを設置して、ジュニア向け事業・地域活性化施策・広報の充実等を重点テーマとして一層の事業充実のための検討を継続して行った。

2-1 事業概要

2-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

- ア. 講演会を 14 件（ハイブリッド 2 件、対面 12 件）実施した。
- イ. 学生と地域企業によるパネルディスカッションを 2 件（ハイブリッド 2 件）実施した。
- ウ. 電気関係学会東北支部連合大会を 1 件実施した。
- エ. 共催・協賛・後援事業を 6 件実施した。

2-1-2 教育事業（定款 第 4 条 ロ号、へ号）

小中校生向け事業を 3 件（共催）実施した。

2-1-3 学生会事業（定款第 4 条ロ号、へ号）

ソサエティ大会において、中国支部学生会と「学生交流イベント」を実施した。また、総合大会において九州支部との共催により「2026 年 IEICE 学生会交流イベント in 総合大会」を実施した。

2-2 選奨（定款 第 4 条 ホ号）

2-2-1 学生優秀論文賞について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した（五十音順、敬称略）。

氏名	所属	講演題目
宮崎 真治	東北大学	プランクトン画像セグメンテーションのための疑似群集画像作成手法の検討
柳澤 太一	東北学院大学	ドローンによるスマート養殖施設向け自律給餌支援機構の設計

2-2-2 学生優秀発表表彰について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した（五十音順、敬称略）。

氏名	所属	講演題目
目黒 実也	秋田大学大学院	高性能化と持続的生産を両立する使用済みリチウムイオン電池電極材料の再生
山本 朔叶	東北学院大学	背景除去を目的とした横顔角度推定手法の検討

2-2-3 優秀学生表彰について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した（五十音順、敬称略）。

氏名	所属	氏名	所属
渥美 航	仙台高等専門学校	佐藤 健人	東北学院大学
阿部 琉輝瑠	東北工業大学	澤田 紘希	東北大学
五十嵐 拓	会津大学	神保 駿	東北文化学園大学
猪狩 浩葵	福島工業高等専門学校	関下 哩駆	八戸工業高等専門学校
遠田 知輝	秋田県立大学	高橋 終真	鶴岡工業高等専門学校
小山田 智典	一関工業高等専門学校	新山 耀彩	八戸工業大学
草刈 颯太	弘前大学	根守 晃平	秋田工業高等専門学校
國分 結里愛	医療創生大学	前田 晃杜	日本大学
今野 嘉乃	山形大学	吉岡 颯太郎	岩手大学
佐藤 慧一	秋田大学	吉田 侑珠	東北大学

2-2-4 感謝状贈呈規定に基づき、東北地区若手研究者研究発表会にて座長を務めた学生に対し次の通

り感謝状を贈呈した（五十音順、敬称略）

氏名	所属	氏名	所属
阿部 航汰	東北工業大学	加藤 花菜	日本大学
阿部 琉輝	東北工業大学	佐藤 蒼史郎	東北工業大学
荒木 峻我	東北学院大学	佐藤 有美	山形大学
安藤 颯太	日本大学	須賀 文哉	東北大学
石山 夕暉	岩手大学	仲澤 拓矢	東北学院大学
伊東 宏樹	東北工業大学	平柳 賢耀	岩手大学
大倉 侑季	東北大学	丸子 兼成	東北学院大学
尾形 海	東北大学	山本 朔叶	東北学院大学
勝浦 陽菜	山形大学		

2-2-5 学生会活動貢献賞について、表彰規程に基づいて次の通り表彰した（五十音順、敬称略）

氏名	所属	事由
日野原 光二	東北大学	貢献賞：他支部と連携した交流活動の促進と学生ランチ活動の認知度向上にかかる貢献

3. 東京支部

コロナ禍を経て、現地／ハイブリッド開催など、イベントごとに最適な開催方法を検討しながら活動を進めた。本部と連携した企業イニシアティブシンポジウムをはじめとする各種シンポジウムや、見学会を企画、実施した。教育事業では、前年度あらたに企画した女子中高生とその保護者に向けた特別授業を開催し、好評を得た。講演者や参加者からのコメント等を考慮して、本年度も内容をブラッシュアップして企画した（2026年5月実施予定）。これらの活動は、来年度も継続実施の予定である。

3-1 事業概要

2025年度の諸事業は、年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

3-1-1 一般事業（定款 第4条 ロ号）

最新の研究開発動向を紹介するシンポジウム企画に加え、企業イニシアティブ活動と連携した第4回企業イニシアティブ活動シンポジウムを開催した。シンポジウム（2回）、見学会（4回）を企画／開催し、大変盛況であった。

3-1-2 教育事業（定款 第4条 ロ号、へ号）

東京支部地域内の学校、企業、NPOなどと連携し、共同主催の教育イベントの公募を行い、5件を採択し、5件とも現地開催にて実施した。また、女子中高生とその保護者に向けたイベントを企画し開催した。

3-1-3 学生会事業（定款 第4条 ロ号、へ号）

- ・見学会（1回）を開催し参加者の知識の向上に役立ち大変有意義であった。
- ・当支部学生会活動のPRの一環として、学会誌12月号「学生会だより」の記事を執筆した。
- ・学生員の卒業研究論文及び修士論文の紹介、また最近行っている研究の紹介のための研究発表会を3月7日に東京都市大学 世田谷キャンパスにて開催した。本年度の発表件数は146件であった。（うちジュニア会員は18件）。
- ・学生ランチの4校が子供科学実験教室、委員会、交流会等を実施した。

3-2 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号）

3-2-1 2025年度東京支部学生奨励賞

東京支部学生奨励賞・ジュニア奨励賞選奨規程に基づき、下記6名を選定し贈呈した。（五十音順、敬称略）

氏名	所属	氏名	所属
飯島 大翔	明星大	柴崎 高德	芝浦工大
石川 知暉	工学院大	白井 光	日大
岩崎 由真	埼玉工大	坪井 龍生	青学大
金子 りな	日本女子大	堀部 大暉	群馬大
川村 隆太	東京農工大	松澤 幹太	明大
栗村 駿輔	東京都市大	山本 拓実	明大

3-2-2 2025年度東京支部ジュニア奨励賞

東京支部学生奨励賞・ジュニア奨励賞選奨規程に基づき、下記2名を選定し贈呈した。（五十音順、敬称略）

氏名	所属
猪内 克也	都立産技高専
波多野 權	都立産技高専

3-2-3 2025 年度東京支部学生功労賞

東京支部学生功労賞選考方針に基づき、下記 6 名を選定し贈呈した。(役職別五十音順、敬称略)

役職	氏名	所属
学生会委員	倪 楠	電通大
学生会委員	松林 潤	明大
学生会委員	矢野 堅斗	千葉大
学生会委員	山下 莉史	日大
学生ランチ構成員	中村 賢斗	電通大
学生ランチ構成員	森下 航	東京都市大

4. 信越支部

2025 度は、信越地区の会員への貢献、地域に対する社会的責務としての活動の点で、昨年度に引き続き対面での支部大会、講演会等のイベントを企画、実施、支援した。

長野県、新潟県内における学会活動の活性化や学生会活動の更なる強化を促進するため、一昨年創設した信越支部優秀論文発表賞を継続し、学生選奨における新たな基盤を確立した。

4-1 事業概要

2025 度の諸事業は年度当初の計画を変更し、下記のようにそれぞれ実施を行った。

4-1-1 一般事業 (定款 第 4 条 ロ号)

- ・支部大会 (1 回、発表件数 195 件) を長岡技術科学大学にて対面で開催した。信越支部からの参加者を中心に、電子情報通信に関する情報交換及び議論の場として役立った。
- ・講演会は 4 回開催。(新潟地区 0 回、長岡地区 3 回、長野地区 1 回)
電子情報通信に関する先端的な知識の向上に役立った。

4-1-2 学生会事業 (定款 第 4 条 ロ号、へ号)

- ・研究交流会：本支部の主催するもの 3 回 (新潟大・信州大学・公立諏訪東京理科大学) を行った。学生会員の交流促進、学生自身の電子情報通信技術に対する意識の向上に役立った。

4-2 選奨に関する事項 (定款 第 4 条 ホ号)

信越支部内における研究活動を評価し表彰した。

4-2-1 2025 度信越支部学生奨励賞

選奨規程に基づき下記の 8 名を選定し贈呈した。(順不同、敬称略)

氏名	所属	講演・研究題目
小林 智希	新潟大学	PolSAR データにおける表面散乱モデルの偏波回転に関する検討
長島 大晟	長岡技術科学大学	Young の反応拡散 Cellular Automaton を用いたエッジ検出手法
青木 慶太	信州大学	隠れ端末情報を考慮した LPWA におけるクラスタリングベースのリソース割り当ての一検討
池田 尋道	信州大学	PORC-OFDM システムにおける変復調方法の一検討
伊藤 和哉	新潟工科大学	USV の自律障害物回避のための一検討
木村 友哉	新潟工科大学	UAV を用いた長距離無線中継の効率的運用のための一検討
渡邊 真江	公立諏訪東京理科大学	濃度微分特徴量を用いた単純 CT 画像からのヒートマップ型弓部大動脈解離部推定
大橋 郁哉	公立諏訪東京理科大学	映像予測モデルに基づく遠隔操縦システムの遅延補償手法の検討

4-2-2 2025 年度信越支部高専学生奨励賞

選奨規程に基づき下記の 3 名を選定し贈呈した。(順不同、敬称略)

氏名	所属	講演・研究題目
佐藤 楓太	長岡工業高等専門学校	胸部 X 線画像に基づく心不全予後リスクの統計的予測モデリング
清水 日菜子	長岡工業高等専門学校	異常検知 AI の識別精度向上に関する検討
内藤 さくら	長野工業高等専門学校	20GHz 超におけるプリント基板での信号劣化要因に関する研究

4-2-3 2025 年度信越支部優秀論文発表賞

選奨規程に基づき下記の 10 名を選定し贈呈した。(順不同、敬称略)

氏名	所属	講演・研究題目
----	----	---------

村西 和奏	信州大学	雑音のない一般通信路符号化におけるコスト制約付き通信路容量
佐藤 真人	長岡技術科学大学	光音響顕微鏡技術の植物科学への応用に向けた基礎的検討
渡邊 拳斗	長岡技術科学大学	光音響・蛍光融合イメージング技術開発における分子プローブ補正手法の検討
渡邊 真江	公立諏訪東京理科大学	濃度微分特微量を用いた単純 CT 画像からのヒートマップ型弓部大動脈解離部推定
小野 斗夢	新潟大学	ラプラシアンフィルタを利用した組織等価液剤中ダイポールアンテナの近傍界利得測定
飯田 優作	長岡技術科学大学	光音響顕微鏡を用いた高速分光イメージングに関する検討
菑澤 知駿	新潟大学	毛髪赤外吸収スペクトルを用いた教師なし学習による毛髪構造分類手法の開発
徐 岳楓	新潟大学	深層学習モデル軽量化に向けた大規模言語モデル活用法の検討
高橋 輝	新潟大学	進化計算を用いた Saliency Map の構築
伊藤 俊哉	新潟大学	ヒト表皮の角質細胞画像からの TEWL 値予測モデルの開発

4-2-4 2025 度信越支部ベストプラクティス賞

選奨規程に基づき下記の研究室を選定し贈呈した。

順位	所 属
1 位	新潟大学工学部知能情報システムプログラム 波動情報研究室 (山田研究室)
2 位	信州大学 工学部 電子情報システム工学科 田久研究室
3 位	新潟大学工学部知能情報システムプログラム スマートライフ研究室 (山崎研究室)

5. 東海支部

2025 年度は、昨年に引き続き定例会議は現地開催とオンラインを利用しての意見交換をしつつ、講演会等はコロナ禍前のように現地開催を積極的に進めた。

5-1 事業概要

2025 年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

5-1-1 一般事業 (定款 第 4 条 ロ号)

講演会 (2 回 参加者合計 41 名) を現地開催 2 回、専門講習会 (1 回 参加数 20 名) を現地開催した。一般見学会を開催した。(参加者 8 名)

5-1-2 学生会事業 (定款 第 4 条 ロ号)

講演会 (1 回、参加者数 68 名)、学生研究発表会 (3 回、参加者合計 617 名) は、学生の知識向上、学会活動の宣伝、他校学生間交流に役立ち有意義であった。卒業研究発表会は 2025 年度も現地開催し、発表件数は 72 名、参加者は 97 名であった。

5-1-3 その他 (定款 第 4 条 ロ号)

電気・電子・情報関係学会東海支部連合大会 (参加者 429 名) を 8 学会で開催し、現地にて共同開催した。プラチナクラブ(名古屋開催)を企画した。(参加者 11 名)

5-2 選奨に関する事項 (定款 第 4 条 ホ号)

5-2-1 2024 年度 東海支部学生研究奨励賞

学生研究奨励賞選奨規程に基づき下記の 13 名を選定し、2025 年 6 月に表彰した。
(氏名五十音順)

氏名	所属 (2025 年 3 月現在)	研究テーマ
■高専/学部		
下井 舜也	名古屋大学 工学部 電気電子情報工学科	次世代大容量光通信ネットワークの制御及び最適設計
關塚 太成	名古屋大学 工学部 電気電子情報工学科	大容量光ファイバ通信を実現する適応デジタル信号処理
■修士		
芦野 公祐	愛知県立大学大学院 情報科学研究科 システム科学専攻	体幹部骨格筋の 3 次元自動認識による AI-BCA と骨格筋の部位別認識
上田 純矢	名城大学大学院 理工学研究科 電気電子工学専攻	単純形状物体の高さ方向推定による姿勢推定による商品陳列自動化
内山 一哲	名古屋大学大学院 工学研究科 情報・通信工学専攻	複素最適化・イベント情報に基づく新たなホログラフィ
神藤 真裕	愛知工業大学大学院 工学研究科 電気電子工学専攻	帯域内全二重通信における端末分布が通信品質に与える影響

杉山 悠一郎	名城大学大学院 理工学研究科 電気電子工学専攻	Wi-Fi RTT と機械学習を用いたドローンの屋内測位方式
本田 宗一郎	名古屋工業大学大学院 工学研究科 工学専攻	評価画像特徴の変化域に応じた比較を実現する画質評価
光岡 日菜子	名城大学大学院 理工学研究科 電気電子工学専攻	Feedback Former を用いた細胞画像セグメンテーションの精度向上
楊 智赫	名古屋大学大学院 情報学研究科 情報システム学専攻	ユーザ移動制御を用いたボディアエリアネットワークにおける高速ネットワークの構築
渡邊 奏汰	名城大学大学院 理工学研究科 情報工学専攻	マルチモーダル AI 技術を用いた内視鏡検査支援技術の開発
■博士		
長谷川 友哉	豊橋技術科学大学大学院 工学研究科 情報・知能工学専攻	視覚的手がかりと顔知覚の相互作用に関する研究
孟 章	静岡大学大学院 自然科学系教育部研究科 光・ナノ物質機能専攻	螺旋状ファイバ回折格子のキラリティ及びその軌道角運動量モード変換器への応用

5-2-2 2025 年度 卒業研究発表会

3月6日、現地(豊橋技術科学大学)にて卒業研究発表会が開催され、下記7名を表彰することとした。(所属五十音順)

最優秀卒業研究発表賞 (1件)		
講演者名	所属	講演題目
高岡円香	名城大学	生成画像の疑似姿勢推定尤度を用いた次視点選択による単純形状物体の姿勢推定精度向上
優秀卒業研究発表賞 (6件)		
講演者名	所属	講演題目
酒井鉄太	名古屋工業大学	SDV 実現のための YANG/NETCONF を用いた車載 SDN に関する研究
伊貝渉	名城大学	自動運転のための三次元地図で作成した距離画像と カラー画像の相関による物体距離推定
山形啓介	名城大学	自動運転のための単眼カメラと移動体を考慮した重要度マップによる自己位置推定
成瀬晴都	愛知県立大学	走行映像からのシミュレーションシナリオ自動生成に向けた周辺車両の相対位置推定
佐藤心哉	名古屋大学	単一高速度カメラによる可視光通信と物体検出の同時リアルタイム実装
伊藤悠真	愛知県立大学	トランスフォーマーの Attention 機構に基づく解釈性向上に関する研究

5-2-3 2025 年度 学業成績優秀賞

学業成績優秀賞の規程に基づき下記34名を表彰した。(所属五十音順)

受賞者名	受賞者所属
板倉 颯悟	愛知県立大学 情報科学部 情報科学科
吉川 遥菜	愛知工科大学 工学部 情報メディア学科
伊藤 航基	愛知工業大学 工学部 電気学科
小関 さくら	愛知工業大学 情報科学部 情報科学科
河合 雄貴	岐阜大学 工学部 電気電子・情報工学科 情報コース
三浦 曜	岐阜大学 工学部 電気電子・情報工学科 電気電子コース
吉住 晃輝	近畿大学工業高等専門学校 総合システム工学科制御情報コース
尾崎 權	近畿大学工業高等専門学校 総合システム工学科電気電子コース
板東 新太	近畿大学工業高等専門学校専攻科 生産システム工学専攻(情報工学)
寺口 翔真	近畿大学工業高等専門学校専攻科 生産システム工学専攻(電気電子工学)
河野 隼弥	静岡大学工学部電気電子工学科 エネルギー・電子制御コース
大西 崇仁	静岡大学工学部電気電子工学科 情報エレクトロニクスコース
後藤 颯太	鈴鹿工業高等専門学校 電子情報工学科
加藤 綺吏斗	豊田工業高等専門学校 情報工学科
丸山 悠斗	豊田工業大学 工学部 先端工学基礎学科
吉田 有輝	豊田工業大学 工学部 先端工学基礎学科
榊田 雅晴	豊田工業大学 工学部 先端工学基礎学科
永田 智也	豊橋技術科学大学 工学部 電気・電子情報工学課程

大柳 英輝	豊橋技術科学大学 情報・知能工学課程
白坂 亘	名古屋工業大学 工学部情報工学科ネットワーク分野
星屋 優丞	名古屋工業大学 工学部情報工学科メディア情報分野
岡田 智希	名古屋工業大学 工学部情報工学科知能情報分野
山崎 郁矢	名古屋工業大学 工学部電気・機械工学科
白木 翔也	名古屋工業大学 工学部電気・機械工学科
田幡 和嗣	名古屋工業大学 工学部電気・機械工学科
石川 徳一	名古屋大学 工学部 電気電子情報工学科
鈴木 総太	名古屋大学 工学部 電気電子情報工学科
南谷 洸	名古屋大学 工学部 電気電子情報工学科
伊藤 有佑	三重大学 工学部総合工学科情報工学コース
宮崎 僚大	三重大学 工学部総合工学科電気電子工学コース
片貝 直登	名城大学 情報工学部 情報工学科
松野 有希	名城大学 理工学部 メカトロニクス工学科
高岡 円香	名城大学 理工学部 電気電子工学科
Robbie Robinson Nelson	沼津工業高等専門学校 電気電子工学科

6. 北陸支部

北陸地区の会員に対する情報提供、会員相互の情報交流を目指し、講演会・研究発表会・見学会等を開催した。また、支部選奨規程に基づき、学生に対する表彰を行った。

6-1 事業概要

2025年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

6-1-1 一般事業（定款 第4条 ロ号）

・講演会（2回）

また、シンポジウム、講演会等の共催、協賛、後援を2件行った。

・電気・情報関係学会北陸支部連合大会（1回）

富山大学が開催を担当し、オンライン形式で2025年9月20日（土）に実施した。

一般講演の発表件数は185件であった。

また、大会内で本支部が担当する招待講演（1回）を実施した。

6-1-2 学生会事業（定款 第4条 ロ号、へ号）

・学生向け講演会と学生交流会（1回）

2026年5月15日（金）に金沢工業大学主催で、学生向け講演会・学生による発表を含む、学生間研究交流会を実施予定である。

その他：本支部が幹事となり理事会・拡大幹部会を金沢市にて開催した。

6-2 選奨に関する事項（定款 第4条 ホ号）

6-2-1 2025年度学生優秀論文発表賞

電気・情報関係学会北陸支部連合大会における学生の発表を対象として、支部学生優秀論文発表賞規程に基づき審査を行い、下記の19名を受賞者として選定した。2026年2月に賞状と賞金を贈呈した。（順不同、敬称略）

受賞者名	所属	論文発表タイトル
佐藤悠介	金沢工業大学	低閾値 GaAsE-pHEMTGAD の評価法
鎌仲俊介	金沢大学	Conv-TasNet における Squeeze-and-Excitation ブロック導入による音声ノイズ除去性能の改善
重杉健士朗	富山県立大学	筆記途中の手書き漢字を学習した筆記量削減
坂口健心	富山県立大学	高分解能 TDC のための DLL に関する検討
山岸慎	富山県立大学	3DGaussianSplatting で用いる入力画像取得自動化のための自律探索手法の基盤構築
小嶋惟睦	富山県立大学	位相調整回路の遅延オフセットの抑制による線形性の向上に関する検討
丸山智也	富山県立大学	多様なトポロジーのための汎用モーション位相エンコーダー
東大智	富山大学	局所環境変化に対する Q 学習を用いた経路探索の検証
桂川征也	富山大学	到来波広がり角を考慮した MIMO モノポールアンテナのビーム最適化
齊藤磨央	福井工業高等専門学校	RAG を用いた発達障害児の自己表現力向上を目的とする個別最適化メダカ対

		話システムの構築
宮澤光輝	福井大学	個人認証精度とスワイプ経路の複雑性
濱口克海	福井大学	BERT を用いた近代日本文学作品のジャンル分類実験
中泰斗	福井大学	CNN モデルサイズと音楽感情分類精度
澤浦大稀	福井大学	ミリ波帯市街地電波伝搬における CNN を用いた遅延プロファイルの推定に関する検討
伊藤琢人	福井大学	ブラックボックス最適化を用いた基地局配置最適化の検討
中条龍斗	福井大学	交差点補正による SVG データ自動生成手法
林峻佑	福井大学	クロスシャード取引の公平性を考慮したトランザクションプール管理法
草原士	北陸先端科学技術大学院大学	HNSW のクエリ探索高速化のための探索要素へのメモリプリフェッチの検討
崎間寛哉	北陸先端科学技術大学院大学	準ミリ波レーダーを使用した姿勢推定システムの研究

6-2-2 2025 年度優秀学生賞

支部優秀学生賞選奨規程に基づき審査を行い、下記の 11 名を受賞者として選定した。2026 年 2 月に賞状と賞金を贈呈した。(順不同、敬称略)

大学名	学科専攻等	学生名
富山大学	理工学研究科 理工学専攻数理情報学プログラム	鞠 沢源
富山県立大学	工学部・電気電子工学科	木村 颯太
北陸先端科学技術大学院大学	先端科学技術研究科	藤田 祐樹
金沢工業大学	工学研究科・情報工学専攻	熊本 悦士
金沢大学	理工学域 電子情報通信学類	渡邊 拓真
福井大学	知識社会基礎工学専攻	濱口 克海
福井工業大学	工学部電気電子工学科	アンドリュウ ウン ウェー チー
富山高等専門学校	電気制御システム工学科	馬場 拓海
国際高等専門学校	国際理工学科	木下 観
石川工業高等専門学校	電子情報工学科	赤井 陽飛
福井工業高等専門学校	電子情報工学科	寛 椋祐

7. 関西支部

関西（大阪府、京都府、奈良県、滋賀県、和歌山県、兵庫県）を拠点としている会員に対するサービスおよび社会的責務として、講演会、見学会、講習会、教育事業等を企画し実施した。講演会等の開催にあたっては、学会の会員数の維持・増加を目指し、多くの方に参加いただけるテーマを選定した。また、学生会活動を通じ、地域学生にとっての学会の価値向上を図った。

7-1 事業概要

7-1-1 一般事業（定款 第 4 条 ロ号）

- ア. 講演会：1 回（計画 1 回）、参加者 約 100 名、テーマ「AI 共生時代の学習支援（事例紹介）」をオンラインで実施
- イ. 見学会：1 回（計画 1 回）、情報通信研究機構（NICT）未来 ICT 研究所（神戸）にて、最先端 ICT 研究会を実施。17 参加者名であった。
- ウ. 講習会：4 回、参加者 102 名（4 回の合計）であった。少人数制の講習会として、機学習の基礎と最新の動向（10 名）、暗号技術とセキュリティ設計の基礎（5 名）に関する講座をそれぞれ 1 回の計 2 回実施した。また、社会人が参加しやすいように 18 時から開始されるイブニングセミナーを「量子コンピューティングの研究開発とビジネス化 ～組み合わせ最適化への適用を見据えて～」というテーマで 2 回開催した。第 1 回は「組合せ最適化のための量子計算の今とこれから」（46 名）、第 2 回は「量子・量子インスパイアード最適化技術の最前線」（41 名）という小テーマで、それぞれ開催した。

7-1-2 教育事業（定款 第 4 条 ロ、ヘ号）

- ア. 公開講座：1 回（計画 1 回）、参加者 10 名、テーマ「Python 入門と移動ロボットプログラミング」で、実習も含めた講座を開催

7-1-3 学生会事業（定款 第 4 条 ロ号、ホ号、ヘ号）

- ア. 講演会：1 回（計画 1 回）、参加者 約 30 名、株式会社ミックウェア、ナビゲーションズ naviAZ 事業部 モビリティ開発部 デバイス通信開発室の田尾 佑太 氏、阪田 梓音 氏を招いて、それぞれ、「技術者としての基盤をどう作るか」と「人生、つまずいたっていいじゃないか」というタイトルの講演をオンラインで実施

イ. 研究発表会：1回（計画1回）、参加者71名（うち発表者37名）、2026年3月6日に龍谷大学にて開催

7-2 選奨に関する事項（定款第4条ホ号）

7-2-1. 2025年度 関西支部学生会支部長賞 奨励賞

関西支部学生会支部長賞規定に基づき下記の4名を選定し、2026年3月6日に贈呈した。

氏名	所属	講演題目
中野 陽翔	近畿大学	ビデオ映像への機械学習を用いた近大マグロに対する給餌終了シーンの検出
米田 悠人	大阪公立大	機械学習モデル軽量化に向けたマルチモードファイバを用いたデータ変換における冗長性の基礎評価
松永 大輝	兵庫県立大	電気光学位相制御を用いた光線形演算器の制御特性解析
CHEN DIHAN	立命館大	矩形波キャリアを用いた単側波帯周波数変調方式に基づくパラメトリックスピーカの復調音圧の改善

7-2-2. 2025年度 関西支部 優秀論文発表賞

関西支部優秀論文発表賞規定に基づき下記の5名を選定し、郵送で贈呈した。

氏名	所属	講演題目
高橋 一心	大阪電通大	ネックバンド型高感度集音デバイスによる口腔咽喉音モニタリング
中村 完太郎	大阪公立大	深層学習を用いたQRコード画像にかかるmotion blurの除去
高寺 昌吾	奈良高専	答案画像からの手書き回答文字の抽出
井出 隼人	奈良先端大	ケーブルの幾何構造の操作により発現するハードウェアトロージャンによる電磁情報漏えい評価
名越 遼	奈良先端大	複数の周波数印加による周波数変換を用いたEcho TEMPEST自己干渉抑制手法の検討

7-2-3. 2025年度 関西支部学生会支部長賞 功労賞

関西支部学生会支部長賞規定に基づき下記の10名を選定し、2026年3月6日に贈呈した。

（敬称略）本賞は関西支部学生会に属する学生のうち、学生会幹事として、支部の活動活性化に多大な貢献をなした功績により表彰するものである。

特別功労賞：龍谷大学 森本 拓真、龍谷大学 中山 太陽、龍谷大学 西川 知樹

功労賞：関西学院大学 尾崎 遼介、関西学院大学 森光 輝、大阪公立大学高等専門学校 井上 奈波、大阪公立大学高等専門学校 吉田 亜太陽、大阪電気通信大学 北山 景、大阪電気通信大学 八木 翔、兵庫県立大学 成田五一

8. 中国支部

2025年度の一般事業では、中国地区における電子情報通信関連分野及び学会の活性化を目指し、会員及び関連する地域の学生、学校、企業を対象とした各種講演会、講習会等を実施した。

学生会事業では、企業と連携して学生による、フレッシュITあわ〜どを中心に活動した。また、選奨に関する事項に基づき学生に対する各種表彰事業を実施した。

8-1 事業

8-1-1 一般事業（定款第4条ロ号）

ア. 講演会：14回実施（主催・共同主催：4回、共催等10回）＜計画：15回（主催3回含む）＞

No	実施日	講演名	会場	主催
1	4月22日	『カーボンニュートラル時代の電力系統への課題取組みについて』	中国電力ネットワーク㈱ およびオンライン (Zoom)	電気学会
2	4月28日	『Application of Artificial Intelligence for EV Charging/ Discharging Scheduling and Dynamic Pricing』 (和訳) 電気自動車の充放電スケジューリングとダイナミックプライシングへのAI応用	広島大学	電気学会
3	5月23日	『量子計算の基礎と最近の発展』	広島YMCA国際文化センター オンライン(Zoom)	情報処理学会
4	7月9日	『Actuator-Enhanced Imaging and Diagnostics for Personalized Healthcare and Physiological Modeling』	鳥取大学	電気学会

5	7月24日	『ICT 利用活用セミナー ～AI×ICTによる地域社会DXの推進～』	オンライン(Teams)	中国総合通信局 電子情報通信学会
6	9月2日	「パワーエレクトロニクスを応用した電力システムの制御技術」	広島大学工学部	電気学会
7	11月21日	『技能五輪全国大会に挑戦し続けること ～広島から世界へ』	エールエール A館 会議室	中国・四国工学教育協会 産業教育 部会
8	11月28日	『人物行動理解 AI：見えるものから見えないもの、そして生成へ』	山口大学	電子情報 通信学会
9	12月4日	『発振器の結合系にみられる同期パターンの解析と電子回路実験』	広島工業大学	電子情報 通信学会
10	12月22日	『AI スーパーコンピュータにおける LLM 学習処理性能の計測と可観測性』	広島YMCA	情報処理学会
11	2026年 1月27日	「スマートシティ・ビル IoT プラットフォーム Ville-feuille を活用したサービスのご紹介」	㈱中電工本店	電気設備学会
12	2026年 2月20日	「日本の保護リレー技術のあゆみと国内外の技術動向」	中国電力 ネットワーク㈱	電気学会
13	2026年 3月3日	「ICT 研究開発支援セミナー (高専 ICT ソリューション発表会)」	TKPガーデンシティ PREMIUM広島駅北口 ホール3A	中国総合通信局 電子情報通信学会
14	2026年 3月19日	「広帯域の動作を想定したインバータモータの課題と対応」	岡山大学	電気学会

イ. 見学会：電気学会および中国・四国工学教育協会との共催により2回実施

<計画：関連団体と提携し、年1回程度開催>

『令和7（2025）年度 電気学会 中国支部 見学会』

（株式会社エネコムデータセンター、JFEエンジニアリング株式会社、笠岡モノパイル製作所）

『2025年度 中国・四国工学教育協会産業教育部会』

（広島県立広島叡智学園 中学校・高等学校）

ウ. 専門講習会：電気学会との共催により1回実施 <計画：関連団体と提携し年1回程度開催>

『現場での最新技術による業務改善と補助金の動向』

エ. シンポジウム・後援イベント・協賛イベント：後援4回実施

『IPv6セミナー2025 Summer』

『第27回IEEE広島支部学生シンポジウム（HISS 27th）』（IEEE広島支部）

『IPv6セミナー2026 Winter』

『大学等におけるクラウドサービス利用シンポジウム2026』（広島大学情報メディア教育研究センター）

オ. 電気記念日行事：共催団体の一員として2023年3月の記念行事に参加予定

日時：2025年3月25日（水）14：00～15：40

場所：広島市中区小町4-33 中国電力本社ビル 2階大会議場

カ. 電気・情報関連学会中国支部連合大会：2025年10月25日（土）

特別講演：題目『高電力密度化を実現する電源技術の潮流』

講師：兵頭 貴志 氏（株式会社エヌエフ回路設計ブロック パワー事業本部）

8-1-2 教育事業（定款 第4条 ロ号、へ号）<計画：大学等にて小中高生向けイベントを共同主催>

中国支部学生会にて中国地方の学生を対象にIoT活用に関するアイデア・作品のコンテストを主催

イベント名：『フレッシュITあわ〜ど2025』

今年度テーマ：<手の込んだ手抜き〜面倒なことはコンピュータにやらせよう〜>

開催日・場所：2025年11月8日（土） 広島市立大学 サテライトキャンパス

応募総数：58件（アイデア部門：大学生9件／高校生46件、作品部門：3件）

表彰件数：9件（アイデア部門：大学生3件／高校生3件、作品部門：3件）

工夫点：過去の問題点を解消するため、従来のポスター発表からスライド発表形式を採用し、アイデア部門から順に発表を実施した。この形式により、発表終了後ただちに審査集計および賞状準備に着手することが可能となり、発表者の待機時間を通常の休憩時間（30分）内に収めることができた。

8-1-3 学生会事業（定款 第4条 ロ号、ホ号、へ号）

- ア. 学生向け講演会及び見学会
 モバイルアプリ講習会の開催および講演会の実施
 演題：『～開発者だけじゃない！～モバイルアプリ開発に関わる上でおさえておく10のポイント』
 講師：岡本 和也（株式会社コトブキソリューション ケムコゲームビジネス推進事業部）
 開催日：2025年6月19日（木） 9:00 ～ 2025年9月19日（金）17:45
 場所：オンデマンド(YouTube)で公開
- イ. 学生会自主活動の活性化：学生会と支部との連携を図り、学生会自主活動への支援
 <フレッシュITあわ〜ど>実行委員にてイベント開催に向けた開催方法等を検討
 【実行委員会開催（オンライン開催） 年4回】
- ウ. 学生員による支部・支部学生会ホームページの維持管理
 学会活動の普及を目的に、広島市立大学の学生員にてホームページを更新（35回）

8-2 選奨（定款 第4条 ホ号、ヘ号） ※詳細は【別紙2】参照

- ア. 連合大会発表論文の中から優秀な発表を行った学生の論文を選定（発表論文数の10%を四捨五入）し、電子情報通信学会中国支部における連合大会奨励賞として表彰
 【連合大会奨励賞表彰式】
 開催日：2026年3月6日（金）16：40 ～ 17：30
 受賞者：13名

※地域順

地域	氏名	学校名	題目
広島	畑本 真優	県立広島大学	運搬遅延を考慮したバッテリー交換型 EV による電力輸送手法
	津島 裕佳	県立広島大学	動的目標値設定と電力の適応再配置による電力需給におけるダックカーブ改善戦略
	赤堀 愛弓	県立広島大学	インフラレス環境下における通信機能維持に関する一検討
	畑 朋宏	広島大学	複数マイクロホンに基づくクレーン吊り荷の振れ角推定のための予測器の設計
	野村 佑哉	福山大学	人工知能を用いた3次元ゲーム開発の効率化
岡山	大澤 凜太郎	津山工業高等専門学校	リターン最大化のための血統を考慮した競馬予測モデルの提案
	岸本 日和	岡山県立大学	薄膜MOSバラクタによるPush・Push発振器の特性検討
	山口 雄大	岡山県立大学	欠損パターン選択型画素復元手法の予備的性能評価
	平田 諒	岡山大学	Linux Extensible Scheduler Class を用いた特定タスクを優先するユーザランドスケジューラ実現の検討
	谷口 奏仁	岡山大学	周波数共用を行うマルチバンド無線システムにおける非線形歪雑音キャンセラによるシステム間干渉低減効果
吉川 恵一郎	岡山大学	レクテナへの入射角による再放射を抑制するためのインピーダンス整合表面の提案	
山口	今橋 崇太郎	宇部工業高等専門学校	対立点を考慮した差分進化アルゴリズムの探索性能改善に関する研究
	内田 健太	山口大学	Multiple Instance Learning における動的閾値設定手法

- イ. 高校、高専、短大の優秀卒業生表彰を、関連学会と連携して連合大会事業の一環として実施
 受賞者：中国地区57校89名

対象	表彰学校数	表彰者数	
高校	広島県	10校	15名
	岡山県	13校	18名
	島根県	6校	13名
	鳥取県	5校	9名
	山口県	14校	16名
高専	中国地区	8校	17名
短期大学	山口県	1校	1名
合計	57校	89名	

- ウ. 学生功労賞の表彰を学生会活動の発展に貢献した学生に対し実施

【学生功労賞表彰式】

開催日：2026年3月6日（金）16：40 ～ 17：30

受賞者：9名

※『フレッシュITあわ〜ど』開催等により学生会活動の発展に貢献した学生会役員

	氏名	学校名	所属
1	羽鹿 友明	広島市立大学	大学院 情報科学研究科 情報工学専攻
2	篠原 彰斗	広島大学	情報科学部情報科学科データサイエンスコース
3	溝部 壮太郎	山口大学	大学院創成科学研究科 電気電子情報系専攻
4	清水 優太	鳥取大学	大学院 持続性社会創生科学研究科 (2024～)
5	田辺 七海	広島工業大学	大学院 工学研究科 情報システム科学専攻
6	寺尾 光一郎	岡山県立大学	大学院 情報系工学研究科システム工学専攻
7	青山 優希	岡山理科大学	大学院 理工学研究科 システム科学専攻
8	竹之内 優大	島根大学	大学院自然科学研究科理工学専攻 (2025年4月から)
9	福山大学	福山大学	工学研究科情報処理工学専攻 (25年4月から)

9. 四国支部

2025年度は、四国における電子・情報・通信工学分野での学術・技術振興に寄与できるよう、講演会、講習会、連合大会などの事業を実施し、四国内の研究者、技術者、学生へのサービス充実を目指した。昨年度に引き続き、四国支部地域内の学校、企業、NPOなどと連携し、小中高生や専門学校の学生向けの教育イベント(メーカーズチャレンジ)へ協賛した。支部の会員増を図るため、今年も新規事業の枠組みで「学生大交流会」を実施し、82名の学生が参加した。

9-1 事業概要

2025年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

9-1-1 一般事業 (定款 第4条 ロ号)

- ・講演会は2回実施した。
- ・専門講習会はいずれも対面にて2回(香川高専、香川大)実施した。
- ・支部協賛・後援事業は次世代光フォーラムの1回実施した。
- ・2025年度電気・電子・情報関係学会四国支部連合大会(2025年9月27日)は、対面にて実施した。講演論文について、論文を収録した論文集(ダウンロード版、CD-R版)が9月22日に発行され、公知された。(申込件数:214件、発表件数:210件)

9-1-2 学生会事業 (定款 第4条 ロ号、ホ号、ヘ号)

- ・学生向け講演会は2回実施し、優れた業績を持つ講師を招き、参加者は幅広く技術情報や知識を得た。
- ・学生ランチとして、2校(愛媛大、徳島大)が講演会、見学会、交流会等の活動を実施した。

9-2 選奨に関する事項 (定款 第4条 ホ号)

9-2-1 令和7年度電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞

電気学会・電子情報通信学会・情報処理学会四国支部奨励賞選奨規程に基づき下記の51名を選定し、各機関の卒業式・修了式において贈呈した。(機関別、敬称略)

No.	学校名(和)	氏名(和)
1	愛媛大学	藤川慎吾
2	愛媛大学	平岡道
3	愛媛大学	高橋 圭太
4	愛媛大学	堂元 優佑
5	愛媛大学	前田 裕斗
6	愛媛大学	沖中 心兵
7	愛媛大学	平本宗大
8	高知大学	中谷 優月
9	高知大学	豊田 愁維
10	徳島大学	宮崎 紘匡
11	徳島大学	川口 請哉
12	徳島大学	河野 裕貴
13	徳島大学	中西 琴美
14	徳島大学	瀬川 泰史
15	徳島大学	松原 優翔
16	徳島大学	伊月 達昌
17	徳島大学	吉原 航輝
18	徳島大学	一松 大智
19	香川大学	藤原 漱士
20	香川大学	菊池 志帆
21	香川大学	宮本 悠永
22	香川大学	室谷 帆人
23	香川大学	吉岡 拓未
24	香川大学	藤原 凌

25	徳島文理大学	佐山 航太郎
26	徳島文理大学	西条 友花
27	徳島文理大学	森 純平
28	高知工科大学	前田 凜空
29	高知工科大学	小原勇人
30	高知工科大学	大山久美子
31	高知工科大学	松本俊輔
32	高知工科大学	宮本健太
33	四国大学	ホサイン エムディ サミル
34	阿南工業高等専門学校	宮内 優衣
35	阿南工業高等専門学校	木下 陽平
36	阿南工業高等専門学校	中岡 涼太
37	高知工業高等専門学校	前浦 圭哉
38	高知工業高等専門学校	該当者なし
39	高知工業高等専門学校	高橋 蓮舜
40	新居浜工業高等専門学校	マナカンチクル シリラート
41	新居浜工業高等専門学校	田籠康希
42	新居浜工業高等専門学校	石川 眞衣
43	香川高等専門学校 高松キャンパス	井川 友誠
44	香川高等専門学校 高松キャンパス	中山 智継
45	香川高等専門学校 高松キャンパス	和気 佑弥
46	香川高等専門学校 宅間キャンパス	今井 颯
47	香川高等専門学校 宅間キャンパス	白井智也
48	香川高等専門学校 宅間キャンパス	堀田 成
49	香川高等専門学校 宅間キャンパス	佐藤綾花
50	弓削商船高等専門学校	川野 裕豊
51	弓削商船高等専門学校	森井 裕騎
52	弓削商船高等専門学校	沖津 真歩

10. 九州支部

2025年度は、講演会などオンライン開催および、対面とオンラインのハイブリッドでの開催を行うなど新たな活動方法を取りながら、九州支部管内の研究者、技術者、学生へのサービス充実を目指した。

10-1 事業概要

2025年度の諸事業は年度当初の計画に沿ってそれぞれ実施した。

10-1-1 一般事業（新定款第4条ロ号）

- ア. 講演会：特別講演会をハイブリッドにて1回開催、一般講演会2回を開催した他、協賛・後援の講演会、シンポジウムを10件実施した。
- イ. 専門講習会：琉球大学にて講師2名による「データサイエンス・AIの動向と社会への応用」を開催。参加者20名と盛況であった。
- ウ. ワークショップ：アンテナ・伝搬における設計・解析ワークショップ「アンテナ伝搬基礎講座」をオンラインにて5日間開催。学生、企業、大学関係者など受講登録287名と大変盛況であった。
- エ. 電気・情報関係学会九州支部連合大会：福岡工業大学にて2日間にわたり開催された。参加者は一般講演数289件、学生ポスターセッション42件、企業講演9件、招待講演1件、特別講演1件、企画セッション6件、聴講者262名の総数603名を数え大変盛況であった。
- オ. 総合通信局連携企画：九州総合通信局と当支部の連携事業として、連合大会の企画セッションにて1名の講師を招聘し、講演を実施した。

10-1-2 教育事業（新定款第4条ロ、へ号）

- ア. 子供の科学教室：九州産業大学にて「お手軽電子工作 ぐるぐる大作戦！～ふしぎふしぎまかふしぎ！音と風と電気のみみつ～」を開催。小学生20名が参加し好評であった。また、九州工業大学飯塚キャンパスにて「不思議がいっぱい科学の世界」を開催、小学生5名、中学生1名が参加し好評であった。
- イ. ものづくり教室：有明高専と共催にて「第20回エレクトロニクスものづくり体験教室2025」を開催。FMはこらじ作成を実施した。小中学生34名が参加し好評であった。

10-1-3 学生会事業（新定款第4条ロ、ホ、へ号）

- ア. 学生会講演会：学生会講演会：学生会員で構成された学生実行委員会を中心に、福岡工業

大学にて開催された。講演 144 件、聴講者 73 名が参加し、高専生から大学院生まで幅広い学生が参加する盛況な会となった。

- イ. 学生ランチ交流会：学生会講演会において、管内 11 の学生ランチ代表者が活動報告のポスター発表を行い、学会活動の周知を図った。あわせて、聴講者投票により優秀な活動を行ったランチを選出し、表彰を行った。また、学生ランチ委員会を開催し、各ランチ間の情報交換および交流を図った。
- ウ. IEICE 学生会交流イベント in 総合大会：2026 年度総合大会において、東北支部と共催にて開催した。発表 5 件、聴講者 5 名が参加し、他大学の学生との交流が行われた。また、東北支部および当支部所属学生ランチの活動紹介ポスターを 3 月 9 日～10 日の期間にポスター会場へ掲示し、大会参加者へ広く周知を行った。
- エ. 学生ランチ：11 ブランチが活動し、各自講演会や見学会、交流会等を実施した。

10-2 選奨に関する事項（定款第 6 条ホ号）

10-2-1 2025 年度 連合大会講演奨励賞

「電気・情報関係学会九州支部連合大会における講演奨励賞」表彰規程に基づき下記 8 名を選定し、2026 年 1 月付で表彰した。（順不同、敬称略）

授賞者	所 属	演 題
本田 敬士	九州大学大学院システム情報科学府 電気電子工学専攻	フレキシブル基板を用いた 5.7GHz 帯円偏波スロットアンテナの開発
田村 紳	福岡工業大学大学院工学研究科 情報工学専攻	RNN における場所細胞とエピソード依存細胞の形成
中淵 海斗	九州大学大学院システム情報科学府 電気電子工学専攻	地上波放送、LTE、Wi-Fi 用 3 バンド共用エネルギーハーベスティング回路の開発
三輪 泰弘	大分大学大学院工学研究科工学専攻 知能情報システム工学コース	スマートフォンで稼働する車載用衝突回避警報システム
LI HAITAO	九州大学大学院システム情報科学府 電気電子工学専攻	反射角制御型メタサーフェスの構造設計と電波放射特性への応用
藤井 俊輔	九州大学大学院システム情報科学府 電気電子工学専攻	基板集積同軸線路を用いた再構成可能帯域阻止型バランの開発
箴島 未輝夫	九州大学大学院システム情報科学府 情報理工学専攻	医療検査項目の適応的選択法
沖本 明良	大分大学大学院工学研究科 博士前期課程工学専攻	プロセッサの ALU に対する命令レベル遷移故障テスト

10-2-2 2025 年度 学生会講演奨励賞

学生会表彰規程に基づき下記 14 名を選定し、2026 年 1 月付で表彰した。（順不同、敬称略）

授賞者	所 属	演 題
奥山 椋太	九州工業大学大学院情報工学府 情報創成工学専攻	カプセル内視鏡のための低演算量型移動方向判定システムの実装
木村 達平	熊本大学大学院自然科学教育部 半導体・情報数理専攻	1 次元相関ランダムウォークの正側滞在時間について
林 祐太	宮崎大学工学部工学科 機械知能工学プログラム	非侵襲的手法による家畜の口腔温度測定システム
米光 哉汰	長崎大学大学院総合生産科学研究科 共生システム科学コース	ミリ波 FM-CW レーダと接触型センサーを用いたバイタルセンシングの比較・検討
今村 優希	九州工業大学情報工学部 情報・通信工学科	長距離無線伝送におけるダイバーシチ技術を用いた耐干渉変復調手法
白石 倭士	長崎大学大学院総合生産科学研究科 総合生産科学専攻	シールド巻線付きトランスの EMC 最適設計に関する研究
中原 幹太	九州大学大学院総合理工学府 総合理工学専攻	マイクロ LED 駆動 LSI における DAC 回路の最適化
花岡 千里	西日本工業大学工学部 総合システム工学科	FPGA を用いた音響計測によるガス漏洩検知システムに関する研究
高杵 慎介	近畿大学産業理工学部情報学科	CSI 固有値を使った不正基地局検出の一考察
堤 勇大	久留米工業大学大学院工学研究科 電子情報システム工学専攻	AI を用いたぶどうの摘粒作業支援システム開発
高橋 悠真	九州工業大学大学院情報工学府 情報創成工学専攻	機械学習を用いた散乱媒質除去及び領域別光子推定による視認性向上に関する研究
渡辺 拓哉	宮崎大学大学院工学研究科工学専攻	葉内部領域の可視化を目的とした葉画像における葉脈トポロジーの抽出手法
渡辺 悠斗	宮崎大学工学部工学科 機械知能工学プログラム	害獣忌避を目的としたロボットの画像認識と追従制御手法

授賞者	所 属	演 題
田中 浩介	九州工業大学大学院情報工学府 情報創成工学専攻	赤血球ホログラム画像の劣化に対する深層学習モデルの 精度評価
奥山 椋太	九州工業大学大学院情報工学府 情報創成工学専攻	カプセル内視鏡のための低演算量型移動方向判定システ ムの実装

10-2-3 2025 年度 成績優秀賞

学生会表彰規程に基づき下記の 57 名を選定し、2026 年 3 月付で表彰した。（順不同、敬称略）

学 校	学 部	学 科	表彰者名
九州大学	工学部	電気情報工学科 計算機工学コース	平田 海大
		電気情報工学科 電子通信工学コース	小村 貫将
福岡大学	工学部	電子情報工学科	吉田 悠人
福岡工業大学	情報工学部	電子情報工学科	織田 竜次
		システムマネジメント学科	徳島 由依
		情報システム工学科	中野 朝貴
		情報通信工学科	上野 雄大
九州産業大学	理工学部	情報科学科	酒井 稜平
		電気工学科	藤山 大響
九州工業大学	工学部	機械知能工学科 知能制御工学コース	末廣 真弥
		電気電子工学科 電子システム工学コース	高野 隼
	情報工学部	物理情報工学科	白岩 大弥
		情報・通信工学科	向田 怜
		知能情報工学科	永田 佳己
知的システム工学科	弓削田 恕功		
北九州市立大学	国際環境工学部	情報システム工学科	恒松 花音
久留米工業大学	工学部	情報ネットワーク工学科	柚木 涼太
西日本工業大学	工学部	総合システム工学科 電気情報工学系知能制御コース	馬場 希
		総合システム工学科 電気情報工学系情報コース	下川 北斗
近畿大学	産業理工学部	電気電子工学科	花岡 千里
		情報学科	平岡 龍之介
佐賀大学	理工学部	理工学科 情報ネットワーク工学コース	田中 美優
		理工学科 知能情報システム工学コース	木下 広大
		理工学科 電気エネルギー工学コース	山根 雅也
		理工学科 電子デバイス工学コース	佐々木 駿
長崎大学	情報データ科学部	工学部 電気電子工学コース	西野 温
		データサイエンスコース	織田 聖心
		インフォメーションサイエンスコース	高倉 凜之良
長崎総合科学大学	総合情報学部	工学部 電気電子工学コース	吉川 なぎさ
		総合情報学科 知能情報コース	坂口 悠大
熊本大学	工学部	情報電気工学科 電子工学教育プログラム	吉村 竜
		情報電気工学科 電気工学教育プログラム	伊藝 季起
		情報電気工学科 情報工学教育プログラム	藤 蛍太郎
		半導体デバイス工学課程	花田 陽翔
崇城大学	情報学部	情報学科 未来情報コース	福島 将馬
		情報学科 電子通信コース	村山 心
		情報学科 知能情報コース	桑村 佳汰
東海大学	文理融合学部	人間情報工学科	日高 史翔
大分大学	理工学部	創生工学科 電気電子コース	川人 彩楓
		創生工学科 電気電子コース	赤尾 颯斗
		共創理工学科 知能情報システムコース	平山 莉子
宮崎大学	工学部	工学部 電気電子工学プログラム	野田 智広
		工学部 情報通信工学プログラム	山城 孝輔
鹿児島大学	工学部	工学部 電気電子工学プログラム	木村 陽太
		先進工学科 情報・生体工学プログラム	磯元 康成
第一工科大学	工学部	情報・AI・データサイエンス学科	高濱 東吾
琉球大学	工学部	工学部 電子情報通信コース	相生 一瑛
		工学部 電気システム工学コース	島田 興助
		工学部 知能情報コース	中曾根 光
北九州工業高等専門学校	生産デザイン工学科	知能ロボットシステムコース	宮崎 佑奈
		情報システムコース	蔵西 大河
有明工業高等専門学校	創造工学科	情報システムコース	永島 健翔

学校名	学科名	表彰者
北九州工業高等専門学校	生産デザイン工学科 知能ロボットシステムコース	吉田 温
	生産デザイン工学科 情報システムコース	蔵西 大河
有明工業高等専門学校	創造工学科 情報システムコース	永島 健翔

久留米工業高等専門学校	制御情報工学科	田村 司宇
佐世保工業高等専門学校	電子制御工学科	田崎 結奈
熊本高等専門学校	人間情報システム工学科	井上 莉比斗
	情報通信エレクトロニクス工学科	上村 拓也
	制御情報システム工学科	清田 駿介
大分工業高等専門学校	電気電子工学科	佐川 俊輔
	情報工学科	田中 玲鳳
都城工業高等専門学校	電気情報工学科	須志田 昊
鹿児島工業高等専門学校	情報工学科	牧浦 慎悟
	電子制御工学科	永瀬 遥己
	電気電子工学科	鯨坂 悠真
沖縄工業高等専門学校	情報通信システム工学科	甲斐 蒼眼
	メディア情報工学科	池原 武人

10-2-4 2025 年度 学術奨励賞

学生会表彰規程に基づき下記の 24 名を選定し、2026 年 3 月付けにて表彰した。(順不同、敬称略)

所 属		表彰者
九州大学	大学院システム情報科学府 電気電子工学専攻	貝出 凌汰
福岡大学	大学院工学研究科 電子情報工学専攻	勝部 諒真
九州産業大学	大学院情報科学研究科 情報科学専攻 IoT・セキュリティ領域	田中 凌聖
九州工業大学	大学院工学府 工学専攻	篠崎 日比樹
九州工業大学	大学院情報工学府 情報創成工学専攻	小野 雄世
北九州市立大学	大学院国際環境工学研究科 情報工学専攻	小田 舞遥
久留米工業大学	大学院工学研究科 電子情報システム工学専攻	伊福 佑耶
近畿大学	大学院産業理工学研究科 産業理工学専攻	松井 一朗
佐賀大学	大学院理工学研究科 理工学専攻電気電子工学コース	山下 日和
長崎大学	大学院総合生産科学研究科 総合生産科学専攻	白石 倭士
長崎総合科学大学	大学院工学研究科 電子情報学専攻	鈴田 高登
熊本大学	大学院自然科学教育部 博士前期課程 情報電気工学専攻	徳石 和樹
崇城大学	大学院工学研究科 応用情報学専攻	藤末 尚久
大分大学	大学院工学研究科 工学専攻知能情報システム工学コース	神野 翔太
宮崎大学	大学院工学研究科 工学専攻エネルギー系コース	堂込 卓良
鹿児島大学	大学院理工学研究科 工学専攻 電気電子工学プログラム	豊満 翔
琉球大学	大学院理工学研究科 工学専攻	千々和 健登
北九州工業高等専門学校	専攻科 生産デザイン工学専攻	白石 桃香
有明工業高等専門学校	専攻科 生産情報システム工学専攻	吉開 彩智
佐世保工業高等専門学校	専攻科 複合工学専攻 情報工学系	原田 青空
熊本高等専門学校	専攻科 電子情報システム工学専攻	黒木 和維
大分工業高等専門学校	専攻科 電気電子情報工学専攻	大石 健太
鹿児島工業高等専門学校	専攻科 電気情報システム工学専攻	紺屋 琳可
沖縄工業高等専門学校	専攻科 創造システム工学専攻	前原 東洋

以上

IV. 2025 年度役員及び代議員の構成

2025 年度役員

29 名

役 職 名	先 任	後 任
会 長	植松 友彦	
次期会長	辻 ゆかり	
副会長（学術強化担当）	高田 潤一	藤井 俊彰
副会長（学会運営・組織強化担当）	大橋 弘美	水落 隆司
総務理事	島田 達也	高橋 篤司
会計理事	藤井 威生	小崎 成治
編集理事	山里 敬也	柏野 邦夫
企画理事	浅井 孝浩	大橋 正良
調査理事	足立 朋子	野村 祐士
編集長（理事）	笹瀬 巖	
企画戦略室長（理事）	今井 尚樹	
規格調査会委員長（理事）	浅谷 耕一	
ESS 会長（理事）	尾上 孝雄	
CS 会長（理事）	眞田 幸俊	
ES 会長（理事）	松尾 慎治	
ISS 会長（理事）	篠田 浩一	
ESS 次期会長（理事）	岩本 貢	
CS 次期会長（理事）	高橋 徹	
ES 次期会長（理事）	加藤 和利	
ISS 次期会長（理事）	内田 誠一	
監 事	荒川 薫	浅井光太郎

2025 年度代議員

106 名

相澤 清晴	太田 賢	吉敷由起子	高橋 徹	西原 基夫	森 洋二郎
青木 直史	大槻 知明	北岡 教英	高橋 宏行	橋本 俊和	森川 博之
浅井光太郎	大橋 弘美	葛岡 成晃	高橋 応明	廣瀬 哲也	森本 佳太
浅井 孝浩	岡 宗一	楠 晃典	高橋 康宏	深沢 徹	山里 敬也
浅谷 耕一	岡田 啓	久世 竜司	高村 誠之	藤井 威生	山下 和也
足立 朋子	奥 健太	蔵田 武志	田口 亮	藤井 俊彰	山末 耕平
荒川 薫	尾上 孝雄	小林 玄	武山 眞弓	藤島 実	山中 直明
池田奈美子	影広 達彦	斎藤 英雄	伊達木 隆	藤元 美俊	山本 剛之
石川 悦子	笠原 正治	佐々木宣介	立野 勝巳	本田 和博	李 鯤
石田 賢治	梶川 嘉延	笹瀬 巖	田中 清	松浦 祐司	渡辺 一帆
伊藤 京子	片山 貴文	佐藤 真一	辻 ゆかり	松尾 慎治	和田山 正
井上 中順	金谷 晴一	眞田 幸俊	富田 章久	松尾 綾子	
井上 真杉	鎌部 浩	佐波 孝彦	中尾 彰宏	松下 剛治	
今井 尚樹	萱野 良樹	篠田 浩一	中島 誠	松田 広	
上嶋 明	川添 雄彦	澁谷 智治	永田 真	松田 勝敬	
上野 雅浩	川西 哲也	島田 達也	中野 義昭	松本健一郎	
植松 友彦	川端 明生	島本 隆	中村 元	水落 隆司	
圓道 知博	河東 晴子	平 明德	仲村 泰明	宮奥 健人	
大石 昇	菊間 信良	高田 潤一	永森 正仁	村松 正吾	

V. 2026 年度役員候補者及び代議員の選挙

2026 年度役員候補者（規則第 5 章）及び代議員（定款第 5 条 3 項及び 6 項）の選挙は、2026 年 2 月 3 日～3 月 3 日に Web による投票で実施した。